

540

96



始



9.1.9



天文要覽

大正
15. 2. 10
内交

天文要覽序



小野子肅。篤學之士也。著
 述。至老不倦。頃者著天文
 要覽。徵序于予。吁。予之不
 文。何足以序子肅所著哉。
 雖然。其請亦有不可得辭
 者焉。蓋子肅之於天文也。

其研鑽所由遠矣。子肅仙臺人。明治初。在東京會同藩古山貞。以曉曆學。徵京師。過東京。子肅亦將以事西上。乃胥携上程。經東海道。貞每夜說列宿四禽星象甚詳。子肅心竊竒之。其

後子肅應橫濱獨逸使館聘。為錄事。館有伯林者。一日示獨逸版星圖。圖載一百八星像。中有獸帶十二星像。子肅見而益竒之。以為吾他日研鑽天文。聯四禽獸帶而作圖。以通觀東

西天象學說。不亦更奇乎。
於是奮然從事于研鑽者。
三十餘年。甲辰役興。子肅
徵天象。稽古言。畫四禽周
匝守護皇極三垣狀。配以
獸帶十二星像。作一圖。其
意蓋在于寄託天象而爲

我皇軍鼓舞士氣也。迨
役罷。訂正補修。遂成此著
矣。因想今茲東宮環游
歐洲列國親交益加密。而
航路往來。年多一年。則所
謂通觀東西天象學說者。
必將比肩接踵而生。當是

時。子肅此著而出也。其事似有不偶然者存焉。顧予亦與子肅同鄉。又常深有感乎天文自然之妙者。迨聞子肅有此著。心竊喜吾好之不孤也。乃慫恿俾上梓以問于世。是子肅之所

以特徵予序而予之所以不以不文辭者也。

大正十年十二月識于京城倭城臺官廨東窗下

皋水齋藤實



序
天吾不可知乎。日月縣象。
列星森羅。四時行焉。百物
生焉。天吾可知乎。日月何
以縣象。列星何以森羅。四
時何以行焉。百物何以生
焉。吁。此二者將孰決也。亦

唯知之為知。不知為不知而已。蓋曆象日月星辰。敬授民時。土圭之法。測深正景。以求地中。凡此類。經傳所載頗衆。迨至後世。有史。輒必有天文志而論述之。則星學觀占之說。傳于我。

東洋舊矣。然上古悠邈。其詳不可得而知。史漢以降。大率陳陳相因。未嘗有所發明。視諸西洋學者。析理推數。積久而益精。其不及遠甚。老友仙臺小野子肅。篤學之士也。前者寄其所

著天文要覽如千卷曰。此
吾多年用力所為。貫穿東
西諸說。而間之以區區管
見。自謂未必無小補于我
星學。吾將鋟梓問世。願子
序之。予諾之。未果。會客歲
其稿與梓逢火而燼。子肅

慨然。更起稿結撰。於舊稿
頗有所改修。拮据周年而
成。其用力誠可謂勤矣。昔
林羅山年七十五。明曆大
火。其書庫俄為烏有。浩歎
痛恨以歿。今子肅七十九。
以年則已過羅山。以事則

其平生心血所注。非復羅
山藏書之比。乃能奮發不
撓。以成其志業。孰謂古今
人不相及耶。獨愧予賦性
頑鈍。疎于星學。其將何言
以序子肅之著哉。易曰。形
而上者謂之道。形而下者

謂之器。蓋器者有形。故其
迹昭然可知。道者無形。故
其體寂然不可知。顧曩之
所謂吾可知者。器也。其不
可知者。道也。然其實雖則
道也。豈真不可知者哉。易
又曰。寂然不動。感而遂通。

天下之故。夫寂然不動者。感而遂通之。故善求道者。據其已然。而推其所以然。則其知之亦不為難也。子肅既已舉其器而論述成卷。則其道者。又必有知而教之也歟。頃者子肅重鋟

功竣。乃書而問之。且以為序。

大正甲子南至日

藻洲學人牧野謙撰

佐藤誠軒書



自序



龍龜虎鳳四禽。東洋學者因以說天象也。尚矣。張氏曰。紫宮爲皇極之居。太微爲五帝之廷。明堂之房。大角有席。天市有坐。蒼龍連蜷於左。白虎猛據

於右。朱雀奮翼於前。靈龜卷
首於後。黃氏曰。二十八舍。東方
七宿。角亢氐房心尾箕。為蒼
龍之體。北方七宿。斗牛女虛
危室壁。為靈龜之體。西方七
宿。奎婁胃卯畢紫參。為白

虎之體。南方七宿。井鬼柳星張
翼軫。為朱雀之體。嗚呼。是能
近取譬。皆善言天象者矣。若
夫古聖賢之說四禽。隨感心而
發揮者。如經傳所載。噫。龍
龜虎鳳之象。詎其廣且大也。

蓋亦足以見活天運行之妙矣。
今徵天象。又執昔古言。作恒
星圖。

大正五年九月中浣 小野 清



例言

一本書恒星圖は、東洋古代天文家の國家的理想に係る星象を廣く世に傳へんが爲にして作れり。彼の個人的想定に係る獸帶星象を併掲せしは、兩者を對比併觀するに便ならんが爲なり。

尙東西星象觀對照を分明ならしめん爲に、視界^{西洋}總星座六十四座を圖面に顯はし、每星一一希臘文字徽號を付せり。但し其星座名目は簡に従ひ、本圖主要星に係る三十六座のみ拉丁語を以て記載せり。

一二十八宿龍龜虎鳳四禽の象を爲し紫微・太微・天市・三垣を周匝守護する狀あり、然るに斯の事、古來未だ曾て分明に敘述せし者あるを聞かず、況んや之を圖繪に顯はすに於てをや、其之れ有る、蓋し本圖を以て權輿とす。

一所謂東洋古代天文家の國家的理想に係る星象の典據は、禮記曲禮・史記天官書、及び張氏靈憲・黃氏天文圖說に記載する所の如し。然れども、本書を修述するに當りて、余は旁搜尋討、凡そ支那書日本書より佛典に及び、又西洋の圖書に涉りて以て、東西古今諸星象に關する概要を窺ふに勉めたりき。然るに、是れ皆古人理想とせし所の星象に關聯する事蹟を探尋せしに外ならず。

今日の天文は、實理日新の精學にして、之を啓發せしは西洋究理天文家に在り、而るに天文學術亦單

獨に進歩する能はず、世界文明と相逐隨して此に屆りしものなり、本書附言の下に第八表を掲げ、古聖哲及び東西天文家の研鑽事蹟を略敘して、天文學と文明發揮と一目の下に對比綜覽に便ならしむ。

一 本書恒星圖の要義を外國同好者にも示さむが爲に、星象總紀・星表、及び星天十二宮方位・名稱、其他星座・星圖等創定に關する天文歴史の梗概を併せて、之を獨・佛・英三文に翻譯し、天文彙考列宿獸帶篇亦英文に抄譯せり。

一 右翻譯、獨文星象總紀は、八木秀太郎氏、其星表以下の總ては、柴田桂太氏に成り。又佛文は、總て織田信義氏、英文は、總て石田羊一郎氏に成れり。

一 本書の考證、及び参考の範圍を廣くせんが爲に、別に天文彙考を修述し、又金石四禽圖譜を編輯せり。

大正五年六月

本書恒星圖、并に星象總紀・星表、乃至東洋諸家星座・星圖等創定に關する條項は、大正六年二月、天文月報第九卷第十一號を以て發表せり。

本書天文要覽并に天文彙考、幸に齋藤實君の贊助に依り、刊行して以て世に問ふことを得るに至りたり。

大正十年十二月

目次

東洋に於ける星垣及び星象

星象總紀

恒星圖 第一圖

星表

紫微垣 (甲)第一表

北

斗 (乙)第一表

太微垣 第二表

天市垣 第三表

二十八宿 第四表

星天十二宮方位及び名稱

星名
周天十二宮並以星象得名

星天十二宮獸帶對比表 第五表

附載 獸帶譯名表 第六表

東西十二宮二十八宿對比圖 第二圖

附言

東西天文

星座星圖等の創定及び天體其他の諸研究に關する東西天文歴史の梗概

一、支那

二、日本

星座星數綜覽表 第七表

三、印度

四、西洋

世界文運

天文と文明の發揮

三聖及び東西天文家年代對照表 第八表

附載 日月遊星(太陽系)等の諸顯像發見、引力及び光線分析法の發明等に關する諸家事蹟概要

歲差

推恒星用數 二十八宿黃道經緯度 二十八宿赤道經緯度 二十八宿赤道經緯度歲差率 推歲差用數

目次終

天文要覽

小野 清著


東洋に於ける星垣及び星象

星象總紀

東洋古代天文家の此視界内星天に於ける觀察要義を見るに、
先づ皇居、次に政廳、又次に都市を定めて、^{紫微垣}、^{太微垣}、及び^{天市垣}の三垣と爲し、國家相を以て此星天の大象を想定せり。

又王良及び閣道は、皇居—紫微垣—の後に在りて鎮護する天界柱石の象として之を大老と想し、而して北斗は、皇居の前に在りて警戒して以て外寇を禦ぐの姿勢ありとなし、其第七星を呼びて破軍星と稱せり。

然り而して四方に點布せる衆星の中に就きて二十八宿を認め、其各宿の距星(即ち界星)及び赤道・黃道・經緯度等に照準して以て日月五星の躔・離・運行及び其他を觀測せり。

二十八宿 布列の状は、 龍・虎・龜・鳳 四者、三垣を周匝守護する景象ありと爲し、東北西

南卯色を以て之に配せり。

其卯色は蒼^青白^玄朱^白、即ち東方七宿自^角心^房尾^箕を蒼^龍の宮
 と謂ひ、北方七宿斗^牛女^虛危^室壁^奎胃^昂畢^參を白^虎の宮と謂ひ、南方七宿井^鬼柳^星張^翼轸^軫
 奎^婁胃^昂畢^參を白^虎の宮と謂ひ、南方七宿井^鬼柳^星張^翼轸^軫を朱^雀の宮と謂へり。

二十八宿は、遠く黄道南北に布列す、其選定、寧ろ散漫なるに似たり、今、龍龜虎鳳四禽を想定して以て之に配すれば、列宿四禽の妙象を爲し、燦然として寔に宇宙の大觀たり。

添附の天文要覽には右龍龜虎鳳四禽を圖繪に顯彰して、三垣と共に之を瞭然たらしめ、又他の一等星及び北斗・玉良等二三星座を掲載せり。

然り而して更に又獸帶星像をも此の如く併掲せるは、是れ看者をして東西諸家の星象觀察の意匠を一目の下に對比綜覽せしめんと欲してなり。

但し本圖は、虎顔の金牛面と相重り、及び龍尾の天蝸體と相疊むを避けむが爲に、少しく金牛天蝸を其星座より傾移して顯はせり。

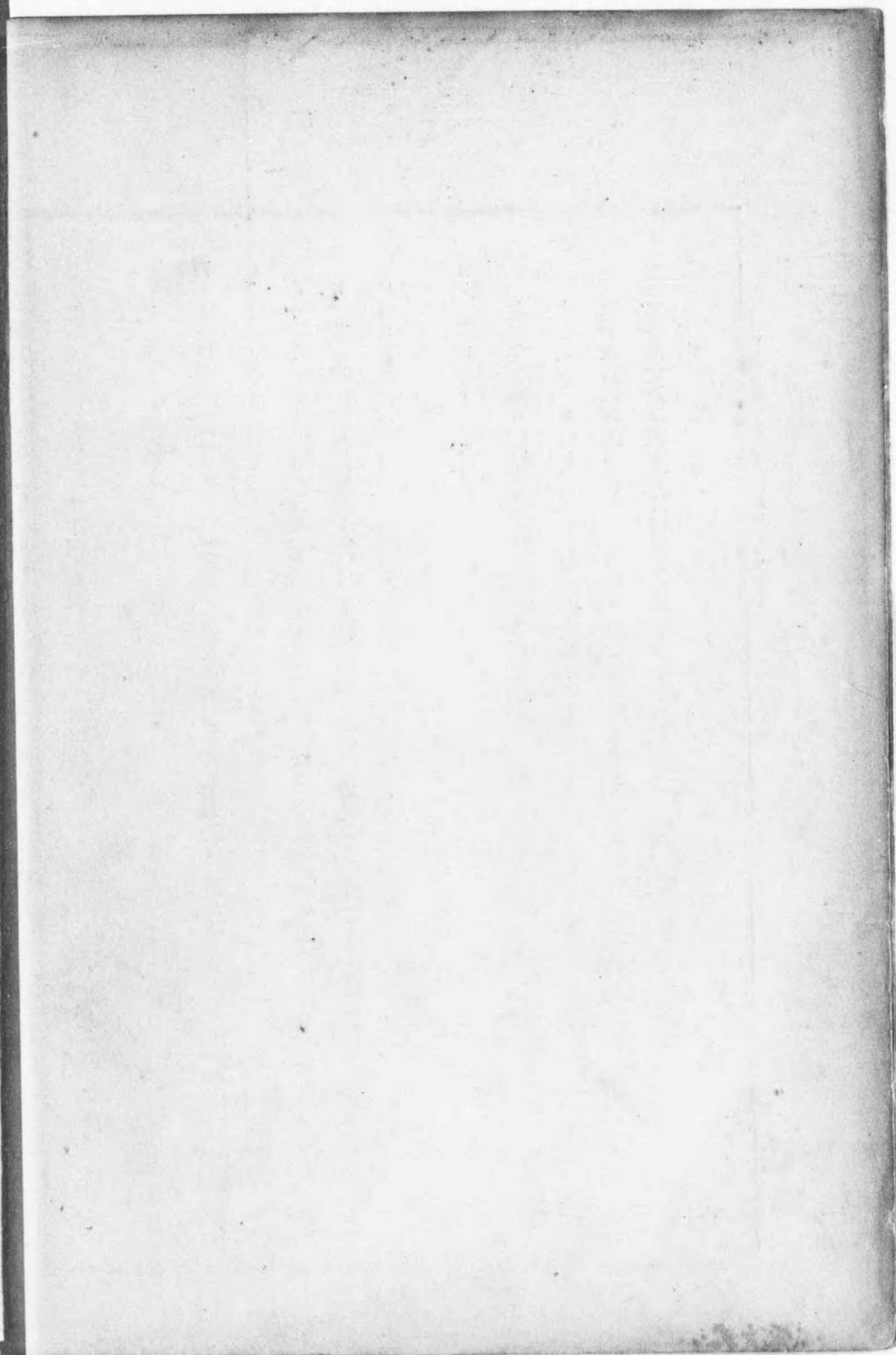
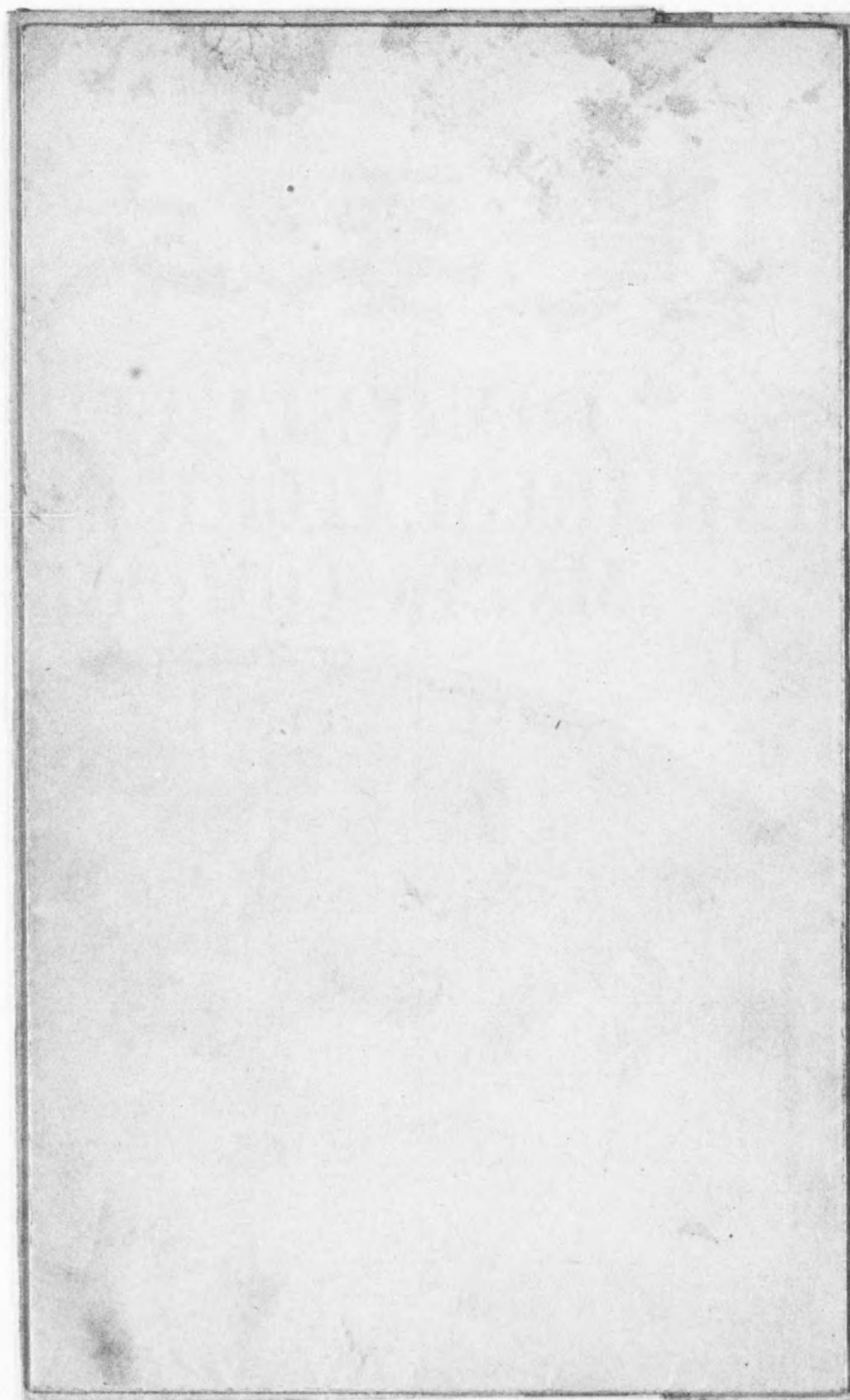
抑も東西學者、會意匠上、星象の形狀及び名稱を異にするも、而も能く其意を考ふれば、皆其推歩を學ぶの識別心記に便ならしめむが爲めにあらざるはなし。

今や、是の如き星象の事は、甚だ學術界に急なるにあらざるが如きも、然れども亦古道新學の言あり、若し幸に其人に遭逢し得ば、本圖の如きも亦或は古を稽へ今に徴するの道に於て資益する所なきにしもあらざらむ。

明治三十八年三月 東京根岸に於て 小野 清識

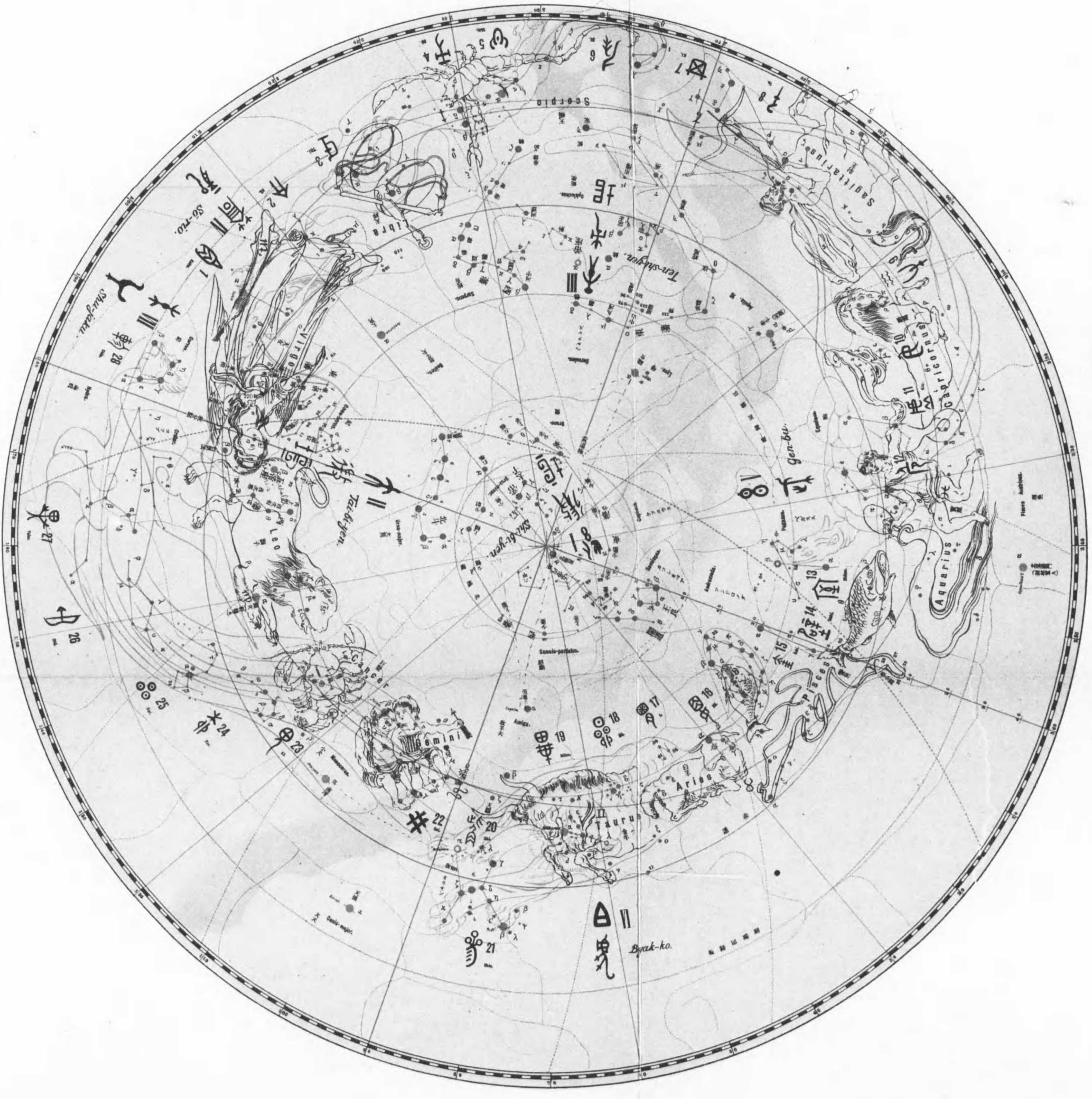
右本文に述べし如く、二十八宿は、龍龜虎鳳の具象を以て、皇極三垣(紫微・太微・天市)を周匝守護する状ありと爲し、更に其每一宿の象形に従ひて文字若しくは物類の名を以て命けたり、角亢以下二十八宿名目即ち是れなり、然り而して篆體文字能く其星象に一致せり。

又右本文及び天文要覽恒星圖の篆體文字は、夏商周三代の器物に見ゆる古文なり。



天文要覽

CONSTELLATIONUM SINICARUM ATQUE EUROPAEARUM MAPPA COMPARATIVA



- I 紫微垣 (宮殿)
- II 太極垣 (政廳)
- III 天市垣 (都市)
- IV 春龍 (一、二、三)
- V 玄武 (密邇)
- VI 白虎
- VII 朱雀

- Palatium imperatoris.
- Aula republicana.
- Forum civitatis regia.
- Carculus draco.
- Niger ballator.
- Albus toris.
- Rubra avis.

- 星の大きさ
- 星の位置
- 星の距離
- 星の性質
- 星の分類

- 1
- 2
- 3
- 4
- 5

大正五年六月
東京
小野
清

Wagasaki Co.
Tokyo
June 1915

第一表(甲)紫微垣

I. 紫微垣(皇居) Shi-bi-yen: Imperial Palace.

星名	星數	學名	意義
西藩			(イ)
右樞	1	α Draco	右樞密(右軍政大臣)
少尉	1	κ "	少廷尉(少刑法官)
上輔	1	λ "	上輔導(上輔導官)
少輔	1	δ Ursa Major	少輔導(少輔導官)
上衛	1	43 Camelopardus	上侍衛(上侍從武官)
少衛	1	9 "	少侍衛(少侍從武官)
上丞	1	"	上丞相(政務大臣)
東藩			
左樞	1	ι Draco	左樞密(左軍政大臣)
上宰	1	θ "	上宰相(總理大臣)
少宰	1	η "	少宰相(總理副大臣)
上弼	1	ζ "	上輔弼(上輔佐官)
少弼	1	ν "	少輔弼(少輔佐官)
上衛	1	73 "	上侍衛(上侍從武官)
少衛	1	π Cepheus	少侍衛(少侍從武官)
少丞	1	23 Cassiopea	少丞相(政務副大臣)
北極星	1	α Ursa Minor	
帝	1	β "	
后	1	4 "	
太子	1	γ "	
五帝內座	5	Cepheus, Cassiopea	帝室內廷、又帝冠之象
六甲	6	Camelopardus	鏡
華蓋	16	ψ, A, 49 Cassiopea	天蓋
王良(α)	5	α, β, γ "	元帥、大將
閣道	6	δ, ε "	渡廊下
北斗破軍星	1	η Ursa Major	大老之象

(イ) 王良策馬、車騎滿野(史記天官書)
(ロ) 星官名 據康熙字典、參考秦漢制度、二表三表亦同

第一表(乙)北斗

I. 2. 北斗 Hokuto(Seven Stars of the North):
(Indian: The Governor of a Garrison.)
(Chinese: Wagon.)

學名	洋名	印度(佛典翻譯)		支那	
		名	譯	名	譯
		鎮將之象		帝車之象(史記天官書)	
α Ursa Major	Dubhe	食狼星	慙(のぞむ)	天樞	七星之樞(くるる)
β "	Mernk	巨門星	家(いへ)	天璇(1)	掌旋轉(めぐる)
γ "	Phekda	祿存星	祿(ろく)	天機(2)	動變之機關(はじき)
δ "	Megrez	文曲星	文(ぶん)	天權	掌權衡(はかり)
ε "	Alioth	廉貞星	正(ただし)	玉衡	衡平輕重(はかりぎを)
ζ "	Mizar	武曲星	武(ぶ)	開陽	開陽氣(ひらく)
η "	Banetsusch	破軍星	軍(ぐん)	搖光	耀光芒(きらめきひかる)

(1) 又天璣 美玉(うるはしきたま)
(2) 又天璣 耀珠(かがやくたま)

第二表 太微垣

II. 太微垣 (政廳) Tai-bi-yen: Government.

星名	星數	學名	意義
西 藩	1	β Virgo	御史大夫之象 * (右檢事總長)
右執法	1	σ Leo (西上將軍)
西上將	1	ι " (西次將軍)
西次將	1	θ "	西次丞相 (西政務副大臣)
西上相	1	δ "	西上丞相 (西政務大臣)
東 藩	1	η Virgo	廷尉之象 * (左高等裁判官)
左執法	1	γ "	東上丞相 (東政務大臣)
東上相	1	δ "	東次丞相 (東政務副大臣)
東次將	1	ε " (東次將軍)
東上將	1	ν Coma Ber. (東上將軍)
五帝座	5	β Leo	
太子	1	ε "	
三公	15	ν, κ, η Coma Ber.	主衛守也 * (侍從長)
九卿	3	Virgo	朝會之所居 *
五諸侯	3	36, 27 Coma Ber.; ρ, δ Virgo	主治萬事 *
諸侯	5	35, 6 Coma Ber.	內侍天子、不之國者也 *
諸侯	1	ν Virgo	主贊賓客也 * (式部長官)

* 隋書天文志

第三表 天市垣

III. 天市垣 (都市) (1) Ten-shi-yen: Market-Place.

星名	星數	學名	意義
西 藩	1	ζ Ophiuchus	各地方諸侯
韓	1	ε "	
楚	1	δ "	
梁	1	ε Serpens	
巴	1	α "	
蜀	1	δ "	
秦	1	β "	
周	1	γ "	
管	1	λ Hercules	
中	1	γ "	
東 藩	1	η Ophiuchus	各地方諸侯
宋	1	ξ Serpens	
南	1	ν Ophiuchus	
燕	1	η Serpens	
東	1	θ "	
徐	1	ζ Aquila	
吳	1	110 Hercules	
齊	1	α "	
中	1	μ "	
九	1	λ "	
趙	1	δ "	
魏	1	α "	主何陰陽也 * (天文臺長) (宗大夫也、宗室之象、(執政皇族) (帝輔血脈之臣也) (皇族) 主量者也 (硬體量) また (液體量) ひしゃく (尺) 度 主其事 (屠畜市場) 主費王之貨 (寶玉市場) 主衆貨之區 (諸商品市場) 市府也、主市價、 (市役所) 律度、金錢、珠玉
帝	1	α Ophiuchus	
候	2	β, γ "	
宗	4	π, κ, ρ "	
宗	4	ι, κ "	
斛	5	α, η Hercules	
斗	2	102, 96 "	
度	2	109, 95 "	
肆	2	λ Ophiuchus	
肆	2	20 ν "	
市	6	{ μ, τ Ophiuchus; ο, ι Serpens	

(1) 天子率諸侯、幸都市也(晉書天文志)

* 晉書天文志、下同

第四表 二十八宿

二十八宿 The 28 Constellations.

宿名	星数			距星學名	意義	
	a	b	計		物類に象どりし者	文字
IV. 蒼龍 (東方七宿爲蒼龍之體) The Seven Constellations of the East form the Blue Dragon.						
1 角	2	—	—	a Virgo	龍の角(つ の)	
2 亢	4	—	—	κ "	龍の亢(の ど)	
3 氏	4	—	—	a Libra	根底(そ こ)	𠂔 (氏)
4 房	4	9	13	π Scorpio		𠂔 (房)
5 心	3	6	9	σ "	龍の心臓	𠂔 (心)
6 尾	9	—	—	μ "	龍の尾	
7 箕	4	—	—	γ Sagittarius	箕	𠂔 (み)
V. 玄武(靈龜) (北方七宿爲靈龜之體) The Seven Constellations of the North form the Black Tortoise.						
8 斗	6	—	—	φ Sagittarius	柄杓(ひしゃく)	𠂔 (斗)
9 牛	6	—	—	β Capricornus		𠂔 (牛)
10 女	4	4	8	ε Aquarius		𠂔 (女)
11 虛	2	—	—	β "	虛也、暗黒也(イ)	
12 危	3	10	13	α "		𠂔 (危)
13 室	8	3	11	α Pegasus	離室(あづまや)	
14 壁	2	—	—	γ "	離室の壁	
VI. 白虎 (西方七宿爲白虎之體) The Seven Constellations of the West form the White Tiger.						
15 奎	16	6	22	η Andromeda		奎 (本)
16 婁	3	—	—	β Aries	小阜(ちいさいおか)	
17 胃	3	—	—	35 "	胃の腑	
18 昂	7	4	11	δ Taurus	旄頭(はたのかしら)	
19 畢	8	5	13	ε "		畢 (畢)
20 觜	3	—	—	λ Orion	觜鬚(くちはし)(ロ)	𠂔 (參)
21 參	10	11	21	ζ "	虎體之象	
VII. 朱雀 (南方七宿爲朱雀之體) The Seven Constellations of the South form the Red Phoenix.						
22 井	8	—	—	μ Gemini		井 (井)
23 鬼	5	—	—	Cancer	亡魂、楸之象(ハ)	
24 柳	8	—	—	δ Hydra	垂枝柳	
25 星	7	13	20	α "		星 (星)
26 張	6	—	—	ν "	張(はりだす)	張 (張)
27 翼	22	7	29	α Crater	鳳翼即ち鳳體之象	翼 (翼)
28 轸	6	—	—	γ Corvus	車(ニ)	

- 星数中aは支那天文家の定めたる星数にしてbは各星座の象形を明にする爲に、余が新に増加せる星数なり。
此の増加せる星の中には支那天文家の既に名づけたる星及び或は未だ名づけざる星もあり。
- 二十八宿は、毎座其第一星を以て距星(即ち界星)と爲す。
- 古今圖書集成(乾象典星辰部)天文部の記載する所に據れば、印度古曆(20)觜宿天關を用ひ、今の觜は(21)參宿の頭部星たり。天關は金牛座(Taurus)のζ星なり。
(イ)北方之位、五行之説也、虛危五星、龜甲即ち龜體之象
(ロ)印度古曆、觜宿用天關(古今圖書集成乾象典星辰部)、今之觜三星、本參宿之頭部星也、割三星是爲觜宿、則參字之星象訛矣、
(ハ)鬼、靈魂所歸也、楸中星團、積屍氣云、
(ニ)右一星右轸(クサビ)、左一星左轸云、

星天十二宮方位及び名稱

東洋古代の天文家は後に又、恒星の經・緯度等を精密に徴する爲めに、星天を十二方位に部別せり。此の十二方位には、子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥十二禽名、既に夙くより配附せられたりき。

而れども更に又、此の十二方位に對して、元枴・星紀・析木・大火・壽星・鶉尾・鶉首・實沈・大梁・降婁・娵訾・十二宮名を付し、天文學術上に於て主もに此の名稱を使用せり。

今此の星天の十二部別方位と他の獸帶との位置の關係を表示すれば則ち左に掲載する表圖の如し。

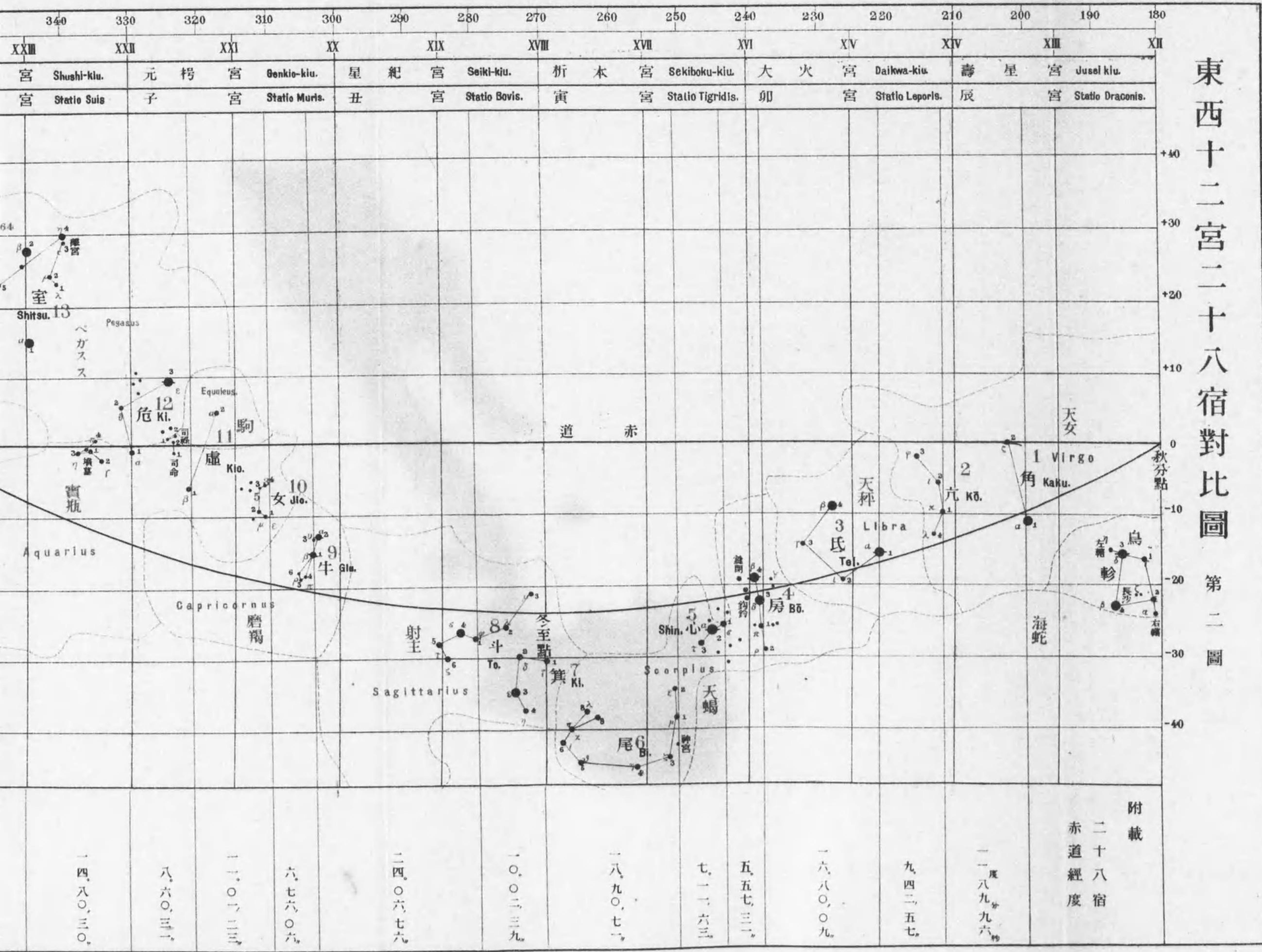
星名

壽星角亢也、天根氏也、天駟房也、大火謂之大辰、大辰房心尾也、箕斗之間、漢津也、星紀斗牽牛也、玄枴虛也、北陸虛也、營室謂之定、娵訾之口、營室東壁也、降婁奎婁也、大梁昴也、西陸昴也、濁謂之畢、味謂之柳、柳鶉火也、爾雅

周天十二宮竝以星象得名

十二宮名、雖人所爲、然其來久矣、今攷宮名、皆依天上星宿而定、非漫設者、如南方七宿、爲朱鳥之象、史記天官書、柳爲鳥注、注即爲員官、頸朱鳥頸也、員官、張爲素、素故名其宮、曰鶉首・鶉火・鶉尾、乃鳳也、東方七宿、爲蒼龍、天官書、東宮蒼龍、房心爲明堂、今即陳、鳥受食之處也、翼爲羽翮、朱鳥之翼、按角二星、象角、故一名龍角、房心爲明堂、今即陳、鳥受食之處也、翼爲羽翮、朱鳥之翼、氏房心象龍身、心即其當心之處、故其宮、曰壽星、封禪書、武帝詔天下、尊祀靈星、靈星即龍星也、曰大火、心爲大火、曰析木、一名折木之津、故心爲明堂、尾宿即龍之尾、故其宮、曰壽星、張晏曰、龍星左角、曰天田、則農祥也、見而祀之、曰大火、心爲大火、曰析木、以尾箕近天河也、北方七宿、爲玄武、天官書、北其宮曰星紀、古以斗牛、爲列宿之曰元枴、枴者虛也、即虛危也、曰娵訾、一名娵訾之口、以室壁二宿、各二星、西

備
考

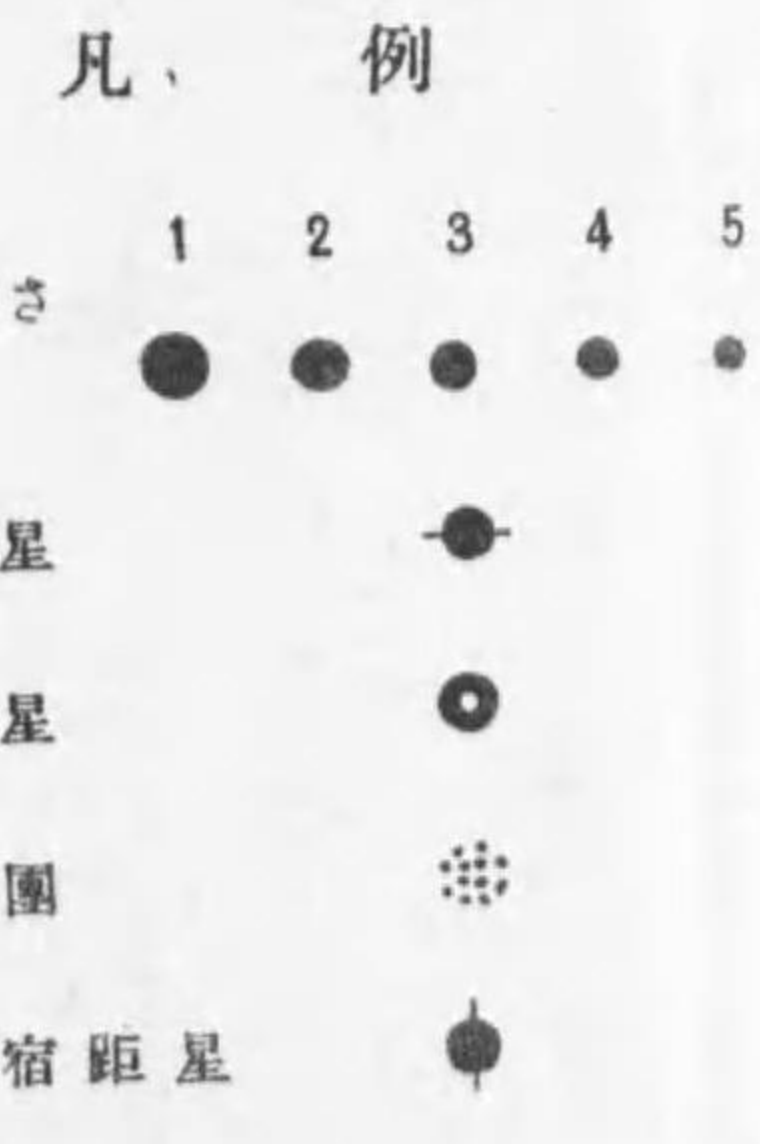


東西十二宮二十八宿對比圖 第二圖

亢	張	翼	奎	婁	危	箕	心	翼	井	昂	壁	斗	亢	星	翼	婁	危	箕
一度五十分入大火	六度五十一分入鶉尾	十一度一十九分入鶉首	六度二十八分入大梁	三度一十九分入豫管	三度	七分入星紀	初度二十二分入析木	一十九度三十二分入壽星	二十九度五十三分入鶉火	八度三十九分入實沈	一度二十六分入降婁	二十四度二十一分入元枵	初度四十六分入大火	七度五十一分入鶉尾	十一度一十九分入鶉首	一度一十四分入大梁	一度四十七分入豫管	四度一十七分入星紀

明史天文志
 黃赤宮界十二宮之名見於爾雅大抵皆依星宿而定 茲以崇禎元年各宿交宮之黃赤度分列於左方以志權輿云
 赤道交宮宿度
 黃道交宮宿度

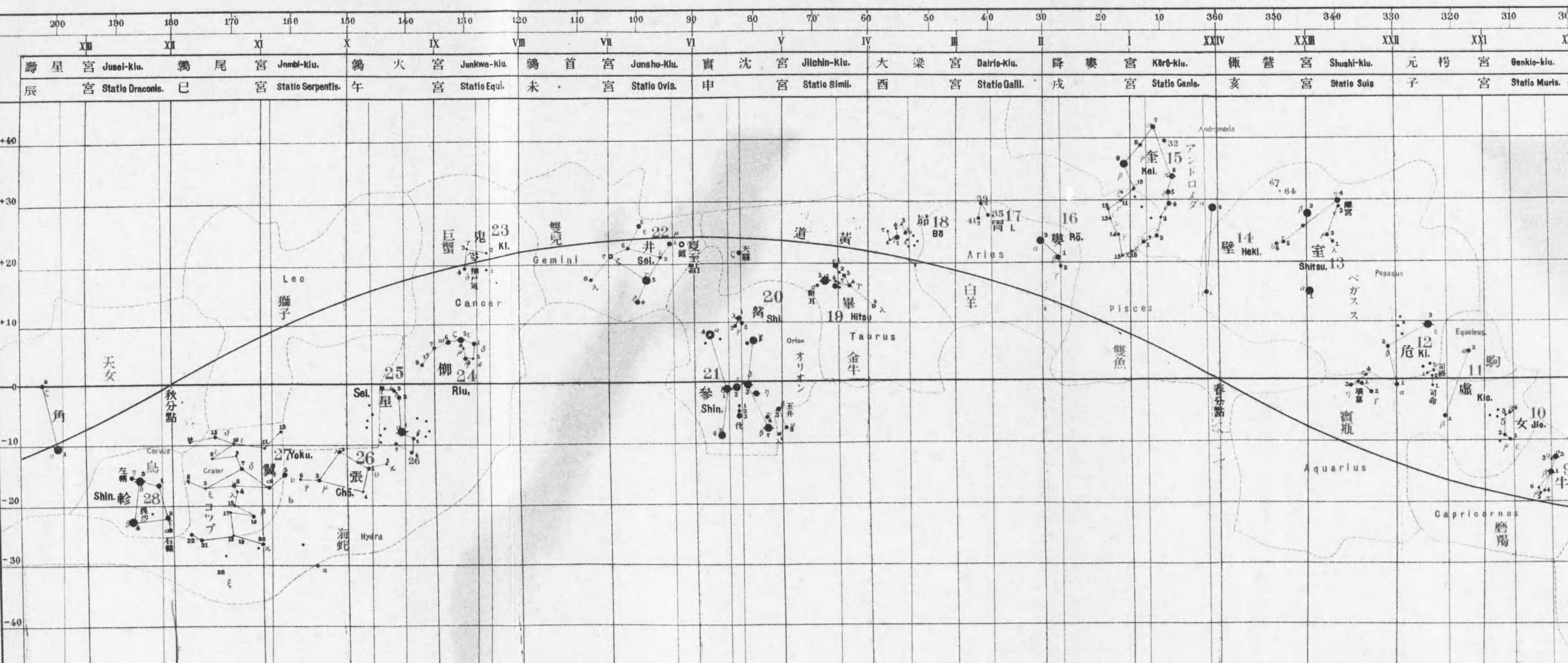
一 二十八宿は各々其第一星を以て距星即ち界星と爲す。
 一 附載せる二十八宿赤道經度は各々其距星より起算せしものなり。
 一 文久年間古山貞の測る所に係る。
 一 角宿度内は、自角距星至亢距星經度、亢宿度内は、自亢距星至氏距星經度なり。下各經度之に準ず。
 一 角より亢に至る天部は角宿度内、亢より氏に至る天部は亢宿度内たり。下各宿天部此例に準ず。
 一 鈞鈴、神宮、墳墓、離宮、附耳、鉞、左右轄、を二十八宿の補宮、附座と爲す。
 一 二十八宿百七十星、補宮、附座十二星、計三十五座、百八十二星なり。



備考

附載
 二十八宿
 赤道經度

一四八〇・三〇	八六〇・三一	一一〇一・二三	六七六〇・六	二四〇六・七六	一〇〇二・三九	一八九〇・七一	七・一一六三	五五七・三二	一六八〇・〇九	九四二・五七	一一八九九・六	二二十八宿 赤道經度
---------	--------	---------	--------	---------	---------	---------	--------	--------	---------	--------	---------	---------------



1) 用嘉永五年壬子星黃道經緯度、依月離推太陰赤道經緯度法、算之即得。
2) 是即嘉永五壬子後一十年間通用之數也、乃用壬子與壬子後一十年壬戌之黃道經緯度、依推太陰赤道經緯度法、兩數相減、退一位即得。

推恒星用數

天保十三年壬寅天正
冬至次日子正為曆元

Table with 28 columns (宿名) and 3 rows. Row 1: 二二十八宿黃道經緯度. Row 2: 二二十八宿赤道經緯度. Row 3: 二二十八宿赤道經緯度歲差率. Columns include 斗宿, 牛宿, 女宿, 虛宿, 危宿, 室宿, 壁宿, 奎宿, 婁宿, 胃宿, 昂宿, 畢宿, 觜宿, 參宿, 井宿, 鬼宿, 柳宿, 星宿, 張宿, 翼宿, 軫宿, 角宿, 亢宿, 氏宿, 房宿, 心宿, 尾宿, 箕宿.

黃道歲差 一分三十九秒七十二微零三纖七十二忽 即天保十九年
戊申前後一十年間通用之數也、
過之則宜改算、其法詳推歲差法、
黃道歲差 一分三十九秒七十一微五十三纖八十四忽 即自嘉永六年癸丑、至嘉永十五年壬子
六年癸丑、至嘉永十五年壬子
黃道歲差 一分三十九秒七十一微〇四纖四十九忽 即自文久三年
癸亥、至文久十二年壬申、
一十年間通用之數也、

推歲差用數
元文三年戊午天正冬至次日子正為曆元、
因土星黃道退行 五十二微五十纖
因木星黃道退行 九秒六十一微六十七纖
因火星黃道退行 一十三微零六纖
因金星黃道退行 一十七秒零九微一十七纖
因水星黃道退行 六微五十三纖
因土星定詳法 二微二十八纖八十六忽 以半徑為一率、土星黃本
星黃道退行三率、求得四率、
為土星定乘法、以下四星做此、
木星定乘法 二十二微零九纖七十二忽
火星定乘法 四十二纖一十四忽
金星定乘法 一秒零一微一十五纖七十八忽
水星定乘法 七十九纖五十六忽
赤道退行 一分三十九秒二十一微六十六纖六十七忽
黃赤大距根 二十三度四十七分二十二秒

赤道退行 一分三十九秒二十一微六十六纖六十七忽
黃赤大距根 二十三度四十七分二十二秒

附言

東西天文

星座星圖等の創定及び天體其他の諸研究に關する

東西天文歴史の梗概

一、支那

基督後二二三年(黃武二年)の頃、吳朝の陳卓は、昔し商朝の巫咸(基督前一、六一一年頃の人)齊國の甘德・魏國の石申(共に基督前三二三年頃の人)三家が指定せし星を集めて、始て圖録に列著せり。其星總て二百八十三座・一千四百六十五星なり。後ち知者ありと雖、敢て妄りに一二を其間に注せず。是等の星名は、或は帝・后・太子・列國等に擬らへ、或は官吏・庶物等に象どりて命けられしものなりき。

四四〇年(元嘉十七年)宋朝の錢樂之は、銅を鑄て、徑二尺二寸・周六尺六寸(徑二尺二寸なれば周六尺九寸強なり)の天球を作り、三垣・二十八宿、及び北部・南部の諸星座を其表面に配置し、其星には黃・黑・白・三色(又朱黑白、又黃黑赤)の珠を用ひて三家を殊別し、陳卓の星座・星數に一致せしめたり。

一、六三〇年(崇禎三年)の頃明朝の徐光啓は、其觀測の結果、見えざる星一百十八を除き、有名の星總

第七表 星座星數綜覽表

撰 定 者	星 垣 等	紫微垣 (皇居)		太微垣 (政廳)		天市垣 (都市)		二十八宿等		前記の外點布せる星				總計	
		星座	星數	星座	星數	星座	星數	星座	星數	北 部		南 部		星座	星數
										星座	星數	星座	星數		
商朝	巫咸	4	18	1	1	4	8	—	—	5	24	19	93	33	144
齊國	甘德	21	102	7	15	2	10	—	—	48	184	40	200	118	511
魏國	石申	13	64	6	42	8	41	35	182	34	203	36	278	132	810
合計		38	184	14	58	14	59	35	192	87	411	95	571	283	1465
日本	保井春海	8	38	3	18	3	12	—	—	20	126	27	117	61	308
通計		46	222	17	76	17	71	35	182	107	537	122	685	344	1773

計一千三百四十七星とし、其大小六等に分ち、一等十六星、二等六十七星、三等二百〇七星、四等五百〇三星、五等三百三十八星、六等二百十六星とせり。是れより先き五十餘年、一、五七三年(萬曆の初)の頃、西洋人利瑪竇等明國に入りて、支那の天文學を啓發せしに因り此事あり、蓋し支那天文界の革命なり。

二、日本

一六七〇年(寛文十年)我が保井春海後左衛門が新に指定せし者、六十一座三百〇八星なり。而して春海は此の星座に命ずるに、日本朝廷の百官官名等を以てせり。此の如く支那と日本の天文家星天を觀測して、總て三百四十四座、一千七百七十三星を選定せり。春海亦天球及び星圖を作り、黃・黒・赤・三色を以て、巫咸・甘德・石申・三家の星を點し、青色を以て我が指定せる星を點せり。爰に余が新に製したる巫咸・甘德・石申・春海・四家星座殊別表を掲載して以て、支那と日本に於て指定せる星座・星數を綜覽するに便ならしむ。

備考

支那に於て、二十八宿を以て石申の指定せしものと爲すや久し。故に今、本表亦姑らく二十八宿を石申指定の星座欄内に收載せり。然れども、二十八宿の指定者に關しては余別に所見あり。

三、印度

印度に在りては前五六五乃至四八七年の頃釋迦二十八宿の名號を宣示し、後に殊致光味彌婆菩薩驢唇一名佉虛及び文殊の徒、或は其星象を論じ星數を説けり。驢唇文殊に至りては、二十八宿、及び他の天象を説くと俱に獸帶を十二神と觀じ、十二神・十二ヶ月に主當して、日月五星・二十八宿(即ち二十八守護神)と俱に世界人類の生活を保護すと説けり。

四、西洋

亞歷山得亞のヒツバルヒ(Hipparch, 前一五〇年)が創定してプトレモイス(Claudius Ptolemaeus, 前一三〇年)完成せし圖表は、獸帶十二座、獸帶北方二十一座、獸帶南方十五座、(合計四十八座)二千零二十二星なり。其他アンチノウス(Antinous, 右旗天將)・ヘレニセ(Berenice, 郡將)・プレヤデン(Plejaden, 婦)及びヒーデン(Hyeden, 婦)四星座の如きは當時已に知られたりき。而して獸帶十二星象を想定せるは加耳埵亞人(Chaldaer, 前數百年恐らくは一千年の頃)ならむといふ。或は謂ふ拔比倫人(Babylonian, 前三千餘年前)早く既に獸帶星象を想定せりと。

又傳ふ、ヒツバルヒが觀測せる者一千〇〇八星、其大小六等に分ち、一等十五星、二等四十五星、三等三百〇八星、四等四百七十四星、五等二百十七星、六等四十九星と、(後凡そ一千七百五十餘年、萬曆の初、西洋人利瑪竇(Matthaeus Ricci)等明國に入りて觀測法を傳へ、後五十年、崇禎の初、徐光啓始めて星を六等に分ちしこと前項に記載する所の如し)

輓近天文家、又更に南部に於て三十八座、北部に十八座を指定し、總計一百零八座、五千七百十九星とせり。(其二千九百十六星は北半球に、二千八百零三星は南半球に在り)。

又其大小を六等に區別して、一等二十星、二等五十一星、三等二百星、四等五百九十五星、五等一千二百十三星、六等三千六百四十星とせり。是れ皆肉眼を以て見らるべき大星を挙げしもののみ。

近時又北部三十座、南部四十四座、獸帶十二座、總計八十六座一萬〇七百五十五星と爲し、又北部二十九座、南部四十七座、獸帶十二座、總計八十八座と爲せり。

獨逸のアルゲランデル(Argelander)が著はせし圖表は、北半球、及び南緯若干を限り、星の大小を

九等に種別せり、彼れ謂へり、若し南方の星も亦北半球の如く饒多なる時は、一等乃至九等、合計六十二萬九千八百四十星なりと。此内一等十六星、二等七十星、三等九十八星、四等四百六十星、五等一千四百九十六星、六等六千〇四十二星、七等一萬九千九百〇二星、八等六萬八千三百三十八星、九等五十三萬三千三百五十六星とせり。

又一二の天文家の説に據れば、現時の精良なる器械を用ゐる時は、其能く見らるるもの三千萬乃至四千萬、其辛うじて知り得べき凡ての星は、十二億の多にも至らむと云ふ。

英國のハルレス(Halley)は、喜望峯に於て經驗せる南方の恒星表を公にし、獨逸のウイリアムヘルセル(William Herschel)は、北半球の星雲・星團二千餘、及び複星七百を經驗

し、一、七七九年乃至一、八〇二年且、一、八〇三年八複星が彼れの公重點を廻りて運動するを發見し、ヘルセルは又天王星、及び土星、太陽、天王星、太陽等を發見せり、其子ジョンヘルセル(John Herschel)は、一、八〇四年南方の星雲・星團の探索を公にし、

又ストルベ(Struve)は、一、八〇七年銀河の構造上の探索を公にせり。又パウエル(Paul)及びプロスベルンレー(Prosper Henry)は、一、八〇七年天體の大寫眞を一樣に結合作成し

得らるることを立證し、星圖の製作に至大の進歩を與ふるに至りたり。此餘日月・遊星・(太陽系)引力、及び光線分析等の發見に關する諸家の事蹟の如きは、別に約敘して以て、第八表の後に附載す。

抑も一千六百〇九年、和蘭に於て望遠鏡發明せられ、爾來器械・天文學術の進歩と共に、天文に關する諸般の設備亦擴張せり。佛國政府率先して、永續せらるべき天文臺を巴里に建て、一、六七〇年次で英國政府亦天文臺を綠威に設け、一、七五〇年十八世紀の終りに至ては、獨り西洋のみならず他の重要地にも天文臺建置せられ、殊に英國殖民地、馬度拉斯・孟買・喜望峯、及び聖黑連那等に於ては、堪能なる探究者有益なる研究を爲し、北部の研究家と相待て、斯學界に貢獻する所亦多し。

世界文運

天文と文明の發揮

天文の學由來遠し、東西の天文家、各々辛苦探究せしこと無慮茲に四千年、他の科學と共に相提携して以て、今日日進の實學鬱興の域に達せしめたるもの、抑亦釋迦孔子耶蘇の如き神聖相逐隨して世に出て、天人の文運を開新して以て、生民幸福の道を久遠に發明せしめたるもの、誠に與りて力あること疑ひなし。

今、上來記載せし所の東西古今の天文家と、釋迦孔子耶蘇三聖とを、年代を次第して一表に併掲して以て、天文學術の開進と世界文明の發揮とを綜觀すべからしむ。

天文星占、觀の石申は天文星經を著す、石申は百代歴家の祖と稱せらる、(石記評林甘德の條夾注)

第八表

960年
1,000年
1,127年
1,247年
1,280年
1,368年
1,493年	コペルニクス (Copernikus) 始テ地
1,500年
1,580年
1,600年
1,609年	和蘭ニ於テ望遠鏡發明セラル
1,610年	ガリレオ (Galileo Galilei) 自作ノ望
1,619年	ケプレル (Johannes Kepler) 推歩三
1,630年
1,660年
1,662年
1,666年	ニュートン (Newton) 引カヲ發見シ
1,667年	佛國始テ天文臺ヲ巴里ニ建ツ
1,679年	ハルレス (Halley) 南方恒星圖ヲ著ス
1,700年
1,781年	ウィリアムヘルセル (William Herschel) ノ星雲、星團ヲ發見ス.....
1,800年
1,846年	レヘルリエル (Leverrier) 海王星ノ存
1,847年	ストルベ (Struve) 銀河構造上ノ探
1,859年	キルヒホッフ、ブンゼン (Kirchhoff)
1,862年	アルゲランデル (Argander) 六十
1,864年	ジョン、ヘルセル (John Herschel)
1,866年	シイアパレルリ (Schiaparelli) 流星
1,868年	ヲ創作ス
1,868年
1,887年	パウエル及プロスペルヘンレイ (Paul)
1,900年

巫咸・甘德・石申・三家 巫咸は帝太戊を佐け、其子巫賢は帝祖乙を佐け、父子並に殷の賢臣たり、(尙史) 齊の甘德は天文星占、魏の石申は天文星經を著す、石申は百代歴家の祖と稱せらる、
 本表、巫咸・甘德・石申・三家星座指定のことは、姑く陳卓の定る所に據る、
 本表商の建國乃至西紀一五〇〇年は毎五百年、一六〇〇年以降は毎百年、横線を劃し、年代の經過を見易からしむ、

邦國 西曆	西	洋	印	度	支	那	日	本
1744年					商			
1611年					巫咸 三十三星座、百四十四星ヲ指定ス			
1500年								
1100年					周			
1000年		加耳婁亞人歌帶十二宮ヲ想定ス			昭王三十年			
769年					東周			
660年								
565年			釋迦生	光味 釋迦始テ二十八宿名號ヲ謂ヒ、 臘曆 光味二十八宿ヲ説キ 臘曆文殊 文殊 二十八宿十二宮神ヲ併セ謂フ	孔子生			神武帝即位紀元一年
551年								
500年					戰國			
425年					甘德、百十八星座、五百十一星、石申、百三十二星座、八百十星ヲ指定ス			
323年					秦漢			
221年					武帝元朔元年			開化帝三十年
202年					征和二年司馬遷史記天官書ヲ作ル			崇神帝七年
128年		ヒツパルヒ (Hipparch) 一千餘星ヲ六等ニ分チ星圖ヲ創製ス						
91年								
紀元1年	耶蘇生				東漢 平帝元始元年			垂仁帝三十年
119年					張衡渾天儀、地動儀ヲ造ル(安帝元初六年ノ頃)			
130年	プトレモイス (Claudis Ptolemæus) 四十八星座ヲ綜定シ星圖ヲ大成ス				順帝永建五年			景行帝六十年
223年					三國陳卓始テ巫咸、甘德、石申、三家ノ星ヲ區録ス(吳大帝黃武二年ノ頃)			
265年					晉			
317年					東晉			
440年					宋 錢樂之渾天銅儀ヲ造リ陳卓ノ星圖ニ一致セシム(文帝元嘉十七年)			
479年					齊			
500年								
502年					梁陳隋唐			
557年								
589年								
618年								
907年					五代			
960年					宋			
1000年								
1127年					南宋			
1247年					黃裳天文圖ヲ著ス(光宗紹熙元年ノ頃)王致遠之ヲ摹刻シテ碑ヲ蘇州聖廟ニ建ツ (理宗淳祐七年)			
1280年					元明			
1368年								
1493年		コペルニクス (Copernikus) 始テ地動説ヲ唱フ						明應二年
1500年								
1580年					利瑪竇 (Matthæus Ricci, S. J.) 支那ニ來リテ西洋天文學ヲ傳フ (神宗萬曆八年ノ頃)			
1600年								
1609年	和蘭ニ於テ望遠鏡發明セラル							慶長十五年
1610年	ガリレヲ (Galileo Galilei) 自作ノ望遠鏡ヲ以テ始テ日月五星ノ體象ヲ見ル							元和五年
1619年	ケプレル (Johannes Kepler) 推歩三例ヲ舉ゲ地動説證セラル							
1630年					徐光啓有名ノ星千三百四十七星ヲ六等ニ分ツ(思宗崇禎三年ノ頃)			保井春海六十一星座、三百八星ヲ指定シ星圖 ヲ作ル(萬治三年)
1660年								
1662年					清			寛文六年
1666年	ニュートン (Newton) 引力ヲ發見シ地動説定ル							
1667年	佛國始テ天文臺ヲ巴里ニ建ツ							
1679年	ハルレス (Halley) 南方恒星圖ヲ著ス							
1700年								
1781年	ウィリアム・ヘルセル (William Herschel) 天王星、及土星太陰、天王星太陰、北方ノ星雲、星團ヲ發見ス							天明元年

三聖及び東西天文家年代對照表

○ 或は謂ふ西紀二、〇〇〇年前。巴比倫人既に歌帶星象を想定せりと、姑く附記して看者の參考に供す、

○ 或は謂ふ西紀二、〇〇〇年前。巴比倫人既に歌帶星象を想定せりと、姑く附記して看者の参考に供す、

三聖及び東西天文家年代對照表

第八表

1.744年		商	
1.611年		巫成	三十三星座、百四十四星ヲ指定ス
1.500年			
1.100年		周	
1.000年	加耳埜亞人歌帶十二宮ヲ想定ス	昭王三十年	
769年		東周	
660年			
565年	釋迦生 光味 釋迦始テ二十八宿名號ヲ謂ヒ、 曆辰 光味 二十八宿ヲ説キ 曆辰文殊 文殊 二十八宿十二宮神ヲ併セ謂フ	孔子生	神武帝即位紀元一年
551年			
500年		戰國	
425年		甘德、百十八星座、五百十一星、石申、百三十二星座、八百十星ヲ指定ス	
323年		秦漢	
221年		武帝元朔元年	開化帝三十年
202年		征和二年司馬遷史記天官書ヲ作ル	崇神帝七年
128年	ヒツパルヒ (Hipparch) 一千餘星ヲ六等ニ分テ星圖ヲ創製ス		
91年			
紀元1年	耶蘇生	東漢 平帝元始元年	垂仁帝三十年
119年		張衡渾天儀、地動儀ヲ造ル(安帝元初六年ノ頃)	
130年	プトレモイス (Claudius Ptolemaeus) 四十八星座ヲ綜定シ星圖ヲ大成ス	順帝永建五年	景行帝六十年
223年		三國陳卓始テ巫成、甘德、石申、三家ノ星ヲ區錄ス(吳大帝黃武二年ノ頃)	
265年		晉	
317年		東晉	
440年		宋 錢樂之渾天銅儀ヲ造リ陳卓ノ星圖ニ一一致セシム(文帝元嘉十七年)	
479年		齊	
500年		梁陳隋唐	
502年			
557年			
589年			
618年			
907年		五代	
960年		宋	
1.000年			
1.127年		南宋	
1.247年		黃裳天文圖ヲ著ス(光宗紹熙元年ノ頃)王致遠之ヲ摹刻シテ碑ヲ蘇州聖廟ニ建ツ	
1.280年		元明	(理宗淳祐七年)
1.368年			
1.493年	コペルニクス (Copernikus) 始テ地動説ヲ唱フ		明應二年
1.500年			
1.580年		利瑪竇 (Matthaus Ricci, S. J.) 支那ニ來リテ西洋天文學ヲ傳フ	
1.600年			(神宗萬曆八年ノ頃)
1.609年	和蘭ニ於テ望遠鏡發明セラル		
1.610年	ガリレオ (Galileo Galilei) 自作ノ望遠鏡ヲ以テ始テ日月五星ノ體象ヲ見ル		慶長十五年
1.619年	ケプレル (Johannes Kepler) 推歩三例ヲ擧ゲ地動説證セラル		元和五年
1.630年		徐光啓有名ノ星千三百四十七星ヲ六等ニ分ツ(思宗崇禎三年ノ頃)	
1.660年		清	保井春海六十一星座、三百八星ヲ指定シ星圖ヲ作ル(萬治三年)
1.662年			
1.666年	ニュートン (Newton) 引力ヲ發見シ地動説定ル		寛文六年
1.667年	佛國始テ天文臺ヲ巴里ニ建ツ		
1.679年	ハルレス (Halley) 南方恒星圖ヲ著ス		
1.700年			
1.781年	ウィリアムヘルセル (William Herschel) 天王星、及土星太陰、天王星太陰、北方ノ星雲、星團ヲ發見ス		天明元年
1.800年			
1.846年	レヘルリエル (Leverrier) 海王星ノ存在ヲ預言シ、ガリレ (J. G. Galle) 之ヲ發見ス		弘化三年
1.847年	ストルベ (Struve) 銀河構造上ノ探索ヲ公表ス		
1.859年	キルヒホッフ、ブンゼン (Kirchhoff Bunsen) 光線分析法ヲ發明ス		
1.862年	アルゲランデル (Argolander) 六十餘萬星ヲ九等ニ分ツ		
1.864年	ジョン、ヘルセル (John Herschel) 南方ノ星團星雲ヲ探索ヲ公表ス		
1.866年	シイアパレルリ (Schiaparelli) 流星、彗星、原因一様ナリト説キ、彗デ火星離形ヲ創作ス		明治元年
1.868年			
1.887年	パウル及プロスペルヘンレイ (Paul, Prosper Henry) 天體大寫眞結合ヲ立證ス		
1.900年			二千五百六十年 明治三十三年

巫成・甘德・石申・三家 巫成は帝太戊を佐け、其子巫賢は帝祖乙を佐く、父子並に殷の賢臣たり、(尙史) 齊の甘德は天文星占、魏の石申は天文星經を著す、石申は百代歴家の祖と稱せらる、(石記評林甘德) 本表、巫成・甘德・石申・三家星座指定のことは、姑く陳卓の定る所に據る、 本表尙の建國乃至西紀一五〇〇年は毎五百年、一六〇〇年以降は毎百年、横線を劃し、年代の經過を見易からしむ、

星表を算出せり。ケ氏一千五百七十一年^{元龜二年}十二月二十七日ウワイル近傍のマクスダットに生、一千六百三十年^{寛文七年}十一月十五日死、年六十。

ニートン 一千六百六十六年、木より落ちたる林檎に因りて、地球の此の凡てのものを引く力が、太陽を其軌道の上に保ちてあらぬ歟との大思想を煥發し、爾來彼れは、殊の外多端なる思考力及び忍耐に因て、一千六百八十二年迄に、夫の至大にして單純、而も一般なる引力の規則、即ち

各々の體が、各々の他の體の力を以て、體の積の大なるものが直接に引くこと、而して其隔りの平方は、反比例してある、

ことに迄到達せり。

彼れは又遊星の混雜せられたる感じを、交互の上、及び太陽の上、遊星の積等の上に計算し、遂に究理天文学の凡ての發明を大成するに至り、是に於てコヘルニクスの說確定して又搖す可らず。ニ氏一千六百四十二年^{寛文十年}十二月二十五日、英國リンコルン州ウオルストルへの村落に生、一千七百二十七年^保年三月二十日死、年八十五。

ウイリアム、ヘルセル 一千七百八十一年、天王星を發見し、一千七百八十九年、土星太陽の第一、及び第二を、一千七百八十七年乃至九十年、六個の天王星太陽を發見せり。

ヘ氏が一千七百七十九年乃至一千八百〇二年、北方半球の星雲、星團、及び複星を經驗し、一千八

百〇三年、複星が彼れの公重點を廻ぐりて運動するを發見せしことは前段に於て略敘せり。

ヘ氏一千七百三十八年^{元祿五年}ハンノーベルに生、一千八百二十二年^{文政五年}死、年八十五。

レヘルリエル 一千八百四十六年^{弘化三年}計算に由りて、必らず海王星の存在するを判斷し、

ギツテリド、ガルン 此のレヘルリエルの報告に基づきて、是の歲九月二十三日、果して海王星を發見せり。ガ氏一千八百十二年^{文化九年}獨逸に生、一千九百十年^{明治四年}七月十二日死、年九十八。

キルヒホッフ、ブンセン 一千八百五十九年^{安政六年}遼遠なる天體の性質を研究し得べき光線分析法を發明し、

シイアパレルリ 一千八百六十六年^{慶應三年}流星及び彗星は、一樣なる原因であることを説き、一千八百七十七年^{明治十年}火星圖雜形を創製せり。

以上天文学界に重なる貢獻を爲せし諸家の事蹟の概要と爲す。

其單に遊星の太陽のみを發見せし天文家の如きは、今姑らく省略に従ふ。

天文要覽終

無題

天文要覽圖。龍龜虎鳳四禽各居其所。而二十八宿十二宮又包容而具焉。第此圖也是誠圖象耳。上天四禽之活狀豈止于此哉。蓋龍飛虎走。鳳之擊翼。龜之蜷首。千變萬化。靈異不測。活天之活物不永靜止矣。且夫變易交易者大天之活法也。四禽動靜變化之妙。人智人眼之所不能及。亦何曾得責備于僅僅一圖之中乎哉。嗚呼。上天有神。體物不遺。充滿乎微妙之內。

而擁護乎萬象之外者矣。

奧 邃

右大正十一年四月初八日新井奧邃

病床所筆

靜 修 記



自跋



昔者嘉列利珂造大望遠鏡。始明微日月五星體象。天文之學。於是乎始可言真理實學矣。爾來各國專家探究研鑽者四百年。益多發明。迨近時加州維遜山百吋反射大望遠鏡成。觀測之術。研究之法。層見疊出。天文之學。於是乎愈入于精微深妙矣。嗚呼。人

生兩間。不昧者心也。自今學者苟能用心。益愈
旁搜深討而不怠乎。其所造詣也。豈可測哉。
吾竊有望于後起之士者。

大正十年十二月 小野 清識



川崎硯々書



天文要覽 奥書

(一)、天文要覽火災に罹り再び編修せし事

前稿天文要覽一卷・天文彙考五卷・金石四禽圖譜一卷・曩に某印刷會社に於て印刷中、大正十二年九月一日、大震の時火災に罹り、正副恒星繪圖及び諸圖表、金石拓本・寫眞原版・其他一切の諸材料・並に英文天文要覽及び、列宿獸帶論の如きも、亦俱に灰燼に歸せり。是れ實に文園に於ける予が終天の大遺憾なり。嗟呼已矣哉。

後ち沈思數日、謂へらく、斯業再舉して、必ず、素志を貫徹すべしと、是に於て、蹶然奮興、再修に着手し、努力五旬、書遂に成り殆んど舊觀に復す。而して前稿に掲載豫定の正本恒星繪圖寫眞大震の當時、校正の爲に草廬に在り災厄を免れたれば、乃ち是れを卷首に收む。本書天文要覽恒星繪圖、即ち是れなり。尙ほ、英文天文要覽は之を本書の後に收載せり。

蓋し、前稿は、本、多年の修述に係るを以て、其諸材料、及び圖表・並に、英文の如きも、亦其の副本大抵家に藏せしに因り、如此く速に成功を見しものなり。今、再舉の編修成るに當り、爰に其顛末を記すること如斯し。

大正十二年十二月

本書卷首例言は、前稿に記載せし者に係る、今一切改訂せず、

(二)、恒星繪圖、罹災に關する事

恒星繪圖の罹災に就きて、特に、予が遺憾とする衷情あり、今之を左に概敘せむ、

恒星繪圖正副二本、正本は彩色圖・副本は墨圖にして、一見相殊なるに似たれども、其實同一物なり、乃ち萬一の變災を慮りて、正副二本を作りしに過ぎず、圖幅、總長さ六尺強、星圖、直徑三尺三寸強、四體但其の圖は東洋古代天文家の觀星理想を、始て圖繪に顯せし前古無比の星圖なることは、本書例言に敘述せし所の如し。如此き唯一無二の星圖なるを以ての故に、予は、之れを長く世に傳へむが爲に、皇室、及び、博物館に獻納せんことを希望したりき。

今、攝政宮殿下、御成婚奉祝の時に當る、是れ、誠に、千載一遇の好機會なり。乃ち、此の恒星繪圖・四禽皇極三垣を周匝守護する瑞象に因み、微臣、區區獻芹の微衷を寓し、以て、正本を九重の闕下に獻上せんと欲し、又、副本は、博物館に寄贈せんと期し、添へて上呈する星象總紀正本副本・裝幀、並に、容器の如きも亦皆既に具り、將に現品正副恒星繪圖を、某印刷會社より還收せんとせし刹那に於て、何ぞ圖らむ、此の劫火に罹り、皆忽ち烏有に歸せんとは。正本彩色圖・副本墨圖は寫眞光線感應と、彩色彫刻參考との爲に、共に、某印刷會社に遣りしものなり、

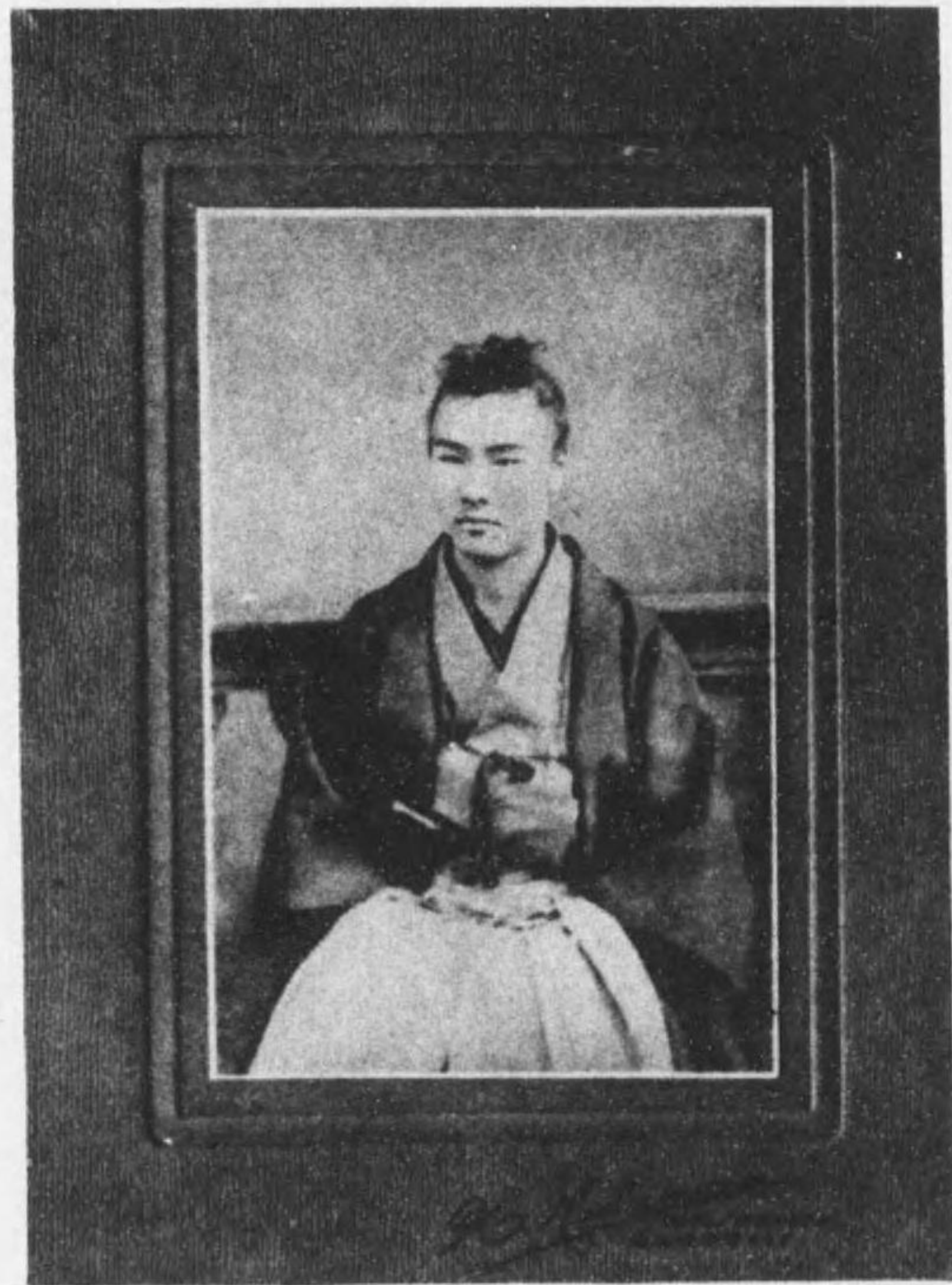
抑も此の恒星繪圖は、予が多年の研究に成れる創作にして、其圖面記載の事物、竊に自ら精良を期して、四禽及び獸帶十二星像は、岡倉秋水に囑して筆せしめ、題字隸文は、青木修に托し、三垣四禽篆文は、高田忠周に托して筆せしめたり、此の三専門家、亦、各々、精神を注ぎて、手腕を揮ひしこと、星圖面に見る所の如し。而も、今や、再製作は期すべからず。嗚呼多年辛苦努力の作品、一朝にして火災に罹り、獻納の希望亦徒に水泡に歸せり。是に於て觀ずれば、予が半世の事業は、宛も南柯の一夢の如し。

然りと雖、今、幸に新編編修脫稿し、此の正本恒星繪圖寫眞を以て、主眼と爲し、卷首に載せて世に傳ふことを得たれば、乃ち素志と違ふ所なし。唯だ南柯一夢の感、長く予が念頭に懸りて醒めざるのみ。昔し、鄭人蕉鹿の訟、今に至りて、醒夢兩つながら尋ね難し。未だ知らず、千載の下、本書を繕き、予の醒夢如何を問ふ者ありや、否。

大正十二年十二月

靜修 小野 清

天文彙考



て於に濱横月九年二治明



大正十一年十月東京に於て

天文彙考序

今の世に、西洋の天文学、精矣、緻矣、然れども、東洋古代の星象觀も、亦究めずばあるべからず、何となれば、數千年來の史上に、天象の事を連載せり、古今を對照せざれば、理解すること能はざればなり。

小野子肅、印度、支那、日本の古説を、西洋の新説に參照して、研鑽せらるること多年なり、其著、恒星圖は、曩きに、天文要覽と題して、大正六年二月、東京天文臺月報にて、公表せられたり、頃者、又、天文彙考五卷、附、金石四禽圖譜一卷、及び、翻譯英文一卷を刊行して、東西洋、斯學の人に示さむとせらる、此他、日本支那古今曆術變遷沿革考五卷、曆體制、及び、曆神考五卷あり、他日に期すと云ふ、多くの學者の閑却せる古天文古曆の事を、かくまで研究せられぬ、語に云ふ、溫故知新と、是に於てか、史の天象記事、始めて了解せらるべく、東西新舊對照して、史上の記載、分明なるべし。

刊行書の内容趣旨は、他の序文、及び、自序に委しければ言はず、但し、予は、子肅の平生閱歷を擧げて、多くの大著ある所以を述べし。

小野君、名は清、字は子肅、舊通稱を、伊右衛門と云ひ、靜修と號す、家は、世々、仙臺藩の大番隊士なり、弘化三年に生る、幼にして英敏、九歳にて、藩校養賢堂に入學し、十歳にして、四書の試問に及

第し、十一歳にして、五經の試科に登第し、藩公、小學、及び、近思錄を賜ひて賞せらる。

慶應二年、江戸に出てて、學齋大學頭林昇の楊溝塾に入り、又、幕府の儒官芳野金陵の逢原堂に學びて、造詣する所あり、明治二年、洋學に志し、静岡に行きて、勝海舟に倚り、其紹介を以て、織田信義の家に寓して、佛蘭西學を攻め、尋て、横濱に移り、獨逸聯邦公使、ホン、ブランドに聘せられて、文筆に従事し、四年、東京に出てて、司馬凌海の春風社に入りて、獨逸學を習ひ、更に慶應義塾に轉じて、英吉利學を修せり。

子肅、又、擊劍の術に長ぜり、九歳にして、藩の山田善速に就きて、影山流を學び、十二歳の時、曉天、寅の刻より、夜の戌の刻に至る、劍法三千本の修業を試みしに、子肅疲るるを知らず、對手高弟、十九人、却て、困憊を覺えたり、善速、激賞して免許入段せしむ、慶應中、江戸に出てし時、劍師桃井左右八郎の士學館に入りて、小野派一刀流を受け、更に、千葉周作の子、道三郎の玄武館に就きて、北辰一刀流を究め、其技、益々進めり。

明治元年、仙臺藩、討會の命を奉ず、伊達筑前、其手兵八百を率ゐて、先鋒となり、藩の參政和田織部、參謀たり、子肅、時に二十三歳、其副參謀を命ぜられ、兵を封境なる越河に駐む、既にして、子肅、單身にて、白河城下に趣き、形勢を視察し、會津國境、進軍の地點を定めて復命せり、尋て、別命を受けて、藩の汽船宮城丸に乗じて、江戸に出て、東海道より、京都に到り、朝家、并に、諸藩の事情を探聞

し、五月、江戸に還る、時に、上野の戦起らむとし、仙臺藩論も、亦一變す、此間、江戸、關東、各地の形勢を探索す、此時、福澤諭吉を、芝の新錢座の居に訪ひ、時局に關する意見を徵せしに、福澤云ふ、貴藩、早く兵を收めよ、一日後るれば、一日の損なり、幸に鄙見容れられれば、速に歸國して、當局の人に説かるべしと、子肅、頗る其意を了し、上野の戦畢りて、五月廿四日、汽船長鯨丸に乗りて、歸藩す、時に、輪王寺宮、變裝し同船せられ、會津に向はせらるるに會せり、人のこれを知る者なかりき、子肅、國に歸り、事、軍國の機密に屬するを以て、獨り、執政坂英力に、收兵の事を説けり、坂、頗る、此説に耳を傾けしかど、既に、奥羽諸藩の連盟成り、白河口の戦端、開かれたる後なりしかば、騎虎の勢となりて、如何ともすべきなし、子肅、退きて、竊に歎ずらく、誠に國の厄難なり、然れども、此危急に當りて、坐視すべきにあらずとて、此時、仙臺藩封内にて、新に農兵を募れる折衝隊と云ふあり、封内北部の郡宰、今泉孫四郎、これを率ゐるに加はりて、總取締役となり、膽澤郡の巨利永徳寺に屯して、日日、農兵を教練し、秋田進軍を期したりしかど、幾くもなくして、軍事罷みぬ。

子肅、明治八年、慶應義塾に學びし時、塾主福澤諭吉の推薦にて、内務省衛生局に出仕し、東京衛生試験所事務員となる、子肅、山岡鐵舟と相識あり、一日、談、皇居の衛生の事に及び、御膳水、諸井水の検査を説く、鐵舟領承して試験所をして分析せしむ、水、皆、佳良なりき、皇居、始めて此舉あり、時に明治九年なり。

子肅、又、横濱衛生試験所創立委員となり、明治十年、大坂衛生試験所に轉任す、時に、試験所は、移轉すべき事となり、五代友厚の中島の邸地を相して、勝地なりとして、移讓を請ひしに、友厚肯はず、子肅、乃ち、大坂薬舗の藥品の、關西三十餘國の取引の廣き事、全市中の諸井水、關西諸國の鑛泉の夥多なる事等に就きて、是等の分析、其他五十萬市民の衛生施設の忽にすべからざるを、諄々と説きしかば、友厚、大に覺醒して快諾せり、因て、大坂府知事渡邊昇に告げて、府の土木技師を定めて、己れ、新築の事務を、一切擔任して成功し、内務卿大久保利通に賞せらる。

子肅の大坂にある時、大坂城の築構の雄大なるを觀て、大に感ずる所あり、其沿革を記述せむとて、許多の材料を集蒐し、終に、大坂城誌十二卷を成せり、此書は、後に、前大坂府知事西村捨三の贊助を得て、明治三十三年、仁徳天皇の一千五百年祭に當りて、日本城郭誌卷首と共に、刊行せられたり、これに因みて、安土城、伏見城、江戸城、名古屋城、其他に就きて、日本城郭誌、數十卷を編成せしかど、未だ發刊せず。

明治十三年七月、刑法、新に發布せられ、十四年十二月、又、陸海軍刑法の發布あり、子肅、人民の休戚に關するの大なるを感じ、乙夜の覽に供せむの志を起して、従前の新律綱例、改定律令と、新舊を比較し、苦心して、精細緻密なる刑法一覽表を作り、十六年十二月、三表を自寫し、鐵舟を介して、御前に獻納し、又、活刷して、十九年八月、再び進獻し、又、諸人に頒ちぬ、官衙に於て、法令を作り、罰則を附するに當り、其寬嚴を比較するに、頗る裨益せりと云ふ、初め、福澤諭吉にも贈りしに、一見し

て云ふ、是れは能く賣れむ、書肆に託しては如何にと、子肅云ふ、御覽を期しての製なり、發賣せむは素志にあらずと。

子肅の天文の事を究めしは、明治元年、京都に趣く時、仙臺藩の天文家古山貞と同行することとなり、旅中、客舎に於て、夜夜、列宿、四禽星象の説を聞けるに原因す、二年、横濱なる獨逸聯邦公使館にありし時、館員ドクトル、ベルリンといふ者、獨逸の星圖を示す、圖に、獸帶十二星像を始め、一百八星像を載せたり、これを觀てより、研鑽の歩を進め、印度、支那、日本の天文群書を、百方涉獵して、推考すること、實に、五十年にして、遂に今の大著を成せるなり。

子肅、明治二十四年、衛生局を辭せしより、今に至る三十餘年間、一切、世事を抛却して、筆硯兀兀、一意、志す所の編纂に従事す、其志操の徹底せること想ふべし、余が同藩の舊故なるを以て、序を囑せらる、五六十年來の交誼を回顧し、其操行動勉を知る所多きを以て、爰に、平生を附記すること、此の如し、子肅、余より長ずること一歳、今茲、七十七。

伊豆下田蓮臺寺温泉避寒中の客舎に於て

大 槻 文 彦

大正十一年二月

自序



予曩著恒星圖。論述列宿四禽之
妙象。環衛周護。皇極三垣矣。今
修述彙考。西敷列宿獸帶之制定。
舉東西古今天文事蹟。而類聚之。
又竊欲徵古人四禽感想之念。深且

廣也。蒐集鏡鑑瓦甃碑碣石棺所彫
刻四禽拓本作金石四禽圖譜。附于
卷尾。以資于讀者參考云。

大正十年八月下浣 小野清



例言

- 一本書天文彙考は、天文要覽の考證範圍を廣めんが爲にして修述せり。
- 一本書、二十八宿と獸帶との想定、及び星象相傳に就て論述せり。
- 一本書、印度に於ける二十八宿、及び其他、天象觀察の典據を明にする爲に、特に佛說九經を摘錄せり。
- 一本書、四禽星象を徵する爲に、支那天文家の論説を收載せり。
- 一璿璣玉衡、先儒の見解異同あり、今本書、之を併掲し、又歴代の儀象の沿革を概敘せり。
- 一本書、日本の天文曆道の由來を約敘せり。
- 一東洋古代人四禽に對する感想の一斑を徵する爲に、別に金石四禽圖譜を編輯して以て本書卷尾に附録せり。
- 一本書、列宿獸帶編英文抄譯は、石田羊一郎氏に成れり。

○
本書天文歴象諸項と俱に曆道を尋討するに、曆道亦遠く且廣し、仍て又曆術沿革、曆體制・曆神解を編述して以て本書に繼ぎ、是を別ちて、彙考後編・續編と爲し、家に藏す。今該總目錄を、本書終尾

に附載して以て同好者の参考に供す。

大正五年六月

列宿と獸帯に關する條項は、大正六年六七月、天文月報第十卷第三號第四號を以て發表せり、今修正増補して本書第一編と爲せり。

目次

第一編	列宿と獸帯	四五
第二編	印度	六七
第三編	支那	九五
第四編	日本	一五九
第五編	西洋	
附錄	金石四禽圖譜	

總目次

天文彙考

第一編 列宿と獸帶……………四五

二十八宿と獸帶との想定及び相傳に就て……………四五

一、古代の天文……………四五

二、二十八宿星數名目及び星座の異同……………四六

▲二十八宿名目梵蒙周滿日對照表 第一表……………四七

▲佛典六經二十八宿(即ち二十八星神)名號並に象形星數及び十二宮對比綜覽表 第二表……………四七

三、印度に於ける天文……………四七

二十八宿は印度の創定……………四七

印度支那四禽を幽明兩界の事物に配當す……………四七

▲佛典四禽表 龍龜獅子(虎)孔雀 第三表……………四九

佛道に於ける天體觀……………四九

法隆寺星曼荼羅に就て……………五〇

●法隆寺星曼荼羅之圖 第一圖

四、支那に於ける二十八宿……………五二

支那二十八宿の名目始て先秦の書に顯る……………五二

太古西陲交通の情勢……………五四

五、亞刺比亞二十八宿と印度希獵拔比論の關係……………五六

附 ギンチエル氏星圖に關する疑問……………五六

附載●ギンチエル氏太陰止舍之圖 第二圖……………五六

▲佛經ギ氏二十八宿星座對照表 第四表……………五六

六、獸帶……………六〇

附 (一)、磨羯巨蟹二者南北回歸線配當に就て……………六一

磨羯魚緣起……………六一

(二)、印度の獸帶十二宮神種別に就て……………六一

▲獸帶十二宮神種別表 第五表……………六一

(三)、西洋の獸帶觀……………六一

▲獸帶解 第六表……………六一

▲獸帶十二宮名目表 第七表……………六三

▲希梵七曜名目對照表 第八表……………六三

七、太古の交通……………六三

西東の星象觀の相傳……………六三

亞細亞大陸太古の交通……………六四

支那修交隣國……………六五

印度大秦交通……………六五

第二編 印度……………六七

一、印度といふ國號の意義及び國勢……………六七

二、釋迦……………六九

釋迦生滅年紀に就て……………六九

(一)、釋迦生滅年紀 阿忽伽王 迦膩色迦王……………六九

(二)、釋迦の傳紀……………七〇

(三)、佛說の要義及び豫言……………七二

印度の辰曜觀……………七三

舍頭諫經及び摩登伽經翻譯に關する管見……………七四

舍頭諫經翻譯者は二十八宿名號を譯する印度意譯に因り、摩登伽經翻譯者は始めて周名の角乃至軫二十八字を用ゆ……………七四

一、舍頭諫經二十八宿經一名虎耳經……………七六

二十八宿最初の譯名は印度意譯……………七六

二、摩登伽經舍頭諫經同本異譯……………七八

二十八宿翻譯始めて周名角軫二十八字を用ゆ……………七八

三、孔雀王呪經初譯 大孔雀咒王經後譯……………八〇

釋迦所說二十八宿即ち二十八守護神名號……………八〇

四、大集經月藏星宿攝受品……………八一

月藏星宿攝受品に就て……………八一

二十八宿養育衆生攝護國土說……………八二

五、大集經日藏星宿品……………八三

日藏星宿品に就て……………八三

佉盧虱吒の天文說……………八四

十二神主當各月……………

六、寶星陀羅尼經……………八七

光味所說二十八宿と生者身體の徵候……………八七

七、宿曜經……………八九

宿曜經に就て……………八九

文殊師利及び諸仙の天文說……………八九

▲二十八宿日月五星十二宮對比配列表 第九表……………

八、根本儀軌經……………九二

根本儀軌經に就て……………九二

十二宮廿八宿日月五星直日生者の善惡徵候……………九二

第三編 支那……………九五

一、支那といふ國號の由來……………九五

二、支那古代の天文……………九六

(一)、支那古來天文家の事態及び方士唐都天部分定に就て……………九六

附載 漢代方士の業體……………九九

(二) 司馬氏の天文の傳來及び史記天官書著作竝に二十八宿星象觀
支那傳來の徑路に就て……………一〇〇

(三) 匈奴の關係……………一〇二

(四) 周代邊裔の交通……………一〇三

三、四禽星象曲據……………一〇四

(一) 禮記曲禮……………一〇五

(二) 史記天官書……………一〇五

 三垣 四禽 二十八宿……………一〇六

(三) 靈 憲……………一一〇

 張衡に就て……………一一〇

 辰曜の本源……………一一〇

 兩儀道中に儻ふ……………一一一

 四禽三垣を繞る……………一一一

 張衡の渾儀及び漏水轉渾天儀制……………一一三

 河間相張平子碑……………一一五

附載 光武帝地震善後に關する制詔……………一一五

(四) 天文圖說……………一一六

 黃裳に就て……………一一六

 二十八宿は四禽の體なり……………一一七

 宋の黃裳の天文圖に就て……………一一七

●宋天文圖 第三圖

四、辰曜 四禽 星名 宮名……………一二〇

 古代人の辰曜四禽に對する感想……………一二一

(一) 辰曜及び四禽に對する古人感想の一斑と經籍に見る星名宮名……………一二二

 ▲經籍に見る辰曜四禽名目表 (甲) 第十表……………一二二

 ▲經籍に見る星名及び星天宮名表 (乙) 第十一表……………一二三

(二) 辰曜四禽十二支等を以て裝飾せし物品表附載に就て……………一二三

 附載 ▲金石に見る辰曜四禽表 第十二表……………一二三

 附 四禽を四神と稱せし因……………一二三

五、十二支宮……………一二四

(一) 支那に於ける十二支宮部別、干支等の配當……………一二四

(二) 佛説十二支獸の輪廻遊行……………一二六

(三) 支那印度先覺者の鑿天附會……………一二六

▲陰陽五行方位干支等の配當、及び宿曜二十八禽黃道配付綜覽表 (甲) 第十三表

▲歲月名義表 (乙) 第十四表

●唐二十八宿竟之圖 第四圖

六、星 圖……………一二七

吳の陳卓の星圖……………一二七

陳卓の星圖に關する管見……………一二七

(一) 宋の雛准の星垣諸座異同論……………一三〇

雛准事略 附魏了翁 雛准開禧曆を演撰す……………一三二

七、儀 象……………一三三

(一) 睿璣玉衡……………一三三

附七政……………一三六

(二) 渾天儀 渾儀 渾象……………一三七

(三) 歷代儀象の沿革西漢 東漢 宋 南宋 吳 元 明 後魏……………一三八

八、翻 譯……………一五一

天文佛典の翻譯……………一五一

支那佛法を印度に求む 佛典翻譯の機運……………一五一

(一) 支那に於ける天文佛典の翻譯……………一五三

▲隋唐以前支那天文志、翻譯天文佛典年代對照表 第十五表

九、革 命……………一五六

西洋天文の傳來……………一五六

(一) 西洋天文學の傳來……………一五六

▲北京徐家滙兩天文臺西洋名教士表 第十六表

第四編 日 本……………一五九

一、日本の天文……………一五九

天文曆數方術の成立に就て……………一五九

(一) 曆……………一六〇

▲宋唐五曆作者並に行用年數及び皇朝採用年代對照表 第十七表

貞亨改曆顛末……………一六四

●貞享新曆圖 第五圖

(二) 天文……………一六五

二、星 圖……………一六六

保井春海の星圖……………一六六

方圖星圖に就て……………一六七

●天文成象圓圖 第六圖

●天文成象方圖 第七圖

附 石坂常堅の星圖に就て……………一六九

三、星 表……………一六九

▲選定者四家殊別 北極星表 (甲) 第十八表

▲選定者四家殊別 赤道帶約六十度星表 (乙) 第十九表

附載▲南極星表 第二十表

第五篇 西洋

加耳埒亞人の星象觀察は眞率

本項、今、改めて、第一編、六項の(三)に編載す

本項は、今、再修せず

本項、今、改めて、第八表の要覽に編載す

此圖譜、再修せず、今、改めて、第三編、四項の(二)に第十二表を掲げて、品目を表す品目には、少くも、増減異同あり

一、西洋の獸帶觀

附表▲獸帶解 第二十一表

二、拉丁名、獨逸名、聯記西洋觀一百八星座支那星名並に日本譯名並に星數及び古今星座離合綜覽表 第二十二表

古今星座の離合 一百〇八座 八十六座 八十八座

西洋天文家事略

西洋天文家事略掲載に就て

三、日月遊星(太陽系)等の諸顯像發見、引力及び光線分析法の發明等に關する諸家概要

天文彙考附錄 金石四禽圖譜

總 紀

物品を裝飾せる辰曜四禽十二支等の圖錄

物品を裝飾せる辰曜四禽十二支等の圖錄附載に就て

鏡 鑑 瓦 甃

一、鏡 鑑

(一) 支 那

●漢日利大萬鏡 第一圖

- 漢四神鑑 第二圖
- 隋仙山鏡 第三圖
- 唐二十八宿鏡 第四圖
- 唐四神鑑 四禽十二支 第五圖
- 唐四神鑑 第六圖
- (二) 高麗
 - 二十八宿鏡 高麗時代墳墓より發掘 第七圖
 - 四神鏡 朝鮮開城附近古墳より發掘 第八圖
- (三) 日本
 - 四神鏡 大和國北葛城郡馬見村大塚古墳(傳御陵墓)より發掘 第九圖
- 二、瓦 甃
 - 漢四神瓦當 第十圖
 - 漢四神甃 第十一圖
- 古墳 碑 碣 石棺
 - 高勾麗古墳石室壁畫、唐墓誌石及び高麗石棺に就て

總目次終

- 一、古墳
 - 高勾麗古墳 附梅山里四神塚
 - 高勾麗古墳石室壁畫四禽圖 第十二圖
- 二、碑 碣
 - 唐薛瑤華墓誌石
 - 唐杜長史妻薛氏墓誌石四禽十二支圖 第十三圖
- 三、石 棺
 - 高麗圓明國師石棺
 - 高麗圓明國師石棺雙鳥四禽圖 第十四圖
- 附 載
 - 天文彙考後編總目錄……………一七七
 - 天文彙考續編總目錄……………一八三

刻宿獸帶

天文彙考

小野 清 著

第一編 列宿と獸帶

二十八宿と獸帶との想定及び相傳に就て

二十八宿と獸帶とは、古來東西天文家の最も重要となせし星座なりき。今此兩星座の想定及び相傳に就て所見を述べむ。

一、古代の天文

天文の事由來遠し。加耳埤亞人が獸帶を想定せし時西紀前凡そ一〇〇〇年の頃、アンチノウス Antinous(右旗、天秤、斗宿度内)、ベレニセ Berenice(郎位、郎將、斗宿度内)、プレヤデン Plejaden星及び、ヘーデン Hyaden星、四星座の如きは、既に世に知られたり

き。チステルウエ1ク氏天文書 又月・鬼宿と合する時釋迦生れたり前五六五年の頃 と言あれば、觀星の事、釋迦以前既に印度に行はれしを知るべきなり。佛本行集經 而して印度は、基督前四千年、恐くは既に是等の星座を認めしならむ。キンチエル氏天文年代學 又支那に於ては、堯の時前三六一年の頃 義仲・義叔・和仲・和叔・四人に命じて鳥宿張火宿心虛宿・昴宿・四星を以て春夏秋冬の仲節を正さしめたりき。尙書堯典 而して此司天の官は顛頊前二、五年の頃に權輿せしと傳はれり。

史記太史公自序

然り而して加耳埜亞・希臘・拔比倫・亞刺比亞・印度等共に獸帶を言ひ印度・蒙古・滿洲・亞刺比亞・支那等同じく二十八宿を言ふを以て觀れば、古の高踏超邁なる或る星學者、他の學道諸研究者の往來せし如く、蚤く相往來して以て是等星象を相傳へしこと夫れ亦知らるべし。

二、二十八宿星數名目及び星座の異同

而も各國所傳の二十八宿、星數・名目及び星座にも異同あるを以て觀れば、彼等或は星座の一二要星會頭を以て言ひ傳へて聽者或は星數を加減し、或は星名を各自國語に譯し、又或は別名を附して相傳へ或は又更に生面を開きて別に星象を觀ぜしものならむ。

而して其名目、今現に中印度と蒙古と全く同じく、支那と滿洲とは其每宿の頭文字聲音を同じうして、

十代學に據る、高橋順次郎氏、及び魯人バンクロット氏の綴りと、交互二三の差異あり。

XXIV	前跋達羅鉢托
XXV	ウツカラバードラバダ 後跋達羅鉢托
XXVI	レ 離 ヲ 伐 ナ 底
XXVII	ア 阿 シウイ 説 ニ 備
XXVIII	バ 跋 ラ 嚨 ニ 備
I	ク 訖 リ 嚙 ナ 迦
II	ク 嚙 と 嚙 ニ 備
III	ム 嚙 ガ シー ル シ ナ 嚙 嚙 伽 戸 囉
IV	ア 額 ド 達 囉 ニ 備
V	ブ 伐 ナ 捺 ヲ 蘇
VI	ブ 布 シナ 濯
VII	ア 阿 シウレ 失 麗 シナ 濯
VIII	マ 莫 ガ 伽
IX	ブ 前 ヲ バ ー ル グ ー 發 魯 嚙 擊
X	ウツカラバードラバダ 後 發 孔 底 擊
XI	ハ 河 ム 悉 ナ 頻

第一表 二十八宿名目梵蒙周滿日對照表

梵		蒙	古	周		滿	洲	日	本
XII	質多羅	Chitrâ	Tohetre	1	𠄎 Kaku	𠄎 (チ ヌ エ) Chueh	チ ヨ モ ト ナ ー	角 ス ホ シ	
XIII	娑縛底	Svâti	Suwati	2	𠄎 Kō	𠄎 (カ ン ヌ ム) Kaug	カ ム ト リ ー	亢 ア ミ ホ シ	
XIV	毗釋訶	Visâkhâ	Schuschak	3	𠄎 Tei	𠄎 (テ イ ー) Ti	チ ー リ ー ハ ー	氏 ヒ モ ホ シ	
XV	阿奴羅陀	Anurâdhî	Anurat	4	𠄎 Bō	𠄎 (フ アン ヌ ム) Faug	フ ワ ム ロ ホ イ ン	房 ソ ヒ ホ シ	
XVI	娑瑟佉	Jyestha	Tseste	5	𠄎 Shin	𠄎 (シ ン) Hsin	シ ン ト モ ビ イ	心 ナ カ ゴ ホ シ	
XVII	畢攝	Mûlam	Mul	6	𠄎 Bi	𠄎 (ウ エ イ キ) Wei	ウ キ ス ホ ン	尾 ア シ タ レ ホ シ	
XVIII	前阿沙茶	Pûrva-shâdhîs	Burwaschat	7	𠄎 Ki	𠄎 (キ ー) Chi	キ リ ホ ン	箕 ミ ホ シ	
XIX	後阿沙茶	Uttara-shâdhîs	Utaraschat	8	𠄎 To	𠄎 (ト ウ) Ton	ト ム ト フ	斗 ヒ キ ツ ホ シ	
XX	阿比哩杜	Abhijit	Alischi	9	𠄎 Giu	𠄎 (ニ ウ) Niu	ニ ウ ク ホ ン	牛 イ ナ ミ ホ シ	
XXI	室羅末拏	Sravana	Schirawan	10	𠄎 Jio	𠄎 (ニ ヌ イ ウ) Nii	ニ ロ ヒ ー	女 ウ ル キ ホ シ	
XXII	但備瑟佉	Danishtha	Tanis	11	𠄎 Kio	𠄎 (シ ヌ イ) Heii	シ ヨ チ リ ー	虛 ト ミ テ ホ シ	
XXIII	娑多婢澀	Satabhishak	Satabis	12	𠄎 Ki	𠄎 (ウ エ イ キ) Wei	ウ キ チ ヌ ー シ ヤ ー ク	危 ウ ミ ヤ メ ホ シ	
XXIV	前跋達羅鉢托	Pûrva-bhâdra-Padâs	Burwaladicalat	13	𠄎 Shitsu	𠄎 (シ ー チ) Shih	シ ラ チ ヤ ナ	室 ハ ツ キ ホ シ	
XXV	後跋達羅鉢托	Uttara-bhâdra-pudâs	Utaraladiralat	14	𠄎 Hioki	𠄎 (ビ ー ク) Pi	ヒ キ タ ー	壁 ヤ マ メ ホ シ	
XXVI	離伐底	Revati	Riwati	15	𠄎 Koi	𠄎 (ク イ) Kuei	ク イ ニ ホ ン	奎 ト カ キ ホ シ	
XXVII	阿修維	Asvini	Asuwani	16	𠄎 Rō	𠄎 (ロ ー) Lou	ロ ー ト ホ イ ン	婁 タ タ ラ ホ シ	
XXVIII	跋囉備	Bharani	Burani	17	𠄎 I	𠄎 (ウ エ イ) Wei	ウ キ ラ ホ タ マ ン	胃 エ キ ヘ ホ シ	
I	訖哩底迦	Krittikâ	Kirtik	18	𠄎 Bō	𠄎 (モ オ) Mao	モ ウ コ フ	昴 ス バ ル ホ シ	
II	羅睺	Rohini	Rohini	19	𠄎 Hitsu	𠄎 (ビ ー) Pi	ビ ー バ ナ ー	畢 ア メ フ リ ホ シ	
III	尾嚩伽	Mriguzîras	Margaschir	20	𠄎 Shi	𠄎 (ツ オ イ ー) Tsui	シ ー ム ナ ム	觜 ト ロ キ ホ シ	
IV	額達囉補	Ardrî	Artir	21	𠄎 Shin	𠄎 (シ エ ン) Shên	シ ヨ ハ ン フ	參 カ ラ ス キ ホ シ	
V	伐捺蘇	Punarvasu	Burnawaschu	22	𠄎 Sei	𠄎 (チ ン ヌ ン) Ching	チ ー ス ト ン	井 チ チ リ ホ シ	
VI	布留	Pushya	Bus	23	𠄎 Ki	𠄎 (ク イ) Kuei	ク イ ナ ニ ー	鬼 タ マ ツ ノ ホ シ	

備考
 本表二十八宿名目、梵、漢字は大孔雀呪王經、羅馬字綴りはギンチエル氏天文年代學に據る、高橋順次郎氏、及び魯人バンククロトフ氏の綴りと、蒙、羅馬字綴りは、外山高一氏所書、滿、片假名は、佐々木安五郎氏所書に據る。
 周、篆文は、三代古文、語音の聯絡を徴する爲に、別に右傍に於て支那音を附す。
 日本名稱は、和爾雅に據る。
 本表前稿の事
 本表、前稿に於ては、梵、二十八宿名目は、高橋順次郎氏梵字を以て書し、羅馬字を以て其發音を付し、蒙古、竝に滿洲、二十八宿名目は、外山高一氏所書に據る、且其發音は、各々漢字竝に羅馬字を以て付せり。
 而るに、此前稿は、印刷中、圖らざりき、大正十二年九月一日、大震災に罹り灰燼に歸せり、本書巻尾、奥書參看、今本書、再修に當り、速成を期して、補修

而も各國所傳の二十八宿、星數・名目及び星座にも異同あるを以て觀れば、世を以て言ひ傳へて聽者或は星數を加減し、或は星名を各自國語に譯し、又或又更に生面を開きて別に星象を觀せしものならむ。而して其名目、今現に中印度と蒙古と全く同じく、支那と滿洲とは其每宿の

第一表

二十八宿名目梵蒙周滿日對照表

梵		蒙 古		周		滿 洲		日 本	
XII	質多羅	Chitrâ	Tohëtre	1	𠄎 Kaku	チユエー (チヨ)	Chueh	チヨモトナ	角スホシ
XIII	娑縛底	Svâti	Suwati	2	𠄎 Kō	カンム (カ)	Kaug	カムトリ	亢アミホシ
XIV	毗釋迦	Visâkhâ	Schuschak	3	𠄎 Tei	テ (チ)	Ti	チーリーハ	氏ヒモホシ
XV	阿奴羅陀	Anurâdhî	Anurat	4	𠄎 Bō	フアンム (フワム)	Faug	フワムロホイン	房ソヒホシ
XVI	娑婆嚩	Jyestha	Tæste	5	𠄎 Shin	シ (シ)	Hsin	シントモビイ	心ナカオホシ
XVII	畢	Mûlam	Mul	6	𠄎 Bi	ウエイ (ウ)	Wei	ウキスホ	尾アシタレホシ
XVIII	前阿沙茶	Pûrva-shîdhîs	Burwaschat	7	𠄎 Ki	チ (キ)	Chi	キリホ	箕ミホシ
XIX	後阿沙茶	Uttara-shâdhâs	Utaraschat	8	𠄎 To	ト (ト)	Tou	トムトフ	斗ヒキツホシ
XX	阿菴哩	Abhijit	Abischi	9	𠄎 Giu	ニ (ニ)	Niu	ニウクホ	牛イナミホシ
XXI	室囉末	Sravana	Schirawan	10	𠄎 Jio	ニユ (ニ)	Nii	ニロヒ	女ウルキホシ
XXII	但備瑟	Danishtha	Tanis	11	𠄎 Kio	シユイ (シヨウイ)	Hsii	シヨチリ	虛トミテホシ
XXIII	娑婆多	Satabhishak	Satabis	12	𠄎 Ki	ウエイ (ウ)	Wei	ウキチユーシヤク	危ウミヤメホシ
XXIV	前跋達羅鉢	Pûrva-bhâdra-Pudâs	Burwaladiralat	13	𠄎 Shitsu	シ (シ)	Shih	シラチヤナ	室ハツキホシ
XXV	後跋達羅鉢	Uttara-bhâdra-pudâs	Utaraladiralat	14	𠄎 Heki	ビ (ビ)	Pi	ヒキタ	壁ヤマメホシ
XXVI	離伐底	Revati	Riwati	15	𠄎 Kei	コイ (ク)	Kuei	クイニホ	奎トカキホシ
XXVII	阿說備	Asvini	Asuwani	16	𠄎 Rō	ロ (ロ)	Lou	ロートホイン	婁タタラホシ
XXVIII	跋囉	Bharani	Barani	17	𠄎 I	ウエイ (ウ)	Wei	ウキラホタマン	胃エキヘホシ
I	訖哩底	Krittikâ	Kirtik	18	𠄎 Bō	マ (モ)	Mao	モウコフ	昴スバルホシ
II	羅睺	Rohini	Rohini	19	𠄎 Hitsu	ビ (ビ)	Pi	ビーバナ	畢アメフリホシ
III	箕尾	Mrigasiras	Margaschir	20	𠄎 Shi	ツ (シ)	Tsui	シムナム	觜トロキホシ
IV	阿星	Ardrâ	Artir	21	𠄎 Shin	シ (シ)	Shên	シヨハンフ	參カラスキホシ
V	伐捺蘇	Punarvasu	Burnawaschn	22	𠄎 Sei	チ (チ)	Ching	チーストン	井チチリホシ
VI	布留	Pushya	Bus	23	𠄎 Ki	コイ (ク)	Kuei	クイチニ	鬼タマヲノホシ
VII	阿失麗	Asleshâ	Aslis	24	𠄎 Rin	リ (リ)	Liu	ラリホ	柳ヌリゴホシ
VIII	莫伽	Maghâ	Mek	25	𠄎 Sei	シ (シ)	Hsing	シムリ	星ホトヲリホシ
IX	前發魯	Purva-phâlguni	Burwabalguni	26	𠄎 Chō	チヤン (チヤン)	Chang	チウホ	張チリコホシ
X	後發孔	Uttara-phâlguni	Utarabalguni	27	𠄎 Yoku	イ (ウ)	I	ウムク	翼タスキホシ
XI	訶悉類	Hustâ	Xusta	28	𠄎 Shin	チ (チ)	Ch n	チト	軫ミツカケホシ

本表、前稿に於ては、梵、二十八宿名目は、高橋順次郎氏梵字を以て書し、羅馬字を以て其發音を付し、蒙古、並に滿洲、二十八宿名目は、外山高一氏蒙古字及び滿洲字を以て書し、且其發音は、各々漢字並に羅馬字を以て付せり。

而るに、此前稿は、印刷中、圖らざりき、大正十二年九月一日、大震災に罹り灰燼に歸せり、本書巻尾、今本書、再修に當り、速成を期して、補修すること、本表の如し。

本表前稿の事

備考

本表二十八宿名目、梵、漢字は大孔雀呪王經、羅馬字綴りはギンチエル氏天文年代學に據る、高橋順次郎氏、及び魯人バンクトロフ氏の綴りと、交互二三の差異あり。

蒙、羅馬字綴りは、外山高一氏所書、滿、片假名は、佐々木安五郎氏所書に據る。

周、篆文は、三代古文、語音の聯絡を徵する爲に、別に右傍に於て支那音を附す。

日本名稱は、和爾雅に據る。

附言

而も各國所傳の二十八宿、星數・名目及び星座にも異同あるを以て觀れば、彼等或は星座の一二要星を以て言ひ傳へて聽者或は星數を加減し、或は星名を各自國語に譯し、又或は別名を附して相傳へ或は又更に生面を開きて別に星象を觀せしものならむ。

而して其名目、今現に中印度と蒙古と全く同じく、支那と滿洲とは其每宿の頭文字聲音を同じうして、

第二表 佛典六經二十八宿(即ち二十八星神)名號并に象形星數及び十二宮對比綜覽表

宿七方北	宿七方西	宿七方南	宿七方東	梵名	譯名、別名、星數、星象	漢名、梵別名、星數、星象	梵別名、星數、星象	梵別名、星數、星象、十二宮配當
二十八 婆羅尼	二十五 阿訶羅他	八 阿訶羅	一 基栗底柯	阿訶羅	長壽 俱火 六(形如車)	毗舍延 六(形如散花)	其尼製若 六(形如刺刀)	羊宮
二十七 阿訶羅	二十四 阿訶羅	九 阿訶羅	二 摩訶羅	阿訶羅	長壽 俱火 五(形如車)	毗舍延 五(形如散花)	其尼製若 五(形如刺刀)	牛宮
二十六 阿訶羅	二十三 阿訶羅	十 阿訶羅	三 摩訶羅	阿訶羅	長壽 俱火 四(形如車)	毗舍延 四(形如散花)	其尼製若 四(形如刺刀)	男女宮
二十五 阿訶羅	二十二 阿訶羅	十一 阿訶羅	四 摩訶羅	阿訶羅	長壽 俱火 三(形如車)	毗舍延 三(形如散花)	其尼製若 三(形如刺刀)	蟹宮
二十四 阿訶羅	二十一 阿訶羅	十二 阿訶羅	五 摩訶羅	阿訶羅	長壽 俱火 二(形如車)	毗舍延 二(形如散花)	其尼製若 二(形如刺刀)	蟹宮
二十三 阿訶羅	二十 阿訶羅	十三 阿訶羅	六 摩訶羅	阿訶羅	長壽 俱火 一(形如車)	毗舍延 一(形如散花)	其尼製若 一(形如刺刀)	蟹宮
二十二 阿訶羅	十九 阿訶羅	十四 阿訶羅	七 摩訶羅	阿訶羅	長壽 俱火 六(形如車)	毗舍延 六(形如散花)	其尼製若 六(形如刺刀)	蟹宮
二十一 阿訶羅	十八 阿訶羅	十五 阿訶羅	八 摩訶羅	阿訶羅	長壽 俱火 五(形如車)	毗舍延 五(形如散花)	其尼製若 五(形如刺刀)	蟹宮
二十 阿訶羅	十七 阿訶羅	十六 阿訶羅	九 摩訶羅	阿訶羅	長壽 俱火 四(形如車)	毗舍延 四(形如散花)	其尼製若 四(形如刺刀)	蟹宮
十九 阿訶羅	十六 阿訶羅	十五 阿訶羅	十 摩訶羅	阿訶羅	長壽 俱火 三(形如車)	毗舍延 三(形如散花)	其尼製若 三(形如刺刀)	蟹宮
十八 阿訶羅	十五 阿訶羅	十四 阿訶羅	十一 摩訶羅	阿訶羅	長壽 俱火 二(形如車)	毗舍延 二(形如散花)	其尼製若 二(形如刺刀)	蟹宮
十七 阿訶羅	十四 阿訶羅	十三 阿訶羅	十二 摩訶羅	阿訶羅	長壽 俱火 一(形如車)	毗舍延 一(形如散花)	其尼製若 一(形如刺刀)	蟹宮
十六 阿訶羅	十三 阿訶羅	十二 阿訶羅	十三 摩訶羅	阿訶羅	長壽 俱火 六(形如車)	毗舍延 六(形如散花)	其尼製若 六(形如刺刀)	蟹宮
十五 阿訶羅	十二 阿訶羅	十一 阿訶羅	十四 摩訶羅	阿訶羅	長壽 俱火 五(形如車)	毗舍延 五(形如散花)	其尼製若 五(形如刺刀)	蟹宮
十四 阿訶羅	十一 阿訶羅	十 阿訶羅	十五 摩訶羅	阿訶羅	長壽 俱火 四(形如車)	毗舍延 四(形如散花)	其尼製若 四(形如刺刀)	蟹宮
十三 阿訶羅	十 阿訶羅	九 阿訶羅	十六 摩訶羅	阿訶羅	長壽 俱火 三(形如車)	毗舍延 三(形如散花)	其尼製若 三(形如刺刀)	蟹宮
十二 阿訶羅	九 阿訶羅	八 阿訶羅	十七 摩訶羅	阿訶羅	長壽 俱火 二(形如車)	毗舍延 二(形如散花)	其尼製若 二(形如刺刀)	蟹宮
十一 阿訶羅	八 阿訶羅	七 阿訶羅	十八 摩訶羅	阿訶羅	長壽 俱火 一(形如車)	毗舍延 一(形如散花)	其尼製若 一(形如刺刀)	蟹宮
十 阿訶羅	七 阿訶羅	六 阿訶羅	十九 摩訶羅	阿訶羅	長壽 俱火 六(形如車)	毗舍延 六(形如散花)	其尼製若 六(形如刺刀)	蟹宮
九 阿訶羅	六 阿訶羅	五 阿訶羅	二十 摩訶羅	阿訶羅	長壽 俱火 五(形如車)	毗舍延 五(形如散花)	其尼製若 五(形如刺刀)	蟹宮
八 阿訶羅	五 阿訶羅	四 阿訶羅	二十一 摩訶羅	阿訶羅	長壽 俱火 四(形如車)	毗舍延 四(形如散花)	其尼製若 四(形如刺刀)	蟹宮
七 阿訶羅	四 阿訶羅	三 阿訶羅	二十二 摩訶羅	阿訶羅	長壽 俱火 三(形如車)	毗舍延 三(形如散花)	其尼製若 三(形如刺刀)	蟹宮
六 阿訶羅	三 阿訶羅	二 阿訶羅	二十三 摩訶羅	阿訶羅	長壽 俱火 二(形如車)	毗舍延 二(形如散花)	其尼製若 二(形如刺刀)	蟹宮
五 阿訶羅	二 阿訶羅	一 阿訶羅	二十四 摩訶羅	阿訶羅	長壽 俱火 一(形如車)	毗舍延 一(形如散花)	其尼製若 一(形如刺刀)	蟹宮
四 阿訶羅	一 阿訶羅	阿訶羅	二十五 摩訶羅	阿訶羅	長壽 俱火 六(形如車)	毗舍延 六(形如散花)	其尼製若 六(形如刺刀)	蟹宮
三 阿訶羅	阿訶羅	阿訶羅	二十六 摩訶羅	阿訶羅	長壽 俱火 五(形如車)	毗舍延 五(形如散花)	其尼製若 五(形如刺刀)	蟹宮
二 阿訶羅	阿訶羅	阿訶羅	二十七 摩訶羅	阿訶羅	長壽 俱火 四(形如車)	毗舍延 四(形如散花)	其尼製若 四(形如刺刀)	蟹宮
一 阿訶羅	阿訶羅	阿訶羅	二十八 摩訶羅	阿訶羅	長壽 俱火 三(形如車)	毗舍延 三(形如散花)	其尼製若 三(形如刺刀)	蟹宮

本表二十八宿名目は釋迦が阿羅等に宣せし梵名と俱に譯名及び別名を擧げしものなり
 (イ) 梁、扶南、伽婆羅譯 (ロ) 中唐、齊州、義淨譯、發音は(イ)と同じ (ハ) 初唐、中印度、波羅頗密多羅譯、發音は(イ)と同じ (ニ) 一名二十八宿經、後漢、安息國、安清、初譯、西晉、敦煌、竺法護、後譯 (ホ) 一名二十八宿經、會頭譯經同本異譯、吳、印度、竺律炎、大月氏、支謙、共譯 (ヘ) 隋、北印度、那連提婆耶舍譯 (ト) 中唐、南印度、獅子國(即ち錫倫) 不空譯 (チ) 五則顯現二星隱沒 (リ) 自餘小者爲之補翼

抑も光味は雪山に、又佉盧虱吒は佉羅坻山に在りて久しく天象を窺ひし者、大集經、日藏分、又釋迦は年二十九、出家入山、苦業六年、三十有六に至りて一切種智を得たりし者。大般涅槃經、佛本行集經、惟ふに釋迦は其學道の間在りて天象を觀じ、其大視力を以て能く日月五星の躔・離・運行・を識別記憶するに便なる所の二十八星座を明にして以て其星神名號を阿難等諸弟子に宣示し、大孔雀咒王經、孔雀王咒經、又光味・佉盧虱吒の輩は各々其二十八星神に關する理想を擧げて以て之を其徒衆及び龍王諸天衆に説教したれば、爾來二十八宿は佛道の流布と共に、五印度・中央亞細亞・支那・蒙古・滿洲・等東洋諸國に傳はりて廣く相知らるるに至りたり。寶星陀羅尼經、大集經日藏分、此の如く二十八宿を説く者古時印度に疊出し、又四七數の名目用ゐらるる者は是れ佛法の定例なり。彼の索訶世界主・梵天主・帝釋四天王二十八將即ち東方持國天王健達婆主二十八將・南方增長天王俱槃荼主二十八將・西方廣目天王龍王二十八將・北方多聞天王藥叉主二十八將の如き即ち是れなり。大孔雀咒王經、咒王經、然り而して、今二十八宿の位置及び距度を通觀するに、其躔布の遠近疏密必ずしも問はず、寧ろ其定例數目に一致せしめ、連珠的二十八座に星座を定めたるを知るべし。如是き事實上及び星座指向上より觀るも、二十八宿は印度の創定たる事自ら明なり。又彼の龍龜虎鳳四禽を以て二十八宿に配せし如きも亦、惟ふに初め印度人の想定に出でしものならむ。何となれば、佛典に於て龍・龜・虎・或は獅子・孔雀四禽を以て佛道守護の靈物となすのみならず、北斗七星を祭る所の曼荼羅には龍龜虎鳳を東北西南四方位に畫くを以て法と爲し、法勝寺星曼荼羅、應發、又棺郭若しくは其棺郭を安置する

第三表 佛典四禽表 龍龜師子(虎)孔雀

龍

大日如來變成龍字、字變成劍、劍變成不動明王身、明王變成利伽羅大龍、現忿怒相、利劍、龍王變成二人使者、持迦羅使者、制吒伽使者是也(佛頂尊勝心破地獄眞言儀軌)俱哩迦龍王(不動明王變身存劍形也)勝軍不動明王四十八宿諸大王(是觀音所變身)八使者祕密成就儀軌
東方 索訶世界主梵天王天帝釋、持國天王與健達婆主二十八將、西方 增長天王與俱槃荼主二十八將、南方 廣目天王與龍王二十八將、北方 多聞天王與藥叉主二十八將、皆說此大孔雀咒王經諸天龍等所守護處(守護國界主陀羅尼經)有愛羅嚩勢龍王、自然住空持白傘蓋、覆於佛、釋迦、頂餘吉祥龍、各持傘蓋、覆諸悉怛頂。光明童子因緣經、六十恒河沙俱伽如來、及諸天龍八部(佛頂尊勝心破內外諸供養菩薩、圍繞此法界宮殿中)地獄眞言儀軌有無量天龍八部等。勝軍不動明王四十八使者祕密成就儀軌常恒供養恭敬承事。勝軍不動明王四十八使者祕密成就儀軌南面畫龍王(毘沙門天王隨軍護法眞言)、西方有大天王、名曰廣目、以無量百千諸龍而爲眷屬、守護西方(大孔雀咒王經)佛世尊龍王、如是等一百八十大龍王而爲上首、及餘龍輩、有大神力具大光明、時現大威力、皆亦以孔雀呪王、守護於我并諸眷屬壽命百年(大孔雀咒王經)

龜

從毘盧遮那佛胸中、有善注大悲甘露乳流出、成甘露海滿虛空法界輪、於海中復想波羅字、其字變爲龜形、甲如金色、其身廣大無量由旬、龜背上復想囉哩字、其字變爲黃金殊妙蓮花、又於花臺上想有般羅呼梵字、此三梵字爲須彌山、於其山頂想有五梵字、便爲大殿、諸天妙樂奏歌詠、於彼殿內有曼荼羅(念誦結護法)地水火風空五輪、水輪上想鉢羅字、色金色、變成一金龜、背上想茶字、即變成妙高山(佛頂尊勝心破地獄眞言儀軌)其天頭上有七龍頭狀如蛇形、十二天供儀軌金剛瑜伽護摩儀軌又觀身內在大海、其底有鉢羅字色金色、其字變成金龜、其龜上有蘇字、變成須彌山、其山上有阿字、變成種種色微妙金剛地輪(佛頂尊勝心破地獄眞言儀軌)

師子(虎)

微妙金剛地輪輪上有三十八肘道場、暗字變成三重摩尼寶殿、即欲色無色界也、以七寶莊嚴其妙宮內一肘壇場、即是十方界、其場中有大覺師子座、其中有阿字、變成四肘瑟石、即重曼荼羅也、其重者發心修行菩提涅槃也、其上在大蓮華、其華之上有阿字、變成法身摩訶毘盧遮那如來身、說阿鑿覺略欠、此五字變成五智如來身(佛頂尊勝心破地獄眞言儀軌)於如來部勝妙輪中有三種梵字、中想蘇字、左右想阿字、即

孔雀

於蓮華部中並有三梵字、中央有摩合字、左右皆有囉里字、此三字變爲孔雀座(念誦結護法)白鶴孔雀等諸妙鳥王翔集莊嚴(守護國界主陀羅尼經)西面畫孔雀王(毘沙門天王隨軍護法眞言)往昔時雪山南面有孔雀王、每於晨朝、當誦此大孔雀呪王、晝必安隱、暮時誦誦夜必安隱、彼孔雀王、曹於一時忘、不誦此大孔雀呪王而爲擁護、放逸昏迷入山穴中、以自安處、捕獵怨家何求其便、遂以鳥網縛孔雀王、被怨繫時憶本正念、如前詞誦大孔雀呪王、於所繫縛自然解脫、眷屬安穩、至先住處(大孔雀呪王經)

所の石室の四方面に龍龜虎鳳を畫き、若しくは彫刻して以て死者をして其歸すべき北方極陰の方位に正しく向はしむると同時に、四禽をして其死者の遺骸を永久に鎮護せしむる法式の如きも亦佛法に於て行はれたればなり。

佛道に於ける天體觀

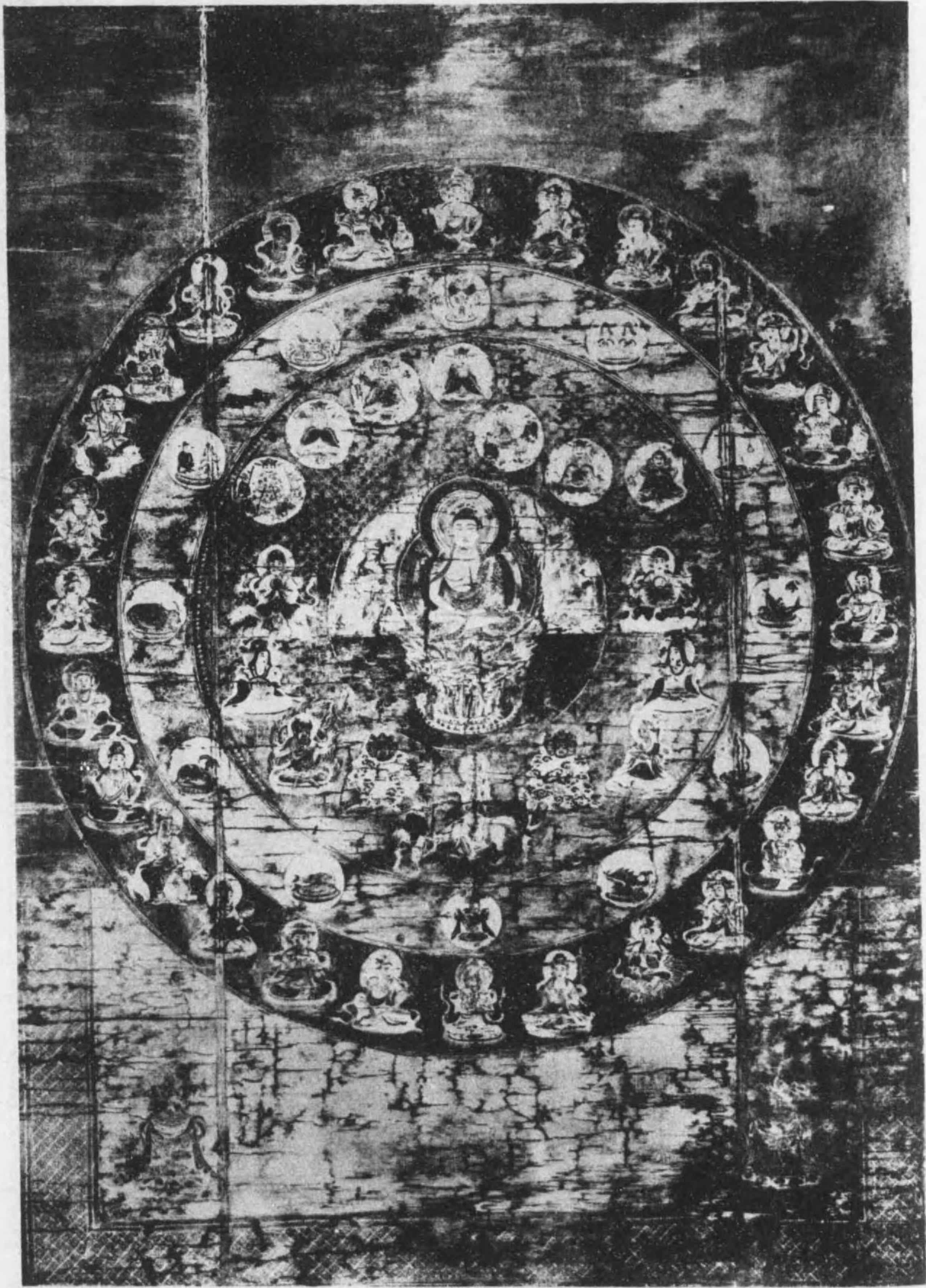
爰に印度に於て、其總ての天體を佛神即ち天神と觀ぜし因由を徴し、以て印度天體觀に關する論局を收めむ。

佛經曰二十八宿諸大王是れ觀音所變身と。勝軍不動明王四十八使者秘密成就儀軌蓋し一法身を以て二十五菩薩——五百菩薩を現す千光眼觀自在菩薩秘密法經見地より來る者。而も此言、即ち是れ辰曜即ち天體を以て天神と觀ぜし原因を道破せり。

然り而して、法隆寺星曼荼羅は、觀音本師彌陀如來竝に北斗・九曜・獸帶十二星像と俱に、二十八宿即ち二十八星神（又二十八守護神）星像を顯はせり。大孔雀咒王經今掲載して以て、佛道に於て如斯き理想の下に、宇宙天體を觀察せし事相を想見すべからしむ。

夫れ佛道に、如斯き廣大にして玄妙なる觀察在て存するに徴するも、二十八宿印度の創定たる亦攷ふべし。

法隆寺星曼茶羅之第一圖



法隆寺星曼茶羅に就て

此星曼茶羅、縦曲尺約四尺、横約三尺、總圓形、直徑二尺七寸に畫し、十二宮各圓形、直徑一寸八分なり。而して其内部を四層に部別し、中央内院彌陀如來。第二層・上部・北斗七星、下部・九曜。第三層十二宮。第四層二十八宿。以上の諸曼茶羅相を精細微妙に畫きし者にして、原本南都法隆寺所藏、東京帝室博物館其寫を藏す。而して本圖は博物館本を寫せしものなり。今更に内院及び各層畫面の位置に従ひて、其名目を細記すれば左の如し。但し第二層北斗・九曜名目は梵天火羅、第三層十二宮譯名は宿曜經に據りて記載せり。

太陽(右端)

- | | | |
|------------------------------|------------|----|
| 貪狼星 | 辰 | 水星 |
| 巨門星 | 歲 | 木星 |
| 祿存星 | 計都蝕神星 一名豹尾 | |
| 中央内院彌陀如來、第二層文曲星(中央)土宿星(鎮星)土星 | | |
| 廉貞星 | 羅喉蝕神星 一名黃幡 | |

武曲星 熒惑星 金星
 破軍星 太白星 火星

太陰(左端)

蝎宮(右端)

秤宮 弓宮

女宮 磨羯宮

第三層獅子宮(中央) 瓶宮

蟹宮 魚宮

男女宮 羊宮

牛宮(左端)

第四層二十八宿(即ち二十八星神)

按ずるに、此星曼荼羅は、梵天火羅唐僧一に基づき、其他千手千眼觀世音菩薩大悲心陀羅尼、千光眼觀自在菩薩祕密法經、千手觀音造次第儀軌等、諸經を參考して作成せしものならむ。

法隆寺傳に、筆者鞍作止利ケラツノリとあれど、止利は推古朝即ち隋時代の佛師なり。此曼荼羅、既に一行所選の梵天火羅に據りて成りし者なれば、中唐以前に溯らずと雖、而も其第二層北斗七星神、唐冠唐服、且全幅圖畫、總て精妙莊嚴を極め、金碧燦爛、筆者の信仰心、亦自ら圖上に溢れ、而し

て其圖面又極めて幽雅蒼古なり。是等の點より推して觀ずれば、或は唐代眞言鬱興の當時若くは其を距る遠からざる時代に於て成りし者ならん乎。

若し夫れ、曼荼羅其物に至りては、言義廣多、今敢て茲に贅せず。但し曼荼羅は、金剛・寶生・蓮華・羯磨部、其餘、波羅密内外供養等、凡そ三十七曼荼羅主名號に依りて部別せらるべく。念誦結護法普通部、不空三藏傳而も其廣略大小、一切の曼荼羅を爲すの場合を擧ぐれば、凡そ三千五百曼荼羅の多にも至るべしと云ふ。求願觀想法、

四、支那に於ける二十八宿

支那二十八宿の名目始て先秦の書に顯る

又支那は、其二十八宿每宿一二の要星會頭を基として別に大に生面を開き、二十八宿は、龍龜虎鳳の具象を以て皇極三垣(紫微・太微・天市)を周匝守護する狀なりとし、史記天官書、靈臺天文圖說更に其每一宿の象形に従ひて文字若しくは物類の名を以て命けたり。而して篆體文字能く其星象に一致せり。天文要覽、恒星繪圖支那に於ける二十八宿の成立は夫れ此の如しと雖、而れども二十八宿は前記の如く果して印度の創定ならば、支那は之を聞知せしものなるや明なり。而して其時機は未だ遽に斷言し難きも、惟ふに大抵周代

戰國の初前四〇〇の頃ならむか。

蓋し其名目突然始て呂氏春秋に顯る。箕子星表、四宿缺而して孔門七十子の徒禮記月令に轉載し十三經禮記、月令注疏更に爾雅等にも見ゆるに至り、漢征和二年西紀前九一年司馬遷が史記天官書に於て、星天に於ける二十八宿大象始て發揮せられたり。

此の天官書は遷死せし後ち約五十年、彼れの外孫楊惲(母は遷の娘なり)に依りて史記と俱に刊行せらる。

余は既に天文要覽附言に於て曰へり、三國の初西紀二二三年の頃吳朝の陳卓は巫咸・甘德・石申・三家が指定せし星を集めて始て圖録に列著し、後ち二百餘年元嘉十一年宋朝の錢樂之は、天球を作り黃黑白三色の珠を用ひて三家を殊別し、陳卓の星座・星數に一致せしめたりと。而も是れ唐の李淳風が著せし晋・隋兩天文志の文に據りしものなりき。此の淳風が文は固より露骨ならざれども其淳風が意の二十八宿を以て三家指定外なる特別星と爲せしに在りしことは、文體に於て自ら知らるべし。而れども二十八宿は石申の指定せしものとして世に知られたりき。抑も其傳へ聞く所の印度觀二十八宿每宿の一二要星を基として此支那觀二十八宿の象形・名目を定めし者、或は石申其人なりしが故に斯く世に知らるるに至りしか。後人仍ほ石申を稱して百代歴家の祖と爲せり。史記許林甘德、石申の條來注

然に陳卓が星圖を著はせし前八十餘年、東漢の建和中一四九年の頃天文及び梵漢の學に精通せる安息國王子沙門

安清、洛陽に於て舍頭諫經一名二十を譯せり。開元釋教錄 惟ふに陳卓は是の經文に由りて蓋し頗る得る所ありしならむ。加之ならず、陳卓が此星圖を著せし時は恰も印度の天文星象に精しき大月氏國の支謙が吳の太子傳となりて、同じく天文に明なる印度人竺律炎と俱に吳國に在りき。當時此二人は共同して摩登伽經一名二十八宿經を翻譯開元釋教錄せし際なるを以て觀れば、陳卓は印度の天文及び二十八宿星象を、更に又親しく彼等より傳へられしこと亦疑ふべからず。是に於て陳卓は蹶起して自己より五百餘年前西紀前三二なる甘德・石申のみならず、殆んど二千年前紀元前一、六なる商朝の巫咸にも追及し(若しくは彼等の名に假托し)て以て、始て星圖を作製することを得たりしものならむ。因て惟ふに印度の天文及び二十八宿觀測法の委しく支那に傳へられしは蓋し此頃二三の頃二二三にあらむ。支那は唐朝の初に至りて、類りに印度の星學者を聘して重要の官職に置き、天文曆術を司らしむ、是れ支那天文、唐朝に至りて始めて委しきを得し所以ならむ。此星圖は總て二百八十三官、一千四百六十五星、後ち知者ありと雖、敢て妄に一二を其間に注せざるもの、即ち宋天文圖第三編支那系に由りて其星官・名數を徵すべし。然り而して今之を通觀するに、星名多くは秦漢の間に定るに似たり。

太古西陲交通の情勢

今更に地理上に關係せし事蹟に由りて二十八宿の支那に傳來せし當時の狀勢を明にせむ。

秦は支那の西疆に居て周代戰國の頃より最も強大を致し、後に周朝に代りて天下を統一し、古來久しく塞外西方の諸種族とも交通したりき。其西遙に月氏あり、更に又西の方葱嶺を踰れば則ち印度なり。印度衍敦谷漢代國都は長安を去る九千八百六十里。故に秦は支那の版圖中に於て最も早く印度の文物に接觸すべき位置にありき。而して秦の大宰相呂不韋が衆儒を集めて編輯せしめたる呂氏春秋に於て二十八宿の名目始て顯れしこと前記の如し。乃ち其印度星象觀の秦に傳はりし徑路亦窺ふべし。月氏の疆域内に古來東漸せし印度文物の先づ瀦聚せし一部落ありき。漢代に至り此部落に名稱を付して燉煌と曰へり。此地は後に地變の爲に埋没せしかど、近時漸く東西の研究者の注目する所となりて大谷光瑞伯及び埃人スタイン氏の如きは熱心に探索して此地を發掘し、佛典・書畫・器物等、印度希臘羅馬の感化を受けしもの其他漢魏六朝唐代の物品をも獲たりと謂へり。抑も此燉煌の地は、昔し印度と支那との交通の焦點たりし所にして、今此印度漢代等の文物に關係せし發掘品あるを以て觀れば、漢以前に於て周秦の人の是等の地に往來せし者ありしこと亦疑ひなし。而して印度の天文星象觀の如きも亦、蚤く先づ是等の地に傳はりて、周秦の人又之を傳へ得るに至りしこと亦自ら知るべし。舍頭諫經翻譯者竺法護は西晉代燉煌の人なり。然るに明史曆志は曰へり、堯羲・和・仲・叔・に命じて四方に分宅せしむ、羲仲・羲叔・和叔は則ち嵎夷を以て南より朔方に交し限りと爲る。獨り和仲は西方に宅して限るに地を以てせず、豈當時聲教の西被する者遠きに非ずや。周末に至り疇人即ち天文曆術世業者子弟、西域・天方諸國に分散し、

壤を西陲に接す。東南大海の阻つる若くなるに非ず又極北嚴寒の畏なし、則ち書器を抱きて西征するは勢固より便なりと。果して然らば、古の支那星曆家、燉煌以西更に遠く西征し、其探究功を奏して、印度天文星象を齎し還る所あらむ。

如上地理上の事蹟と、當時の狀勢とに由りて觀るときは、二十八宿の名目が先秦儒者の編輯せし呂氏春秋に於て天下に先んじて發揮せられし事由亦自ら分明ならむ。

五、亞刺比亞二十八宿と印度希臘拔比倫の關係

附ギンチエル氏星圖に關する疑問

然るに又亞刺比亞人は、西紀前數百年、或は駱駝に跨り沙漠を横ぎりて商業に従事し、或は紅海を航して東印度のプウリー (Puri.) 港より綿布を希臘に輸入せり。希臘語に「ガンゼチカ」といふ綿布は語原を印度の「ガンゼス河」に發すとかや。然り而して、希臘には蚤く拔比倫星學行れたりき。亞刺比亞人、既に大沙漠に、又海洋に天象を觀じ、又印度希臘に直接せる此の如し。二十八宿亞刺比亞觀ある良に故ありと謂ふべし。

而れども又亞刺比亞は、東南亞細亞埃及間の交通大道に當り、其建國亦早くして、米加は亞當創起し亞

伯拉罕建置すと稱し、米地那、ヤンボ (Yambo.) 港と共に、古へより行旅・探尋者跡を絶たず。或は蚤く星學者尋討し、依て亞刺比亞人星象を聞知せしやも亦未だ知るべからず。

亞刺比亞人は二十八宿を觀じ、四時の循環に注意せり。而して其二十八宿名目は則ち左の如くにして、其星座・星數は印度及び支那と異同あり。ギンチエル氏天文年代學

- (14) as-simâk
- (15) al-ghafr
- (16) az-zubânay
- (17) al-iklîl
- (18) al-kalb
- (19) aš-shaula
- (20) an-na'ajim
- (21) al-baldâh
- (22) sa'd ad-dabih
- (23) sa'd bula'
- (24) sa'd as-su'ud
- (25) sa'd al-ahbija
- (26) al-fargh al-awwai
- (27) al-fargh-aitâni
- (28) botn al-hût
- (1) aš-saaatani
- (2) al-butain
- (3) at-turaijâ
- (4) al-dabaran
- (5) al-dak'a
- (6) al-han'a
- (7) al-dirâ'u
- (8) an-natra
- (9) at-tarf
- (10) al-gabha
- (11) az-zubra
- (12) as-sarfa
- (13) al'awwa

今ギンチエル氏大陰止舎之圖を掲げて、亞刺比亞・印度・兩星座異同對比の參考に供す。

ギンチエル氏西紀四千年前に於ける太陰止舎・亞梵周二十八宿對比圖を作り天文年代學に載す、其三國列宿の探究、及び太陰止舎・推歩の勞、亦多とすべし。

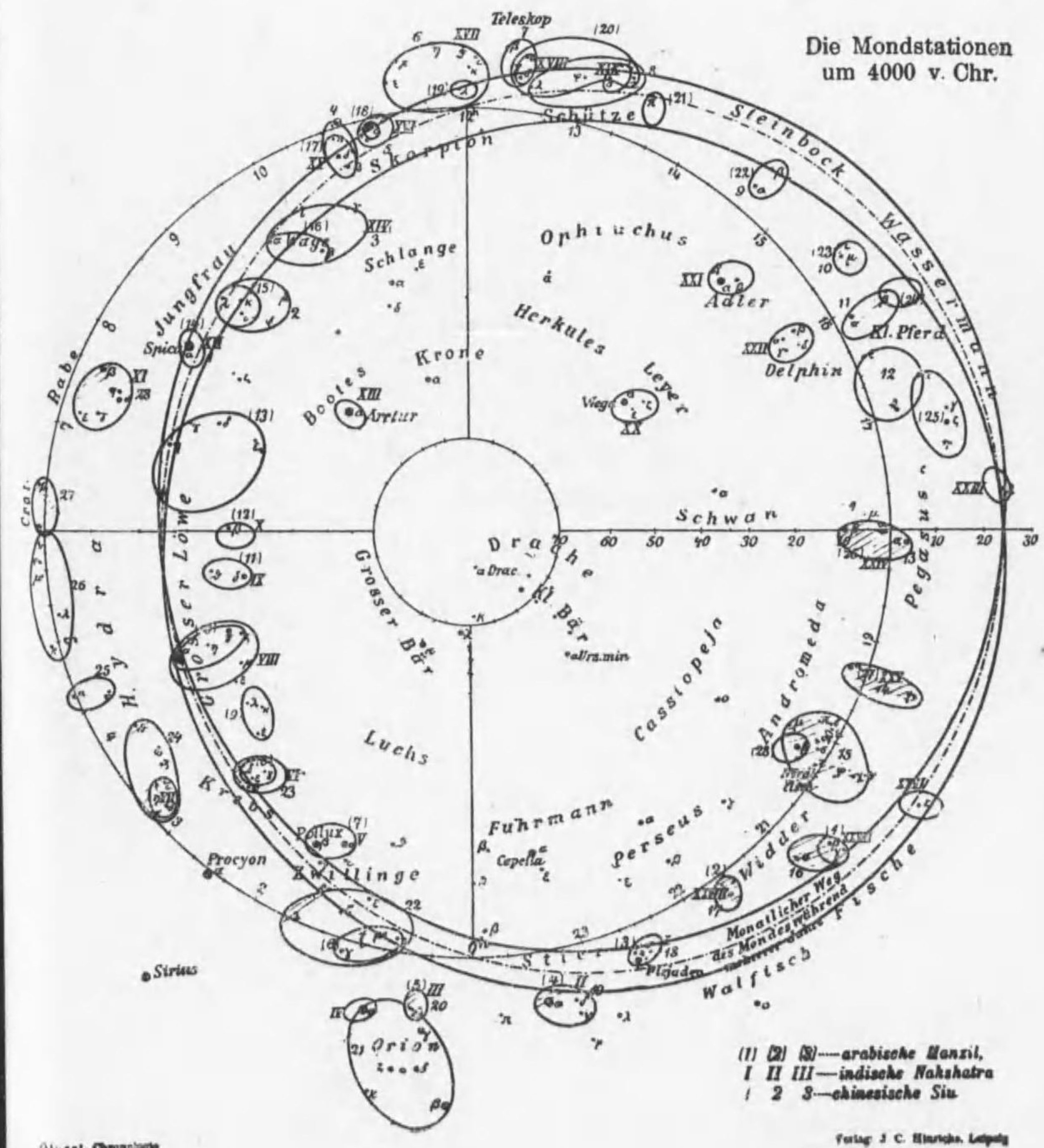
而れども、今試に其梵星座を佛經二十八宿と對比するに、頗る符合せざるものあり。因て佛經ギ氏二十八宿星座對照表を掲げて其異同を明にし聊か意見を付して博雅に問ふ。

第四表
佛經ギ氏二十八宿星座對照表

	a		b		ギ氏星圖	
	譯名	星數	譯名	星數	譯名	星數
1	名稱	6	昴	6	昴 第五	6
2	長育	5	畢	5	畢	5
3	鹿首	3	觜	3	天關、天關南增	3
4	生養	1	參	1	參 第四	1
5	增財	3	井	2	北河	2
6	織盛	3	鬼	3	鬼	3
7	不觀	5	柳	5	柳	5
8	土地	5	星	5.6 (宿)	軒轅	6
9	前德	3	張	2	西上相、西次相	2
10	北德	2	翼	2	五帝座、太子	2
11	象	5	軫	5	軫	5
12	彩畫	1	角	1	角	1
13	善元	1	亢	1	大角	1
14	善格	2	氏	2.4 (宿)	氏	4
15	悅可	4	房	4	房	3
16	尊長	3	心	3	心	3
17	根元	3	尾	7	尾	8
18	前魚	4	箕	4	箕	2
19	北魚	4	斗	4	斗	2
20	無容	3	牛	3	織女	3
21	耳聰	3	女	3	牽牛	3
22	食財	4	虛	4	匏瓜	4
23	百毒	1	危	1	蠱壁陣 第七	1
24	前賢跡	2	室	2	室	2
25	北賢跡	2	壁	2	壁	2
26	流灌	1	奎	1	外屏 第三	1
27	馬師	3	婁	3	婁、婁南增	3
28	長息	5	胃	3	胃	3

(宿)は宿曜經の星數

第二圖
ギンチエル氏
太陰止合の圖



本論に入るに當り、特に注目すべきものあり。

(1) 右對照表に引用せし佛經二十八宿の翻譯。

漢代に當り、安息國安清、舍頭諫經を譯し、始て印度二十八宿を意譯せり。然るに、三國の時に至り、印度竺律炎・大月氏支謙・摩登伽經舍頭諫經を共譯し、周名角亢乃を用ゐたり。爾來翻譯者之を踏襲し、月藏・日藏・宿曜・儀軌諸經二十八宿、皆周名を用ゐたり。而して其星座は、皆諫經に同じ。

(2) 古今圖書集成乾象典星辰部紀事。

乾象典星辰部曰、西古曆亦列二十八舍、所定二十八距星、皆與中古曆合、第觜宿、西用天關、爲小異耳、是れに由れば、二十八宿距星俱に、梵周一致せるものなり。

右兩項に據れば、二十八宿の梵周一致は、確乎として復た動かすべからず。

(3) 印度二十八宿は連珠的なり。

印度は二十八宿を連珠的に定め、之に由りて日月五星の躔・雜・運行を觀察せり。前兩項の典據と、本項の星象とに由りて、二十八宿の梵周一致は益々以て明なり。

夫れ二十八宿の梵周一致、典據星象、分明此の如し。又更にギ氏梵名目に就て觀るに、大孔雀呪王經釋迦宣示名目に一致せり。然るにギ氏の梵星座、佛經星座と異同ある、本表記載する所の如し。抑もギ氏如何して梵星座を斯く圖録せし歟、是れ尋ねべきなり、因て氏の引用書を檢尋するに印度二十八宿星座

三種對比表あり年代學三四頁其星座皆此の太陰止舍圖・梵星座に一致せり。此餘若干参考書あり同書四頁惟ふに、是等原著者廣く佛經を研究せず、女宿牛宿を織女牽牛と爲せし等憶斷も亦多し。而してギ氏之を引用せり。是れ氏の梵名目、佛經大孔雀經名目と一致せるに拘らず、其星座、佛經星座と符合せざる所以なり。且夫れ織女牽牛大角等を混ずれば、印度二十八宿連珠的天象に台せず。知らず此の説、ギ氏果して首肯するや否を、姑く附記して参考に供す。

六、獸帶

又獸帶は、加耳垓亞人 Chaldaer. 恐らくは前一千年の頃の想定せしものとせらる。デステルウエ或は謂ふ、拔比倫人 Babylonian, 前二千餘年蚤く既に獸帶を想定せりと。其世界生物の主なる者を以て想定せし十二星象は能く歲時に適合し、其觀測も亦頗る精妙にして、星像皆能く黃道に一致せり。惟ふにヒツハル Hipparque de Nicee. 前一二三トレモイス Ptolomee. 西紀一三〇年は、蓋し之を基として觀測を進め星圖を創作せしものならむ。

然り而して印度は、獸帶を十二神と觀じ、十二神、十二ヶ月に主當して、日月五星二十八宿（即ち二十ハ八守護神）と俱に、世界人類の生活を保護すと説けり。大集輯口或分、宿曜經

附

(一)、磨羯巨蟹二者南北回歸線配當に就て

古の人の黃道獸帶を想定して命名するや、歲時と生物との關係を表示せし寓意在りて存すると俱に、太古人類生活の状態亦併せ觀つべきものあり。

而して獸帶中、巨蟹は北回歸線に、磨羯は南回歸線に配せらる、蓋し古の人、二者俱に、天時回歸の意義を寓して、此の配當を爲せしものにあらざるなきを得ん。

今、巨蟹磨羯の行動を概記し、且磨羯魚因緣經の大意を摭録し、聊か卑見を附して以て参考に供す。由來蟹なる者は、他の動物の如く正面に行進せずして、特殊の行動を爲す者なり。彼れ、或は左方を指して邁往し、忽ち右方に回り來たり。或は又右方を指して進行し、忽ち左方に退き去る。而して磨羯魚なる者は、掉尾一番して巨船を掀翻し去り、若しくは碎破する所の怪力を有すと稱せらる。

磨羯魚因緣經卷四十七 曰く、昔し師子劫城の商主、珍寶を求る爲に、其子等と共に、南を指して遠く大海を航せしに、磨羯魚の爲に船を碎かれ、浮物に憑りて出沒す。時に麗麗なる多くの魔女來り、商主等を助けて我家に留め、情緒纏綿頗る優遇して、是れより南に行く勿れと説く。商主等心に恐怖の念を生じて、北瞻部洲に歸らんとし、竊に遁れて海濱に出づれば、會ま天馬集りて海濱に遊食す、中に天馬王有り、商主等に告げて曰く、卿等誠に善く我を信せば、安穩に北瞻部洲に歸らしめんと。商主等心に堅く天馬王の言を信じ、各々天馬に乗じて北に歸れり。

豈二者共に、古へ純樸の世、天時旋回の意義を表示する好標識ならずとせむや。是れ古の人が、此の二者を以て、北と南の回歸線に配當せし所以ならむ耶。

(二)、印度の十二宮神種別に就て

日藏經十二宮中、雙鳥の名稱は、尤も注目すべきものとなす。乃ち雙鳥ありて、他の寓意の表示と共に、世界生物の重なる者、十二宮中に始めて全く具るを観るべきなり。試に之を類聚すれば、左表の如き種別となる。

(三)、西洋の獸帶觀

今獨逸のヂステル、ウエーク氏の見解の大意を摭りて、西洋に於ける獸帶觀の一斑を概敘せむ。曰く、星像命名は、一樣に確かなることを以て與へられしにあらず。一二のものは其重なる星象形狀に據り、餘は他の仕方の上に導かれたり。而して田舎の生活の出來事を顯せしものなりと。其餘は、左に掲ぐる恒星繪圖解釋に依りて知らるべし。

獸帶十二宮神種別表 第五表

人	獸	鳥	魚	介蟲類	器物類
類 (二)	類 (三)	類 (一)	類 (二)	類 (二)	類 (二)
天女之神	特羊之神	雙鳥之神	天魚之神	蟹之神	秤量之神
射(神男)	獅子之神	鵝之神	磨之	蝸之神	水器之神
.....
田	家	鳥	大魚	陸	水
.....
和	獸	類	魚	蟲	利

獸帶解 第六表

春		冬			秋			夏			春	季
二月	一月	十二月	十一月	十月	九月	八月	七月	六月	五月	四月	三月	節
雙魚宮	寶瓶宮	磨羯宮	射主宮	天蝸宮	天秤宮	天女宮	獅子宮	巨蟹宮	雙兒宮	金牛宮	白羊宮	天文要覽恒星繪圖
肥大なる二つの鮮魚を、尾の上にて、平扁にして長き緒の兩端に結び繋ぎたる様なり	裸體の壯男が、右手瓶を殆ど倒に傾け持ち、活水を出せしめて限りも無く瀝らし、左手は腰部より右肩に纏へる所の長き帛の一端を執り、高く纏しつゝ疾走する様なり	上部は山羊にして下部は魚なる動物が、前足を翻起し、掉尾一番して、進行を開始せんとする様なり(南回歸線)	上部は人にして下部は馬なる裸體の壯男が、雙翼を飛揚し、弓に矢番ひ、滿を持して、眼を目的物に注ぎつゝ、奔馳する様なり	蝸が斜に横たはれり	積杆附きたる二ツ皿の秤なり	女神が美はしき髪を被り、雙翼を長く垂れ、身には莊嚴なる衣裳を纏ひ、足には草鞋様の履物を穿き、顔には婉然たる慈愛を湛ひつゝ、右手羽ペンを持ち、左手豊熟せる麥穂を持てり	獅子が口を開きて舌を長く垂れ、前足をば或る物に載せて、恰も炎熱の下に暫し憩ひし様なり	大蟹が殆ど起て、將に却行を開始せんとする様なり(北回歸線)	妙齡なる二人の裸體男兒、各々帛もて腰部を覆ひ、後者は右手棍棒を持ち、前者は右手祭器を捧げ、左手矢を執れり	牛が怒り狂ひる様なり	羊が温然と座して、快げに願望せる様なり	解
魚獵を表す	水利を表す	北太陽の南回歸線より再び北に昇行するを表す	田獵を表す	疾疫、害蟲等の危害ある季節を告知らす	晝夜平均の表示	文明、平和、及び穀物の豊穰を表す	炎熱に苦しむ時季を表す	太陽の赤道に却行するを表す	神を祭り、相愛し、外侮を禦ぐの寓意を表す	温暖なる時季に際會して、生物が勢つきて物興する様を表す	麗かなる季節に會ひて、萬物快よき様を表す	

第七表 獸帶十二宮名目表

拉丁	希臘	希臘的梵	純梵	拔比倫	亞刺比亞	波斯	瓜哇	天文要覽
Aries	κρίας	Kriya	Mesa	Ku	Al-hâmal Al-kulsh	Varuk	Kîmel	白羊宮
Taurus	ταύρος	Tavuri	Vrsa	te-te	Al-taur	Tôrâ	Târed	金牛宮
Gemini	σίδυμος	Jituma	Mithuna	Mas-masu	Al-jauzâ Al-tau'amân	Dô-patkar	Jus	雙兒宮
Cancer	κράβρος	Kulira	K Mukata	Naugaru	Al-saratân	Kalakang	Sertan	巨蟹宮
Leo	λείων	Leya	Sidha ***	A	Al-âsad	Sêr	Asad	獅子宮
Virgo	παρθένος	Puthana	Kauya	Ki	Al-sûnlula Al-adsrâ	Khûsak	Sumbûla	天女宮
Libra	ζυγόν	Jûka	Tula	Nûru	Almizân	Tarâzûk	Mizan	天秤宮
Scorpius	σκορπιός	Kaurpya	Vrsika	Akrabu	Al-âkrab	Khaxdûm	Kâla	天蝸宮
Sagittarius	τοξότης	Tauksika	Dhanus	Pa	Al-kanus Al-râmi	Nimâsp	Kos	射主宮
Capricornus	αίγοκέρως	Akokera	Makara	Sahû	Al-âschidy	Vahik	Jûdi	磨羯宮
Aquarius	ὑδροχόος	Hrdroga	Kumbha	gu	Al-dalu	Dâl	Dilwi	寶瓶宮
Pisces	ἰχθύς	Ittha	Mina	Zib	Al-hut Al-samaka	Mâhik	Khot	雙魚宮

一 本表希臘、希的梵、純梵名目は高橋順次郎氏の書する所に據る、但し、ギンチエル氏と異同あり。

一 拔比倫、亞刺比亞、波斯、瓜哇名目はギンチエル氏天文年代學に據る。

一 獸帶十二宮譯名、隋譯口藏經、唐譯宿曜經、宋譯根本儀軌經、明譯回回曆法の譯名は天文要覽に掲載せり、附載第六表即ち是なり。

一 支那又星天を十二方位に部別し、子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥十二宮と謂へり、天文要覽、東西十二宮二十八宿對比圖を参看すべし。

備考 胡、は五胡なり、西晋永寧（西紀元三〇一年）以降、蜀李趙劉燕慕容涼張秦苻殆んど同時に崛起し、僭して各々國を建て帝と稱し、天下の大半を有す、世に之を五胡夷と謂ふ。爾來無慮一百五十年、新陳代謝、東晉の世を過ぎ劉宋の初に至り前後相亡ぶ。

第八表 波希 七曜名目對照表

七曜	希臘名	希臘的梵名	梵名	波斯名	胡名
日 太陽	ヘリオス	ヘーリ	阿彌底耶 <small>アミティヤ</small>	曜森勿 <small>(Yek-sunbad)</small>	密 <small>ミ</small>
月 太陰	セレニ	—	蘇摩 <small>ソマ</small>	婁禍森勿 <small>(Doub-sunbad)</small>	莫 <small>モ</small>
火 熒惑	アレス	アーラ	惹吸羅迦 <small>アキラクカ</small>	勢森勿 <small>(Seh-sunbad)</small>	雲漢 <small>ウンカン</small>
水 辰星	ヘルメス	ヒムナ	割陀 <small>カッタ</small>	掣森勿 <small>(Ochar-sunbad)</small>	咥 <small>ツイム</small>
木 歳星	ゼウス	ジュヤウ	勿哩訶婆跋底 <small>ブルハババチ</small>	本森勿 <small>(Penj-sunbad)</small>	鶻勿 <small>フムド</small>
金 太白	アフロデイチ	アースブデート	戊羯羅 <small>ビジュラ</small>	數森勿 <small>(Shesh-sunbad)</small>	那歇 <small>ナキ</small>
土 鎮星	クロノス	コーナ	陰乃以室折羅 <small>インノイシヤクハラ</small>	翕森勿 <small>(Haf-sunbad)</small>	祝浣 <small>ツクワン</small>

本表希臘名、希臘的梵名は高橋貞次郎氏の説に依るものなり

爰に獸帶名目表を掲げて、獸帶星象・二十八宿星象と共に廣く世に知られしを徴し、又希梵波胡七曜名目對照表を載せて、是等諸國の七曜名稱の異同を觀ぜしむ。

七、太古の交通

西東の星象觀の相傳

以上は二十八宿及び獸帶星象は、古の或る星學者、蚤く相往來して相傳せしものならむと云ふ所見を述ると同時に、具星象の想定及び相傳に關する事蹟と當時の狀勢とを稍々具體的に記載せしものなり。亞細亞大陸東西の交通、太古に於て蚤く既に行はれ。古今圖書集成邊裔典 又支那周代星曆家遠く西征し、西域天方諸國に分散して斯道を探究し。亞刺比亞人東印度及び希臘に通ぜし如き前記の如し。印度は實に自ら連鎖となりて以て、東西星象觀相傳の道を啓發せしものなり。前段に掲載せる諸表の如き亦其言文聯絡の一端を徴すべし。而して加耳埜亞の天文數術は、更に又西に傳はりて、西洋今日の學術文藝の淵源を爲したりき。

抑も古代高踏超邁の諸研究者固より多し。彼の拘利氏名曰長歷の如きは、閻浮樹を求る爲に、六大國・七林・七河を度り六山を踰へ、更に金邊山頂に登りて、遂に能く閻浮樹を認め得たり。相傳ふ、拘利氏は行歩飛

が如し水中を行けば前脚未だ没せざるに後脚已に移り、草上立世阿毘曇と闊浮提品を以て草葉未だ踏かざるに便ち歩を移すを得たり太古の諸研究者、其道を求め萬死辭せず、必ず其目的を達す、千載の下之を證して餘りあり。今日、南・北極探險、飛行機・潜水艇・其他各般學術界の諸研究、皆然らざるはなし。二十八宿と獸帶との西東星象觀、古の高踏超邁なる或る星學者の熱心なる研究に由りて交々廣く相傳せられたることの如き亦知るべきのみ。

今左に明史曆志及び古今圖書集成邊裔典を摘採し、併せ掲げて以て參考の一助と爲す。

亞細亞大陸太古の交通

明史卷三十一曆志

西洋人之來中土者、皆自稱歐羅巴人、其曆法與回同、而加精密、嘗考前代遠國之人、言曆法者、多在西域、而東南北無聞、唐之九執曆、元之萬年曆、及洪武間所譯回曆、皆西域也蓋堯命羲和仲叔、分宅四方、羲仲・羲叔・和叔・則以嵎夷、南交朔方爲限、獨和仲、但宅西方、而不限以地、豈非當時聲教之西被者遠哉、至於周末、疇人子弟、分散西域、天方諸國、接壤西陲、非若東南有大海之阻、又無極北嚴寒之畏、則抱書器而西征、勢固便也、歐羅巴在回同西、其風俗相類、而好奇喜新競勝之習過之、故其曆法與回同、而世世增修、遂非同回所及、亦其好勝之俗爲之也、羲和既失其守、古籍之可見者、僅有周髀、而西人渾蓋通憲之器、寒熱五帶之說、地圓之理、正方之法、皆不能出周髀範圍、亦可知其源流之所自矣、夫旁搜博採、以續千百年之墜緒、

亦禮失求野之意也、故備論之、

支那修交隣國

古今圖書集成邊裔典第十卷

邊裔總部藝文 國家威惠孚洽、天所覆悉主悉臣、以時入貢匍匐闕廷、東南際海、朝鮮・暹羅・瓜哇・凡十有六國、西南彝若婆羅蒲刺加、凡二十九國、其由天方通者、又十有六國、西域則泥刺朶凡七國、其由哈密通者又三十六國、它加以蜀屬者、若烏蒙諸所以粵屬者、若龍英諸所以滇屬者、若平緬諸所以楚屬者、若永順保靖諸所以川陝屬者、若番僧番族又百餘所、其迤北二王朶顏三衛、海西・女直・赤斤・蒙古、諸凡航浮索引之國、日域月窟之民、貢方物稱外臣者、紛不可枚舉也、

印度太秦交通

古今圖書集成邊裔典第四十卷

後漢 桓帝延喜二年天竺國來獻 按西域傳、天竺國、一名身毒、在月氏之東南數千里、俗與月氏同、而

卑濕暑熱、其國臨大水、乘象而戰、其人弱於月氏、修浮圖道不殺伐、遂以成俗、從月氏高附國以西南至西海、東至盤起國皆身毒之地、身毒有別城數百、城置長、別國數十、國置王、雖各小異而俱以身毒爲名、其時皆屬月氏、月氏殺其王、而置將令統其人、土出象犀瑇瑁、金銀銅鐵鉛錫、西與大秦通、有大秦珍物、又布細布好氍毹諸香石密胡椒薑黑鹽、和帝時遣使貢獻、後西域反畔乃絕、西域傳論 論曰、西域風土之載、前古未聞也、漢世張騫懷致遠之略、班超奮封侯之志、終能立功西遐羈服外域、其後甘英乃抵條支、而歷安息臨西海、以望大秦、拒玉門陽關者四萬餘里、靡不周盡焉、

罽
度

天文彙考

第二編 印度

一、印度といふ國號の意義及び國勢

印度といふ語は、譯すれば月なり月多名あり、斯れ其一稱蓋し其土聖賢、和柔を以て人を導き物を御す、譬へば朗月の闇夜を照すが如し、是の義に由りて讚美して、印度(即ち月)を以て國の稱號と爲すといふ。

古今圖書集成 邊裔典

天竺部總論

大唐西域記 天竺

詳夫天竺之稱、異議糾紛、舊云身毒、或曰賢豆、今從正音宜云印度、印度之人、隨地稱國、殊方異族、遙舉總名、語其所美謂之印度、印度者唐言月、月有多名、斯其一稱、言諸羣生輪回不息、無明長夜、無有司、晨其猶白日、既隱背燭斯繼、雖有星光之照、豈如朗月之明、苟緣斯致、因而譬月良、以其土聖賢繼軌導、凡御物如月照臨、由是義故謂之印度、略下

漢代に當りて、國王は衍敦谷に治す、長安を去ること九千八百六十里、戸三百八十、口千一百、勝兵五百人、東のかた都護所に至る二千八百六十一里、疏勒の南に至りて葱嶺と屬す、西のかた葱嶺に上れば

則ち休循也、西北大宛に至る千三十里、北烏孫と接す、衣服は烏孫に類し、水草に随ひ葱嶺に依る、其種族は塞種なり。

古今圖書集成 邊裔典

天山部彙考

漢

武帝 年始通使于捐毒、按漢書武帝本紀不載、按西域傳、捐毒國王治衍敦谷、去長安九千八百六十里、戶三百八十、口千一百、勝兵五百人、東至都護治所二千八百六十一里、至疏勒南與葱嶺屬、無人氏、西上葱嶺則休循也、西北至大宛千三十里、北與烏孫接、衣服類烏孫、隨水草依葱嶺、本塞種也、

傳へ云ふ、其俗は浮圖を奉じて殺伐せず、其國は則ち漢土よりも殷にして玉燭和氣藹然たり、靈聖の降集する所、賢誌の挺生する所、神跡怪奇は則ち理人區に絶し、感驗明顯は則ち事天外に出づ、且仁を好み殺を惡み、敵を^明に^也かにし善を崇^積高^也むと、然りと雖、餘弊の積重する所、遂に文弱に陥り、國破れて山河徒らに存するに至りては千載の下猶ほ歎ずるに餘りあり。

古今圖書集成 邊裔典

西域傳論

其俗奉浮圖不殺伐

其國則殷乎中土玉燭和氣靈聖之所降集賢誌之所挺生神迹怪奇則理人區感應明顯則事出天外

且好仁惡殺獨敵

崇善

二、釋迦

釋迦生滅年紀に就て

釋迦生滅の年紀は、經典に明記せられず、故に古來傳ふる所久うして猶ほ一致する能はざりしに、近時阿盲王迦膩色迦王等の事蹟漸く世に知られ、因りて釋迦の年代亦推定せらるるに至れり、殊致羅婆、佉慮虱吒・文殊師利等は釋迦と同時代なるを以て、是等菩薩仙侶の在世年代亦自ら類推することを得べし。

(一) 釋迦生滅年紀

釋迦の生滅を傳ふる者、古來一致せず或は以て西紀元前一千餘年とする有り、或は以て五百餘年とするあり、近時西洋の考古家亦頻りに探索尋討に従事し、阿盲王(又阿輪迦王或阿智伽王)の事蹟及び同王の天然岩石に刻せし勅令文又加膩色迦王の事蹟等前後相尋て發見せられ、因て釋迦は、支那の孔子と其年代粗々相追隨するものと決せられたり。

英人カンニングハム氏其餘スミス氏ダット氏等亦各々書を著して其見る所を公にし、釋迦の出生を以て大概紀元前五百年頃とせり、又近時佛教大年表の著あり、釋迦出生より明治四十二年迄二千四百七十四年紀元前五八九年出生となるとなし、頃者又印度佛教徒大會は明治四十四年を以て釋迦降誕二千五百年紀元前五八九年出生となる大祭を舉行すとの事を發表するに至れり、釋迦年七十九示寂すと云ふ、今釋迦の始終及び佛經の要義及び豫言等に關する事項を、聊か經籍より摘録し、左に掲載して以て看者の參考に供す。

既に世に知られし如く、佛典は釋迦の教法論說にして、釋迦謝世紀元前四八六年の後に弟子大迦葉が、阿難等五百餘人と共に、追て之を撰述し、綴るに文字を以てし、後ち數百年羅漢菩薩あり、相繼ぎて其義を著論贊明せし者なり。

蓋し佛滅後約二百年前二八六年頃摩揭陀國の阿輪迦王は、尊者帝須を上首として、羅漢一千人をして第二結集を爲さしめ、後又約二百年前八六年頃健駄羅國の加膩色迦王は、尊者脇、世友を上座として五百の阿羅漢をして第三結集を爲さしめ、如此にして遂に經律論三藏大成せられたりと云ふ。

(二) 釋迦の傳記

魏書釋老志

莊王九年は西曆紀元前六八八年

所謂佛者本號釋迦文者、譯言能仁、謂德充道備堪濟萬物也、釋迦前有六佛、釋迦繼六佛而成道處今賢劫文言、將來有彌勒佛、方繼釋迦而降世、釋迦即天竺迦維衛國王之子、天竺其總稱、迦維別名也、初釋迦於四月八日夜從母右脅而生、既生委相超異者三十二種、天降嘉瑞以應之亦三十二、其本起經說之備矣、釋迦出時當周莊王九年、春秋魯莊公七年夏四月恒星不見夜明是也、至魏武定八年、凡一千二百三十七年、云、釋迦年三十成佛、導化羣生四十九載、乃於拘尸那城娑羅雙樹間、以二月十五日而入般涅槃、涅槃云滅度或言常樂、我淨明無遷謝及諸苦累也

佛法金湯編

昭王二十六年四月八日大地宮殿震動、池井汎溢、日有重輪、五色祥光入貫太微、徧照西方、主問群臣、莫測其祥、太史蘇由筮之、得乾之九五、繇曰此西方聖人降誕之相、却後千年教法來、此、王命鑄石記之、置之南郊天祠前、穆王二十三年數有光明來、照主都、疑我寇至、遣相國呂侯出師防之、乃西方聖人說法度、人流光遠及也、五十二年二月十五日大地震動、狂風折木、江河鼓濤、池井沸湧、鳥獸悲鳴、日午有白虹十二道、南北通貫、王憂及社稷、召太史慮多筮之、曰吉、願王無憂、此西方聖人示滅異感也、

佛本行集經

爾時善覺釋種大臣、於彼春初二月八日鬼宿合時、共女摩耶相隨、向彼嵐毗尼園欲往觀看大吉祥地、到彼地已摩耶夫人從寶車下、略是時摩耶夫人立地、以手執波羅叉樹枝訖已即生菩薩、

修行本起經

到四月八日略 明星出時夫人攀樹枝便從右脇生隨地行七步舉手而言天上天下唯我爲尊三界皆苦吾當安之

佛說灌洗佛形像經

照王十六年西曆紀元前一〇二八年

太子以四月八日夜半明星出時生墮地行七步舉右手而言天上天下唯我爲尊當爲天人作無上師

大般涅槃經

須跋陀羅我年二十九出家學道三十有六於菩提樹下思八聖道究竟源底成阿耨多羅三藐三菩提一切種智

菩提流支引經偈云 八年作嬰兒七年作童子四年學五明十年受五欲(合計二十)六年苦行二十五成道(通計三十)四十五年中(三十五より起算す)

教化諸衆生

佛般泥洹經

年亦自七十有九惟斷生死迴流之潤略中 北首枕手脇臥屈膝累脚便泥洹

佛說方等般泥洹經

自我爲聖年至七十九所應作者已究暢汝其勉之夜已半矣中 便般泥洹

翻譯名義集

佛年七十九方始滅度

毗奈耶雜事第三十八

爾時世尊纒涅槃後、大地震動流星晝現諸方熾然、於虛空中諸天擊鼓、時天帝釋說頌曰、諸行無常。是生滅法。生滅滅已。寂滅爲樂。

(三) 佛說の要義及び豫言

隋書經籍志

佛經者西域天竺之迦維國淨飯王太子釋迦牟尼所說、釋迦當周莊王九年四月八日自母右脅而生、姿貌奇異

有三十二相八十二好、捨太子位出家學道勤行精進覺悟一切種智而謂之佛、亦曰佛陀、亦曰浮屠、皆胡言也、華言譯之爲淨覺、其所說云人雖有生、死之異、至精神則恒不滅、釋迦在世教化四十九年、乃至天龍人鬼並來聽法、弟子得道以百千萬億數、然後於拘尸那城娑羅雙樹間以二月十五日入般涅槃、涅槃亦曰泥洹、譯言滅度、亦言常樂我淨、初釋迦說法以人之性識根業各差、故有大乘小乘之說、至是謝世、弟子大迦葉與阿難等五百人、追共撰述、綴以文字、集載爲十二部、後數百年有羅漢菩薩相繼著論贊明其義、然佛所說我滅度後、正法五百年、象法一千年、末法三千年、其義如此、

印度の辰曜觀

前段列宿獸帶編に於て第二表を掲げ、佛典六經二十八宿(即ち二十八星神)名號并に象形星數及び十二宮を對比せり、今本論に於て、右孔竇諫摩藏宿六經本文を摭録して以て其典據を明にすると共に、印度辰曜觀の理想を觀ずべからしむ。

今是等の佛典の論說を以て、史記天官書に對照すれば、佛門の論說は、總じて優越精細なり、而して其鑿天附會に至りては、梵漢五十步百步なり。

舍頭諫經及び摩登伽經翻譯に關する管見

舍頭諫經翻譯者は二十八宿名號を譯する印度意譯に因り、摩登伽經翻譯者は始めて周名の角軫二十八字を用ゆ

舍頭諫經初譯は東漢建和二年(西一四八年)の頃安息國の安清の譯する所にして佛典天文最初の譯經に係り、其二十八宿名號の如き、彩畫乃至象なる印度の意譯名を用ゐ、未だ角乃至軫なる周名を用へず、其再譯は、後ち約百二十年、西晋の時(秦始二年乃至建興元年(西二六六乃至三一三年)燉煌氏の人)竺法護の譯する所にして、左に掲載する所の舍頭諫經即ち是れなり。

開元釋教錄卷第一法護譯經の條第十に記事あり、曰く「舍頭諫經一卷與漢世高出者少異」と、然らば此の竺氏の譯本は、大抵安氏の初譯に由りし者なるを知るべし。

按ずるに角乃至軫なる二十八宿周名は、是れより先き呂氏春秋に現はれ、禮記曲禮に轉載せられ、史記天官書亦記載せり、而して諫經の角軫なる周名を用ゐざりしこと右の如し、予竊に謂へらく諫經譯者安清或は未だ是等の書を見るに及ばざりしにあらざる耶と、惟ふに昔者書を得るの難き、殆

安清傳開元釋教錄卷第一に出づ

んど今人の想像に及ばざるものあり、乃ち史記の如きも、其書は武帝の時征和二年司馬遷の手に成りしかど、其稍々世に出でしは、宣帝の時遷が外孫揚惲の宣布せし時に在りて、遷が著作せし数十年の後に係り、乃ち其書出づと雖、傳寫至難にして、其書容易に得られざりしや固より論なし、後宋代右文の時に至りても猶ほ歐陽修蘇軾諸子の如きは、歴史を見る一一手寫して讀みしこと讀、張猶ほ我が維新前の洋學者が、其當日會讀すべき所を前日手寫せしが如きものあり、何ぞ況や漢末衰亂の世に當りし外來孤立の佛徒安清に於てをや、其書を得るの難かりしこと知るべきのみ、然りと雖、安清或は是等の書を見得たりしにも拘らずして、特見を以て印度の意譯名を用ひしものなる耶、是れも亦未だ知るべからざるなり。

然り而して安清が諫經の譯在りて後ち凡そ七十年、吳の黃武二年西二二三年大月氏の支謙は、印度の竺律炎と共に摩登伽經舍頭諫經を譯するに至りて、始めて角乃至軫なる周名を用ひしこと亦次に掲載する所の如し、而して支謙の如きは、太子傳と爲りて吳廷に在りし者、惟ふに吳廷の祕閣には、是等の書類も備はりしなるべく、又當時、吳廷には太史令陳卓の在るありて、譯者は自ら是等書類の閲讀の便宜ありしや疑なし、是れ摩經に至りて、始めて角乃至軫なる周名を用ひし所以ならむ。今左に諫摩二經を併せ掲ぐるに當りて、姑らく鄙懷を披瀝して以て看者の参考と爲すと云ふ。

一、舍頭諫經

二十八宿最初の譯名は印度意譯

竺法護傳開元釋教錄卷第一に出づ

二十八宿名目

星星象數

舍頭諫太子二十八宿經一名虎

西晉三藏竺法護譯

弗袞袞又問、仁者頗學諸宿變乎、摩登王答曰、學之、何謂、答曰、一曰名稱、二曰長育、三曰鹿首、四曰生養、五曰增財、六曰熾盛、七曰不覲、八曰土地、九曰前德、十曰北德、十一曰象、十二曰彩畫、十三曰善元、十四曰善格、十五曰悅可、十六曰尊長、十七曰根元、十八曰前魚、十九曰北魚、二十曰無容、二十一曰耳聰、二十二曰貪財、二十三曰百毒、二十四曰前賢迹、二十五曰北賢迹、二十六曰流灌、二十七曰馬師、二十八曰長息、是爲二十八宿、又問、一宿爲有幾星、形貌何類、有幾須由、何所服食、姓爲何乎、主何天乎、摩登王曰、厥名稱宿、有六要星、其形像如晝夜周行、三十須臾、而侍從矣、以酪爲食、主乎火天、姓號居火、其長養宿、有五要星、其形如車、行四十五須臾而侍從矣、牛肉爲食、主有信天、姓號俱曇、鹿首宿者、有三要星、形類鹿頭、行三十須臾而侍從矣、鹿肉爲食、主善志天、姓號長育、生養宿者、有一要星、其形類圓、光色則黃、行十五須臾而侍從矣、生酪爲食、主音響天、姓號最取、增財宿者、有三要星、其形對立、行四十五須臾而侍從矣、醍醐爲食、主過去天、名爲材出、其熾盛宿者、有三要星、形像鈎尺、行三十須臾而侍從矣、蜜餠爲食、主舍天神、姓爲和若、不覲宿者、有五要星、形如曲鉤、行三十須臾而侍從矣、乾魚爲食、主醍醐天、姓曰慈氏、是爲七宿、屬于東方、土地宿者、有五要星、其形之類、猶如曲河、行三十須臾而侍從矣、食油稷米、主于父天、姓號邊垂、

游曰、西方第一
悅可宿(周名房
宿)宿名紀事共
缺

前德宿者、有三要星、南北對立、行三十須臾而侍從矣、李果爲食、主於善天、姓號俱曇、北德宿者、有二要星、南北對立、行三十五須臾而侍從矣、以豆爲食、主種殖天、姓號十里、其象宿者、有五要星、其形類象、行三十須臾而侍從矣、蕪子爲食、主臥寐天、姓曰迦葉、彩畫宿者、有一要星、形圓色黃、行三十須臾而侍從矣、主細滑天、姓伊羅所乘、善元宿者、有一要星、形圓色黃、行十五須臾而侍從矣、以果爲食、主于風天、姓善所乘、善格宿者、有二要星、形像牛角、行四十五須臾而侍從矣、油花爲食、主伊羅天、姓曰已彼、是爲七宿、屬于南方、尊長宿者、有三要星、其形類麥、邊小中大、行十五須臾而侍從矣、秬米爲食、主因帝天、姓長所乘、根元宿者、有三要星、其形類鰍、低頭舉尾、行三十須臾而侍從矣、食于根果、主泥掣提天、姓號所乘、前魚宿者、有四要星、其形類象、南廣北狹、尼拘類樹皮師爲食、行十五須臾而侍從矣、主於木天、姓財所乘、北魚宿者、有四要星、其形類象、南廣北狹、行四十五須臾而侍從矣、以蜜餠爲食、主種殖天、姓向所作、無容宿者、有三要星、其形所類、如牛頭步、行六須臾而侍從矣、以風爲食、主于梵天、姓梵所乘、沙耨宿者、一曰耳聰、有三要星、其形類麥、邊小中大、行三十須臾而侍從矣、鳥肉爲食、主種殖天、是爲七宿、屬于西方、貪財宿者、有四要星、其形像調脫之珠、行三十須臾而侍從矣、食卑豆羹、主居麻天、姓曰造眼、百毒宿者、有一要星、形圓色黃、行十五須臾而侍從矣、以粥爲食、主養育天、姓乘魅、前賢迹宿者、有二要星、相遠對立、三十須臾而侍從矣、餅肉爲食、主人是天、姓生耳、北賢迹宿者、有二要星、相遠對立、行三十須臾而侍從矣、以牛肉爲食、主於米天、姓不、流灌宿、有一要星、形圓色黃、行三十須臾而侍從矣、鹿米爲食、主富沙天、姓曰妙華、馬師宿者、有三要星、形類馬鞍、行三十須臾而侍從矣、食魚麥飯、主香神天、姓爲馬師、長息宿者、有五要星、其形類軻、行三十須臾而侍從矣、以鹿米爲食、主于炎天、姓號曰佳、

是爲七宿、屬于北方、

二、摩登伽經

二十八宿翻譯始めて周名角軫二十八字を用ゆ

摩登伽經卷上

吳天竺三藏竺律炎共支謙譯

竺律炎、支謙傳
開元釋教錄卷第
二に出づ

摩登伽經說星圖品第五

爾時蓮華實問、帝勝伽、仁者豈知占星事不、帝勝伽言、大婆羅門、過此祕要、吾尙通達、況斯小事、而不知耶、汝當善聽、吾今宣說、
星紀難多、要者其唯二十有八、一名昂宿、二名爲畢、三名爲觜、四名爲參、五名爲井、六名爲鬼、七名爲柳、八名爲星、九名爲張、
十名爲翼、十一名軫、十二名角、十三名亢、十四名氏、十五名房、十六名心、十七名尾、十八名箕、十九名斗、二十名牛、二十一名女、
二十二名虛、二十三名危、二十四名室、二十五名壁、二十六名奎、二十七名婁、二十八名胃、如是爲二十八宿、蓮花實言、如此宿者、爲有幾星、形
貌何類、爲復幾時、與月共俱、其所祭祀、爲用何等、何神主之、有何等姓、唯願仁者重爲分別、帝勝伽言、若欲聞者、諦聽當說、昂
有六星、形如散花、於十二時與月俱行、祭祀用醢、火神主之、姓毗舍延、畢有五星、形如飛鷹、於一日半、與月共行、藥肉以祭、屬
於梵王、姓婆羅婆、觜有三星、形如鹿首、於一日中、與月共俱、以果爲祭、屬於月神、卽姓鹿氏、參有一星、一日及月俱、酥以祭、
係在日神、姓則安氏、井有二星、形如人步、唯於一日、與月而俱、祭必用蜜、屬乎歲星、亦姓安氏、鬼有三星、形如畫瓶、一日與月而
共同遊、祭以桃花、屬於歲星、姓烏婆若、柳宿一星、半日共月、不相捨離、祭之用乳、屬於龍神、因姓龍氏、有此七宿、在於東方、
其七星者、五則顯理、二星隱沒、形如河曲、一日及月、胡麻祭之、屬於鬼神、姓賓伽羅、
張宿二星、亦如人步、於一日中、與月俱行、以果用祭、其姓善氏、卽屬善神、

星星
象數

二十八宿名目

翼有一星、形如人步、於一日半、共月而行、鮫魚祭之、屬婆伽神、姓橋尸迦、
軫宿五星、形如人手、一日一夜、共月俱行、稗穀祭之、姓奢摩延、屬咀吒神
角有一星、一日及月、以花爲祭、屬咀吒神、姓質多延、
亢宿一星、酥麥少麥祭之、一日及月、屬咀吒神、姓曰赤氏、
氏宿二星、形如羊角、於一日半、共月俱行、以花用祭、屬乎火神、姓桑遮延、
有此七宿、在於南方、

房宿四星、形類珠寶、一日一夜、與月共俱、酒肉爲祭、係於親神、姓阿藍婆、
心宿三星、其形如鳥、一日及月、粳米祭之、屬天地神、姓迦耨延、
尾有七星、其形如蠟、一日一夜、與月共俱、果以祭之、屬沙陀神、姓迦耨延、
箕宿四星、形如牛步、一日一夜、而與月俱、尼俱陀果、以用爲祭、屬於水神、姓迦耨延、
斗有四星、形如象步、於一日半、與月同行、桃花祭之、屬凶惡神、姓伽羅延、
牛宿三星、形如牛首、一時與月、而共同行、不須祭祀、屬於梵天、姓於梵氏、
女有三星、形如擴麥、一日一夜、共月而行、鳥肉用祀、屬毗紐神、姓迦耨延、
有此七宿、在於西方、
虛有四星、形如飛鳥、一日一夜、共月而俱、豆糜爲祭、屬婆藪神、姓橋陳如、
危宿一星、一日及月、粳米爲祭、屬於水神、姓單茶延、
室有二星、形如人步、一日一夜、與月共行、血肉祠祀、其宿屬在富單那神、姓闍闍那、
壁宿二星、形如人步、一日一夜、及月而行、以肉祭之、屬於善神、姓陀闍延、
奎一大星、自餘小者、爲之輔翼、形如半珪、一日一夜、共月而行、醃飯以祭、屬富沙神、姓八殊氏、
婁宿二星、形如馬首、一日一夜、共月俱行、乳糜用祭、
胃有三星、形如鼎足、一日一夜、共月而俱、胡麻爲祭、屬於闍神、其姓拔伽、

有此七宿、在於北方、

三、孔雀王呪經 大孔雀呪王經

釋迦所說二十八宿即ち二十八守護神名號

孔雀王呪經卷上

梁扶南三藏僧伽婆羅譯

伽婆羅傳開元釋教錄卷第六に出づ

禮佛法僧、禮七正徧知及聲聞羅漢三果四向、禮彌勒等菩薩及成就正行、我當說此孔雀王呪、願諸神衆聽我所言、

阿難汝當取諸星神名常行虚空其名如是

基栗底柯 虜喜尼 摩黎伽尸羅 阿陀羅 不奈那婆修 弗沙 阿沙離沙

此七星常於東門守護東方、亦以此大孔雀王呪、願守護我、令壽百歲

訶可 雨頗 求尼 訶莎多 質多羅 莎底 毗釋珂

此七星常於南門守護南方、亦以此大孔雀王呪、願守護我、令壽百歲

阿婆羅他 折沙他 牟藍 弗婆沙他 鬱多羅沙他 阿毗止 沙羅波那

此七星常於西門守護西方、亦以此大孔雀王呪、願守護我、令壽百歲

陀茶他 捨多毗沙 弗婆跋陀羅 鬱多羅跋陀羅 離婆底 阿離尼 婆羅尼

此七星常於北門守護北方、亦以此大孔雀王呪、願守護我、令壽百歲

二十八星方有七、如是七星及日月出沒增減、常行於世間有大光明神通、我以至心願亦隨喜、此大孔雀王呪、願守護我、令壽百歲

佛說大孔雀呪王經卷下

義淨傳右同書卷第八に出づ

唐齊州義淨譯

阿難陀汝當識持有星辰天神名號、彼諸宿星有大威力、常行虚空現吉凶相、若識知者離諸憂患、亦當隨時以妙香華而爲供養、其名曰

訖哩底迦 戶嚩咀囉 篋哩伽尸囉 頌達囉補 伐捺蘇 布灑 阿失麗灑

此七星神住於東門守護東方、彼亦以此大孔雀呪王、常擁護我某甲并諸眷屬、壽命百年離諸憂惱

莫伽 前發魯塞拳 後發孔底拳 訶悉頰 質多羅 婆縛底 毗釋珂

此七星神住於南門守護南方、彼亦以此大孔雀呪王、常擁護我某甲并諸眷屬、壽命百年離諸憂惱

阿奴囉控 跋瑟佗 暮羅 前阿沙茶 後阿沙茶 阿苾哩社 室囉末拏

此七星住於西門守護西方、亦以此大孔雀呪王、常擁護我某甲并諸眷屬、壽命百年離諸憂惱

但備瑟佗 設多婢灑 前跋達羅鉢柁 後跋達羅鉢柁 頡婁離伐底 阿說備 跋曠備

此七星神住於北門守護北方、彼亦以此大孔雀呪王、常擁護我某甲并諸眷屬、壽命百年離諸憂惱

四、大集經月藏星宿攝受品

月藏星宿攝受品に就て

月藏經は二十八宿東南西北四方面に分布し、各々其、主管の衆生を養育し國土を攝護すと説けり。

今是れを支那二十八宿史記天官書に對照すれば、所説の大體恰も符節を合するが如し、而して其所説の精粗亦自ら看取せらるべし。

二十八宿養育衆生攝護國土說

那連提黎耶舍傳
第一開元釋教錄
卷第六に出づ

大方等月藏分星宿攝受品

高齊天竺三藏那連提黎耶舍譯

爾時佛告娑婆世界大梵天王釋提桓因四天王言、過去天仙云何布置諸宿曜辰攝護國土養育衆生娑婆世界主大梵天王釋迦提桓因四天王等而白佛言、過去天仙分布安置諸宿曜辰攝護國土養育衆生於四方中各有所主

- 東方七宿 一者角宿主衆鳥 二者亢宿主於出家求聖道者 三者氏宿主水生衆生 四者房宿主行車求利 五者心宿主於女人 六者尾宿主洲渚衆生 七者箕宿主陶師
- 南方七宿 一者井宿主於金師 二者鬼宿主於一切國王大臣 三者柳宿主雪山龍 四者星宿主巨富者 五者張宿主於盜賊 六者翼宿主商人 七者軫宿主須羅吃國
- 西方七宿 一者奎宿主行船人 二者婁宿主於商人 三者胃宿主婆樓迦國 四者昂宿主於水牛 五者畢宿主一切衆生 六者羯宿主轉提訶 七者參宿主於利利
- 北方七宿 一者斗宿主澆部沙國 二者牛宿主於利利及安多鉢竭那國 三者女宿主鴛伽摩伽陀國 四者虛宿主般遮羅國 五者危宿主著花冠者 六者室宿主乾陀羅國 輸盧那國 及諸龍蛇腹行之類 七者壁宿主軋闍婆善音樂者

大德婆伽婆過去天仙如是布置四方諸宿、攝護國土養育衆生、

五、大集經日藏星宿品

日藏星宿品に就て

釋迦在世の時、殊致羅婆菩薩初め光味仙人是れなり雪山にあり、龍王より苦惱救済を請はれて、天時と和合すべきを説く、時に佉盧虱吒仙人佉羅坻山にあり、歴象に精し、殊致羅婆乃ち佉盧虱吒をして、龍王及び諸天衆の爲めに星宿法を細説せしむ、佉盧虱吒昂宿を以て初宿と爲して胃宿に至る二十有八宿の順次・星象・運行等を説くと同時に、年・月・日夜・時刻の區分、日月五星の配當、及び其他衆生の或る境遇と行事との關係等に涉り、凡そ歴象を解説すると共に、日月星辰等は、國土を攝護し衆生を養育する神物なるが故に、之を知悉し之と和合して、某日は某星を祭り、某日病あれば某藥を用る治癒を某神に祈る等の所爲を以て、難を避け福を求むべしとの大意を布演し、且十二宮神各月の主當管掌を告げ又農時歲序をも説き示せり。

終りに臨み佉盧虱吒、世界は須彌山にして四大天王、須彌山の東西南北各方面を守り、更に此の國土と衆生とを攝護養育すと説了せり。

依盧虱吒の天文説

大集經日藏分中星宿品

隋天竺三藏那連提黎耶舍譯

爾時驢唇即ち依盧虱吒仙人答諸天言
過去劫時見虛空中有諸列宿日月五星晝夜運行各守常度爲於天下而作照明 初置星宿昂爲先首衆星輪轉運行虛空 此昂宿者常行虛空
歷四天下 恒作善事饒益我等我知彼宿屬於火天 「是時衆中有聖人名大威德復作是言「彼宿者」我妹之子」 其星有六形如剃刀
「二日一夜歷四天下行三十字」 屬火天姓鞞耶尼 屬彼宿者祭之用醮 「依盧虱吒仙人語諸天曰如是如是如汝等言」我今以昂宿爲
初宿也、
復次置畢爲第二宿屬水天、姓頗羅墮畢有五星形如立叉、
次置箕爲第三宿屬於月天、「即是月子」、姓毘梨伽耶尼、星數有三形如鹿頭、
次復置參爲第四宿屬於日天、姓婆私失稀、其性大惡多於瞋怒、止有一星如婦女鬘、
次復置井爲第五宿屬於日天、姓婆私失稀、其有兩星形如脚跡、
次復置鬼爲第六宿屬歲星天、歲星之子、姓炮波那毗、其性溫和樂修善法、其有三星猶如諸佛胸前滿相、
次復置柳爲第七宿屬於蛇天、即姓蛇氏、止有一星如婦女鬘、
右此七宿當於東門、
次置南方第一之宿名曰七星、屬於火天、姓賓伽耶尼、其有五星、形如河岸、
次復置張爲第二宿、屬福德天、姓瞿曇彌、其星有二形如脚跡、

次復置翼爲第三宿、屬於林天、姓憍陳如、其有二星形如脚跡、
次復置輪爲第四宿、屬沙毗梨帝天、姓迦遮延、蝸仙之子、其星有五形如人手、
次復置角爲第五宿、屬喜樂天、姓質多羅延尼、軋闍婆子止有一星如婦人鬘、
次復置亢爲第六宿、屬摩妬旃天、姓迦耨延尼、其有一星如婦人鬘、
次復置氏爲第七宿、屬於火天、姓些吉利多耶尼、其有二星形如脚跡、
右此七宿當於南門、
次置西方第一之宿其名曰房、屬於慈天、姓阿藍婆耶尼、房有四星形如環絡、
次復置心爲第二宿、屬帝釋天、姓迦羅延那、心有三星形如大麥、
次復置尾爲第三宿、屬獵師天、姓如迦遮耶尼、尾有七星形如蝸尾、
次復置箕爲第四宿、屬於水天、姓特叉迦旃延尼、箕有四星形如牛角、
次復置斗爲第五宿、屬於火天、姓摸伽邏尼、斗有四星如人拓地、
次復置牛爲第六宿、屬於梵天、姓梵風摩、其有三星形如牛頭、
次復置女爲第七宿、屬毗紐天、姓帝利迦遮耶尼、女有四星形如大麥粒、
右此七宿當於西門、
次置北方第一之宿名爲虛星、屬帝釋天、娑婆天子、姓憍陳如、虛有四星其形如鳥、
次置危爲第二宿屬多羅拳天、姓單那尼、危有一星如婦人鬘、
次復置室爲第三宿、屬蛇頭天、蝸天之子、姓闍都迦尼拘、室有二星形如脚跡、
次復置辟爲第四宿、屬林天、娑婆那子、姓陀難闍、辟有二星形如脚跡、
次復置奎爲第五宿、屬富沙天、姓阿虱吒排尼、奎有一星如婦人鬘、
次復置婁爲第六宿、屬軋闍婆天、姓阿舍婆、婁有三星形如馬頭、
次復置胃爲第七宿、屬閻摩羅天、姓跋伽毘、胃有三星形如鼎足、

右此七宿當於北門、二十八宿有五宿、行四十五時、所謂畢參氏斗辟等、二十八宿言義廣多、難曉深趣不可具宜、我今略說、說是宿時同聞諸天、皆悉歡喜、

十二神主當各月

十二神各月に主當し四種の衆生を救濟す、今節約、唯だ各神主當の月を擧ぐ。

是八月時	蝸神	主當其月
是九月時	射神	主當其月
是十月時	磨羯之神	主當其月
是十一月時	水器之神	主當其月
是十二月時	天魚之神	主當其月
是正月時	特羊之神	主當其月
是二月時	特牛之神	主當其月
是三月時	雙鳥之神	主當其月
是四月時	蟹神	主當其月

是五月時	師子之神	主當其月
是六月時	天女之神	主當其月
是七月時	秤量之神	主當其月

爾時依盧虱吒告天衆言、是諸月等各主當、汝可救濟四種衆生、何者爲四、救地上人諸龍夜叉乃至蝸等、如斯之類皆悉救之、我以安樂諸衆生故、布置星宿各有分部、乃至摸呼羅時、等亦皆具說、

六、寶星陀羅尼經

今本經に於ては唯だ經文中の二十八宿の名を擧ぐるを旨とし、其摘録、極めて省約に従ふ。

光味所說二十八宿と生者身體の徵候

寶星陀羅尼經卷第一

寶星陀羅尼經(卷第四) 大集品第四

光味仙人說星宿

昂星生者、名聞知慧爵祿相應威勢熾盛、

畢星生者、聰徹貞實心常守法、爵祿具足、

婆羅門密多羅傳
開元釋教錄卷第
八に出づ

唐天竺三藏波羅頗密多羅 譯

參星生者、爲性勇健爵祿具足、
 紫星生者、性多瞋癡而有爵祿、
 富那婆蘇^{唐言}井宿星生者、財穀具足而少智慧、
 富沙^{唐言}星生者、有最上相、手中輪相猶如日輪、上妙端正髮相右施、一切依住上身圓滿、能破煩惱爲大導師、
 阿失麗沙^{唐言}柳宿星生者、好鬪犯戒難與^{上七星}東方宿、
 莫伽^{唐言}星生者、是善丈夫能如法行而多財貨、
 初破求^{唐言}星生者、多慳短命、
 第二破求^{唐言}星生者、爵祿持戒皆失壞、
 阿薩多^{唐言}星生者、性好作賊詔曲少智聰明薄福、
 質多羅^{唐言}星生者、爲性純直而多愛欲、復好歌舞、
 薩婆底^{唐言}星生者、受性多貪瞋惱大衆而無智慧、
 蘇舍佉^{唐言}星生者、眷屬具足多有僮僕、常受安樂命終生天^{上七星}屬南方、
 阿奴羅陀^{唐言}星生者、持戒有法爵祿具足、
 逝瑟吒^{唐言}星生者、短壽貧窮犯戒少慈爲人憎嫉、
 暮羅^{唐言}星生者、此有福德而速滅門、
 初阿沙^{唐言}星生者、性好捨施能知法道命終生天、
 第二阿沙^{唐言}星生者、性好鬪諍人不依附而不信受、
 (阿必哩杜、牛宿缺)清云、
 失羅婆^{唐言}星生者、常豐爵祿受身無病、人所愛樂命終生天、
 陀備瑟吒^{唐言}星生者、多瞋少貪、雖有智慧而無爵祿、^{上七星}屬西方、
 (少虛)清曰(虛宿)是原經之誤也、如前記、缺者牛宿也、

清曰、失羅婆、
 非牛宿、女宿也、
 又曰、陀備瑟吒、
 非女宿、虛宿也、

舍多毗沙^{唐言}星生者、爲性愚癡溺水而死、
 第一跋陀羅^{唐言}星生者、令人瞋惱、愚癡貧窮好作盜賊、
 第二跋陀羅^{唐言}星生者、好施持戒念力強記、有智有慧性無所畏、
 麗婆底^{唐言}星生者、爲人卑下庸力自活、
 阿澤毗賦^{唐言}星生者、身無病惱而常大力、
 婆邁尼^{唐言}星生者、受性無悲好爲宰首、破戒惡行死入地獄、^{此北方}七星

七、宿曜經
 宿曜經に就て

宿曜經は辰曜の本源を論し、十二宮神に言及して以て禍福經緯災祥の歷示を述べ、日月五星の體積の大
 小及び二十八宿十二宮の配合を説き示せり。
 蓋し此の文殊師利の宿曜説に至り二十八宿日月五星と十二宮の配當始めて明かなり、乃ち佛門所觀
 の十二神象始て窺ふことを得べし。

文殊師利及び諸仙の天文説

宿曜經 文殊師利菩薩及諸佛
所說吉凶時日善惡

唐内供奉三藏沙門不空 譯

序分定宿直品

天地初建、寒暑之精化爲日月、鳥兔抗衡生成萬物、分宿設宮管、標羣品、日理陽位、從星宿順行、取張翼軫角亢氏房、
心尾箕斗牛女等二十三宿迄至虛宿之家、恰當子地之中分爲六宮也、但日月天子俱以五星爲臣佐、而日光焰猛、物類相
感、以陽獸師子爲宮神也、月光清涼、而物類相感、以陰蟲巨蟹爲宮神也、又日性剛義、月性柔惠、義以濟下、惠以及臣、
而日月亦各以神宮均賜五星以速至遲、即辰星太白熒惑歲鎮排爲次第、行度緩急於斯彰焉、凡十二宮、即七曜之躔次歷
示禍福經緯災祥、又諸宮各有神形、以彰宮之象也、又一宮配管列宿九星、而一切庶類相感、月廣五十由旬、得繫命以求吉凶
大體屬於日二月日廣五十一由旬、風精太白廣十由旬、空精歲星廣九由旬、月精辰宿廣八由旬、火精熒惑廣七由旬、日精土星廣六由
旬、星最小者廣一俱虛舍、日宮下面玻璃之響、火精之質也、溫舒能照萬物、月宮下面瑠璃之響、清涼能照萬物、日月諸曜衆生業置
於空中乘風而止、當須彌之半、踰健陀羅之上、運行於二十七宿十二宮焉、宮宿之分今具說之、更爲圖書耳、

宿昨經の本文に因れば、後に掲ぐる第九表二十八宿日月五星十二宮對比配列表を此の處に置くを以て順序と爲す、然れども余は
謂へらく、先づ初めに、二十八宿の星象星數を明らかにして、然る後ちに第九表に及ぶを以て順序宜し
きに叶ふものなりと、因て今、茲に先づ此の序日宿直所生品第二を擧げ次に第九表を掲載することとな
せり、他日篤志の士、原經と對照するありて、或は前後錯雜せることと疑ふあらんを思ひ茲に一言を附
記すといふ。

○宿曜曆經序日宿直所生品第二(節錄)

昴圖、昴六星形如剃刀、火神也、姓其尼裴若、

畢圖、畢五星形如車、鉢闍鉢底神也、姓瞿曇、
觜圖、觜三星形如鹿頭、月神也、姓婆羅墮闍、
參圖、參一星形如額上點、魯達羅神、姓盧醜底耶、
井圖、井二星形如屋椽、日神也、姓婆私瑟吒、
鬼圖、鬼三星形如餅、藥利訶跋底神也、姓謨闍邪那、
柳圖、柳六星形如蛇、神也、姓曼陀羅邪、
星圖、六星形如牆、禰伽神也、姓瞿必毗耶那、
張圖、張二星形如杵、姓婆蘇神也、姓瞿那律耶、
翼圖、翼二星形如跣、利耶摩、姓遏哩黎、
軫圖、五星形如手、毗婆利神也、姓跋蹉耶那、
角圖、角二星形如長幢、瑟室利神也、姓僧伽羅耶那、
亢圖、亢一星形如火珠、風神也、姓蘇那、
氐圖、四星形如牛角、因伽陀羅祇尼神也、姓邏但利、
房圖、房四星形如帳、布密多羅神也、姓多羅毗耶、
心圖、心三星形如階、因陀羅神也、姓僧訖利底耶那、
尾圖、尾二星形如師子頂毛、彌律神也、姓迦底那、
箕圖、箕四星形如牛步、水神也、姓刺婆耶尼、
斗圖、斗四星形如象步、毗說神也、姓毗耶羅那、
牛圖、牛宿吉甚吉祥、其宿三星形如牛頭、風梵摩神也、姓奢拏耶那、
女圖、女三星形如梨格、毗跋幻神也、姓目揭連耶那、
虛圖、虛四星形如河黎勒、娑婆神也、姓婆私迦耶、

危圖、危一星形如華穗、娑魯拏神也、姓丹茶耶、
 室圖、室二星形如車轆、阿醯多陀難神也、姓闍耶尼、
 壁圖、壁二星形如立竿、尼陀難神也、姓瞿摩多羅、
 奎圖、三十二星形如小艇、甫涉神也、姓曼茶鼻耶、
 婁圖、三星形如馬頭、乾闥婆神也、姓河說耶尼、
 胃圖、胃三星形如三角、闍摩神也、姓婆粟爰

今茲に前項序分定宿直品^{第一}を繼承し乃ち其本文に依り此の第九表を製し、文殊所說二十八宿日月五星と十二宮とを對比配列すれば左の如し。

又文殊は佉盧虱吒よりは、一層皇張して吉凶禍福善惡災祥疾病、及其他の事項を宿曜に附會せり。

八、根本儀軌經

本經に於ても亦斷章取義、頗る節約す、唯だ十二宮と日月五星とを併せ説く所の一斑を示すのみ。

十二宮二十八宿日月五星直日生者の善惡徵候

大方廣菩薩文殊師利根本儀軌經卷第十四

宋西天三藏朝散大夫試鴻臚少卿明教大師天息災奉詔譯

陰陽善惡徵應品第十八

天息災奉詔譯
 歷代通載卷第二
 十六、佛祖統記
 卷四十三に出づ

二十八宿日月五星十二宮對比配列表 第九表

第一	星張翼	太陽位焉、 其神如師子	故名師子宮
第二	翼軫角	辰星(水)位焉、 其神如女	故名女宮
第三	角元氏	太白(金)位焉、 其神如秤	故名秤宮
第四	氏房心	熒惑(火)位焉、 其神如蝎	故名蝎宮
第五	尾箕斗	歲星(木)位焉、 其神如弓	故名弓宮
第六	斗女虛	鎮星(土)位焉、 其神如摩竭	故名摩竭宮
右以上六位、總屬太陽分、已下六位總屬太陰分			
第七	虛危室	鎮星(土)位焉、 其神如研	故名研宮
第八	室壁奎	歲星(木)位焉、 其神如魚	故名魚宮
第九	婁胃昂	熒惑(火)位焉、 其神如羊	故名羊宮
第十	昂畢猪	太白(金)位焉、 其神如牛	故名牛宮
第十一	猪參井	辰星(水)位焉、 其神如夫妻	故名婦宮 又作男女宮 又作夫妻宮
第十二	井鬼柳	太陰位焉、 其神如蟹	故名蟹宮

爾時世尊釋迦牟尼佛，爲利益一切衆生說彼宿曜運行合於善惡，我今所說大儀軌王，當有大利益衆生。

若有衆生生於羊宮合於婁宿胃宿，此等諸宿有力，最宜貨易財寶豐溢，若火星直日是惡生處，若木星直日卯時生者，及得日月星宿於晝夜分合其本位，乃是聖賢生處。

若衆生生於牛宮合於昴宿畢宿，此爲上宮吉星所照，得富貴吉祥忍辱具足，長壽多子豐饒財寶，復得爲君主。

若於陰陽宮生合於婁里識躔星直口，又與紫宿參宿井宿合日生者，此人癡愚善惡不分。

若土星直口於此宮中生者，大富自在有大心力。

若於蟹宮合鬼宿柳宿生者，此所生人而有尊重是最上人。

若於師子宮合於星宿張宿，及得太陽傾日失者，此人有大勇猛。

若於雙女宮生合於翼宿及軫宿者，此人有勇猛好力盜心，或得木星合者，及得木爲本命者，此爲最上。

若於秤宮合於角亢宿氏宿生者，此之生人注短仁義，此宮非善者，若得月照及得金土，同此宿分生者，又世夜初分生者，或得爲王或有富貴。

若人生於蠍宮，合房宿心宿居宿生者，又得火星爲本命，此人主慈心學業成就，若彼火星如童子形，一利那間臨照此宮，若火是逆倒事卽差異。

若人生於人馬宮合箕宿事宿生者，及得木爲本命，若人於午後及夜分生者，或求王位必破自族然後得成。

若生於摩竭宮合於牛宿女宿生者，及得土爲本命，又或得在初夜及中夜早晨生者，又更別有去星曜，同照臨者當得王位。

若人於寶瓶宮生，合於虛宿危宿生者，又得土爲本命，此人若得生於夜分及晨時，又得月或金星臨照者，是人得惡業清淨有大智慧，富貴自在受用快樂。

若人生雙魚宮，合於室宿畢宿奎宿生者，又得金爲本命，又在夜半及日中時，或過中少分已來生者，及得金星及別吉曜同照臨者，法合梵行清淨有大智慧，具最上善知法者祥，若得土木臨照此爲最上，或得爲大國主，若如是者此乃決定知其生味，宮中多有最上吉祥種種之星。

𠄎

𠄎

天文彙考

第三編 支那

一、支那といふ國號の由來

支那といふ國號の世に現はれたるや久し、而も此國號は、西印度が唐を指して支那と爲せしに權輿せり、唐宋以來、其國は亞細亞の大國として倍々世に知られしと同時に、此支那といふ國號も亦愈々久うして愈々廣く世の知る所と爲り、遂に萬國の人、禹域の古今を通じて以て支那と爲すに至りたり。

宋の太平興國七年、西印度の王子沒徒囊、成都の沙門光遠が還るに託して、表及び佛頂印貝多葉菩提樹葉を太宗に進む、三藏施護勅を奉じて表を譯す、曰く伏て聞く、支那國大天子有り、至聖至神富貴自在、曰く、伏て願くば、支那皇帝福慧圓滿壽命延長、施護が此支那なる音譯文字を用ひたるは、蓋し唐譯の舊に因りしものなりと云ふ。